墺地利の實力は其の政策に副はず

へられたり)、更に進んでブルガリアに於て、伯林決議のあるに拘はらず澳地利の血族にして匈牙利軍隊に屬したりしフエルヂナンドを助けて王位を維持せしむ。此の政策にして若し眞に効を奏し、澳地利をして一方に於てコンスタンチノープルの大道を占めしめたる如く、他方に於て露西亞の大道を塞がしめ、露西亞に代りてコンスタンチノープルの繼續者たらしむるあらば、また一利なきにあらず。されど實力は此の如きことを許さず。英國の記者ラニン、千八百九十四年一月の『フォートナイトリー、レビユー』に於て論じて云へるあり——

『過る數週の間、墺地利國内に起れる變革は一見左程の影響なきが如しと雖ども、大に歐洲に關係を及ぼすものあるを知るに足れり。

元來墺地利は其人種、信仰、目的全く相異なる幾多の民の集合して築き成せる王國なれば、國家の抱合力極めて乏しく、僅に國會を通じて動作する朝廷あつて之をまとめ居るのみ。是すら融解合同するの力あらずして、僅かに之を並持突支するのみ。而して其議會なるものは、間接撰擧權と階級代表とを尤も巧みに抱合せしめたる所謂議會の形似ある議會にて、若し夫れ普通撰擧權により眞個に代表的議會を作らば現今の政府は瓦解し去るの外なし。何となれば人民の多數は舊教徒、スレーヴ派、若くは民主派にして、内には墺地利匈牙利合同の主義に反對し、外には三國同盟の政策に反對し、スレーヴスは日耳曼を惡んで露西亞を愛し、舊教徒は佛國に同情を有すると云ふ有樣なればなり。左れば墺地利の人巧作爲的撰擧制度は帝國の維持に必要なると、猶堤防水門の和蘭の存在に必要なるが如し。墺地利に

して階級の特權と間接投票を廢せば、是れ墺地利王國の礎石を除きたるなり。

然るに前の首相カウント、タッフエは社會黨的大臣大臣に動かされて、恰も斯る擧動に出でんとせり。數週の前、彼が議會に提出したる法案は即ち一種の普通撰擧法案なりき、此法案は一内閣を破船せしめ、政府の組織を傷壞したるもの、今法律となることはなかる可し。然も單に斯る法案の議會に提出せられたるの一事は、地地利社會の全層に沸騰を起したり。今や聯立内閣を戴く議院政治の時代は始まれり。而して其所謂聯立の分子なるものは恰も水と油の如き分子なり。斯る政府如何ぞよく運轉せむ。獨り政府のみならず、此結果は已に人民の最下層にまで及び、前首相が播たる毒蛇の齒は何時亂兵となつて生へ出づるも知る可からず。普通撰擧は今や一般の叫なり。

普通撰擧は墺、匈合同の廢止を意味し三國同盟の解散を意味す。且政府は當時一種の撰擧法改革案を調製中にて、議會の多數は已に其主意を贊成せり。此新方案は三國同盟の贊成者を弱ふし、更に人民に普通撰擧を強取するの權杵を與へん。現にボヘミアの如きは已に敵逆的反對をなせり。要するに墺地利に於て三國同盟の確固たる扶助者は唯二つ皇帝及匈牙利人民のみ。

且此度露國が新に地中海艦隊を置きたるの一事は、大に墺地利の爲めに患ふ可きものあり。墺の第一等艦グラホンブリンスルド號は露のニコラス號に若かず、墺の海軍は戰爭準備整ふ迄に少なきも十四日を要す。此間に於て墺の商船を奪ひ、各港を略し、火藥糧庫を壞り、公財を奪ひ、ブダペストの市を占領し、モンテネグロの民に火藥を供してカツタロの町を脅かし、ダルマシア、ヘルツエゴヴイナに兵隊彈藥を送るの道を斷つは容易のことのみ。要するに露國に對する墺地利の位置之れを二ヶ月の前に比すれば遙かに弱點を增加せり』

人種の紛亂、宗教の軋轢に苦しめられて動く能はざる澳匈兩頭帝國が、强て動かんとするは、卑近の譬喩を以て云へば家内の風波に苦しめられ、負債の督促に苦しめられ如何ともする能はざる境に陷りたるものか、

バルカン半島は墺地利に服せず

露西亞は失望せず

ヤケ酒を喫して一時の氣焔を吐くが如き也。

伯林決議の精神を破るも民心を收め平和を維持し得べくは可也。されど墺地利のなせし所は然らず。ボスニアの農夫相罵りて曰く、『土耳其人の怒るや屢々十中の一人を殺戮す、されど墺地利の兇漢は各人の臟腑を抉りて後止む』と。露西亞の政治家は以爲らく、ボスニア人は新來の治者を嫌ふこと最も甚し、蹶起して墺地利人を其の領土より放逐せんが爲めに彼等は只だ露西亞人の合圖を待つのみと。ブルゲリアに於ける作爲的政策、嫉妬的政策の結果は更に甚し。バルカン半島に於て、少數の治者を壓迫し、籠絡したる墺地利は、露西亞の利益の爲めに多數の民信を失ひたりき。千八百七十五年東方問題再燃の煽動者となり、此の煽動に應して蜂起したる人民が土耳其兵に粉碎せられんとするも之を匡濟する爲めに一手を擧げず一足を投ぜず、表面に於てはボスニア及ヘルツェゴウィナ併領の意志曾つてなしとを議員に公言し、裏面に於て、ボスニア及ヘルツェゴウィナを得る代として露西亞をして東バルカンに意を專らにせしむべしとゴルチャコフに約し、而して膏血を流したる露西亞が伯林會議によりて東バルカンに意を專らにすることを禁ぜられたる間に、一兵を

バルカン半島は英吉利を信ぜず

虛僞政策

勞せずしてボスニア及ヘルツェゴウィナを得たる墺地利の虛僞政策を見たるもの、及び此の虛僞政策によりて苦しめられたるもの、焉んぞ現在に於て將來に於てまた墺地利を信ずるを得んや。

英吉利の勢力は能く列國の平衡を保つに足り、能く列國の平衡を破るに足れり。彼若し眞に土耳其國内の平和を恢復し、歐洲の平和を維持せんと欲せしならば、何處までも列國と協同し土耳其をして要求に從はしむべし。彼若し眞に土耳其の存在を維持し露西亞に對抗せしならば、始めより獨力以て其の政策を行ふべし。而して英國の態度、常に然らざるが如く、此の際に於ても然らず、一方に於ては列國と協同して再三土耳其を壓迫し、他方に於ては土耳其に勸めて優柔不斷の策を執らしめ、最後に至りて遂に協同運動の主義を破り、土耳其をして其の助力を賴んで開戰するに至らしめながら、遂に一の助力を與へず、コンスタンチノープルの滅亡眼前に迫るに及び、漸やく決然たる態度を執りたるものゝ如く、これより露西亞をして一歩も進ましめざるべしと公言し、一方に於ては戰備を修めながら、他方に於ては露西亞とも密約し土耳其とも密約し、伯林會議の假裝會によつて歐洲

輕佻浮薄の政策

露西亞は坐視せず

の目を眩まし、土耳其の叛民及希臘の人民を鎮むるが爲めに彼等の要求を貫徹せしむべしと約しながら、自己の利益を攫み、聲譽を張るの外、何事をもなさゞりき。露土戰爭前に於て、伯林會議に於て、平和恢復後に於て、此の如き政策を見、此の如き政策に苦しめられたる人民は、輕佻浮薄、情を賣り節を賣る娼婦を信ずることの英國を信ずるよりも安全なるを見、彼等の眞の友は寧ろ露西亞にありて、眞の敵は寧ろ、英吉利、澳地利及土耳其にあることを感ぜずんばあらず。

土耳其惡むべく、澳地利信ずべからず、英吉利賴るに足らず――露西亞たるもの此の如き感情を利用せずして止むを得んや。此の間の消息、探究するの勞を要せず、乞ふ東京駐劄露西亞公使ミセル、ヒトロウオーに行きて、ブルゲリアに於ける經歷を聞け。

ブルゲリア近日の事、ペルカン半島に於ける露西亞の地位を說明す。十餘萬の人、一億餘萬の金を費し、戰場に苦しみ、會議に辱かしめられ、かくして土耳其の壓抑より救ひ出したるブルゲリアが、放蕩息子の如く直ちに逃走し、條約に於て許されざるフエルヂナントを君主として澳地利の權威を崇め、スタンブロフを宰相として排露政策を强行するを見た

る露西亞の感情、之を推測するに餘あり。露西亞の言は一も二もなく排斥せられたり。而も露西亞は尙ほブルゲリア人に對する信任を失はざりき。露西亞の大臣はブルゲリアの人民が眞にフエルヂナントに悅服し、眞に露西亞に敵意を有することを信ぜず、其の然るが如く見ゆるものは政府の强硬なる政策、軍隊、警官を恐れ、口以て相語らず、目以て相通ずるが故なりとせり。而して此の觀察に基づける計畫は裏面に於て常に行はれたりき、而して此の裏面に於ける計畫は遂に成功すべく信ぜられたりき。國務大臣の一人曾つて云へるあり――

『露西亞はブルゲリア人に對して憤怒するを欲せず。我等の彼等に對するは放蕩兒に對するが如し。暫時の間なすがまゝに爲さしめ獨り苦しましむれば、遂に悔悟して歸り來るべし。かくなるに至りて、露西亞は忍容と寬大とを以て世界を驚かすあらむ。かくなるまで露西亞は待たむ。「時」は露西亞の方にあり、現時の形勢は虛也、決して繼續するものにあらず。

我等の忍耐はゴブルグ家（プリンス、フエルヂナンド）の續くよりも永く續くべし。』

露西亞は只だ拱手して待つのみとの意義、或は之を信ずる能はざるものも、露西亞の政策が目的を有すること遠大なることを否み能ふものはあらざるべし。露西亞黨と非露西亞黨

新ビスマーク

無政府無秩序

との軋轢愈〻甚しく、千八百九十一年三月非露西亞主義を以て有名なる內閣の大藏大臣ベルチエフ要擊せられ、要擊者の目的は彼にあらずして彼と共に公園を逍遙しつゝありたる首相スタンブロフにありしと傳へられ、スタンブロフがブルゲリアの君主及首相を暗殺せんとするの計畫露西亞に關係ありと許き、機關新聞をして露西亞高等官とブルゲリア陰謀者との往復文書を發表せしめ、露西亞が直ちに列國に回章して文書の僞造なることを辨明し、佛蘭西を除くの外、各國の新聞紙スタンブロフを助け露西亞政府を罵りたる時に於ては、新ビスマルク、ブルゲリアに出現したるが如く或るものによりて思はれたりき。而して千八百九十四年五月スタンブロフ內閣倒れ、保守黨及露西亞黨の聯合內閣組織せられたり。而してブルゲリアの地位はナイヤガラ急轉直下の如く、露西亞新聞が常に攻擊したる無秩序無政府の狀態に陷らんとするものゝ如し。スタンブロフ內閣顚覆以來のこと、讀者の記憶に新なり、乞ふ二三の報知を摘記せん。

○勃牙利と土耳其との交涉切迫せり。是れ土耳其が勃牙利人に、マセドニアの騷擾に加擔すべからずと諭告したるに因る(六月二十七日發)。

スタンブロフ暗殺

○ブルゲリア政府は土耳其帝が其のアドリアノープルの司令官に與へたるブルゲリア境界上の事を專決すべき命令の既明を求め、併せてブルゲリア政府は、事情已むを得ずんば、兵力を用ゐて之れに備ふべき旨を通ぜり(七月二日)。

○土耳其は、去る二日の電報にあるブルガリアの要求に對し、極めて溫和なる回答をなしたり(七月四日)。

○スタンブロフ三人の兇徒に暗殺せらる(七月十七日)。

○マセドニアに叛徒を助けて戰死せるブルゲリア人の葬儀を機とし、ソフイアに於て大示威運動行はれたり(七月廿九日)。

スタンブロフ葬儀の混雜、人民の憤激、フエルヂナンドの困難今更說くまでもなし。維納よりの報によれば首相兼內務大臣ストイロフは輿論が極端なる露西亞主義に傾き之を制止する能はざるにより止むを得ず辭職せんとする旨をフエルヂナントに申し送れりと傳ふ。此報、維納が出處なる故に遽かに信ずべからず、逐日の形勢、如何に變ずべきか豫しめ知るべからずと雖、ダニユーブ河は左に迂し右に回して遂に黑海に注ぎ、バルガン山は且つ登り且つ降りて遂に雲表に聳ゆるを見れば、ブルゲリア最後の落着は推測すること難きにあらず。

バルカン半島の形勢、土耳其の狀態曾つて進步を見ず、二十年前の歷史、今日に於て再三

繰り返され、明日に於て、將來に於て繰り返されんとす。土耳其遺産分配論、今に於て却つて英國人の口（ステッドの如き此也）によりて唱へらるもの怪しむに足らず。二十年前『荷物ぐるみ政策』を論して街に唾せられたるグラッドストンか今日となりては、再たび『土耳其は最惡虐の政府なり』と論して保守黨の人士にまで讃聽せられ、『タイムス』かサリスボリーの演說を解釋して『土耳其帝は各國提出の改革案を實行するにあらずんば、列國は依然土耳其の自主權を保護するや否や保すべからず』と論するもの驚くに足らず。

一小變一小動毎に錘は露西亞に傾かんとす、露西亞は終にコンスタンチノーブルへ達すべき乎。誰か其の然らざるを斷言するを得んや。更らに露西亞の力量を詳にせんと欲せば、乞ふ『露西亞の同化力』を論する一章に就きて商量せよ。

第三、印度の寶庫へ。

一、所謂露西亞の南下（再たひ）。

眼あり耳ある世界の人は總て、露西亞かコンスタンチノーブルに向ひ、印度に向ひ南下するの願望を有することを確認する時に於て、最重の寶物を印度に藏せる英人の中に、却つて英露同盟の出來べきこと、露西亞はコンスタンチノーブルに向ひ、印度に向ひて一の野心をも懷かさること、若しくは嘗つて懷き居たる野心を合せ棄て去りたることを論ずるものあることを不思議中の不思議なれ。露西亞は決して印度に向つて慾望を有せずと云ふは、實に、露西亞人は、遺傳以外、歷史以外、常識以外に生存し、他の國民の感情を害ふの外、一の益もなきことを云ひ散す無謀者なりと斷定するもの也。

露西亞人が印度に向つて慾望を有するを示したること近來始まりたることにあらず、印度なるものゝ世界にあるを知りしと殆んど同時に之を得んことを思ひ立てり。

中央亞細亞人民の傳說を綴す

（第一）、中央亞細亞に國を成せる人民は、皆な印度の富を慾望し、其占領を以て勢力の絶頂に達する日となせり。彼等の君主一も印度征服の企圖を懷かざりしはなく、機會あれば常に直ちに印度に向つて進みたりき。性質、言語、風儀、習慣、思想に於て多くの亞細亞的分子を有する露西亞人は、神聖なる傳說の一として此の亞細亞的傳說を有し、「サール」の多數は世界的大帝國建設の最要條件として虎視眈々常に印度を望みたり。露西亞の印度を慾望するはコンスタンチノープルを慾望するに比しく、英人の或るものが云ふ如く、其の英國の有なるが故にあらず、實に何國の有なるに關せずして、露西亞は印度其物を慾望する也。羊を見て慾望を起さゞる狼はあらず、狼のインスチンクト既に然る也。

ペートル大帝の慾望

（第二）、歷史家ソロビエフの云ふ所によれば、ペートル大帝は青年の時より早くも北海より支那及印度に達する水路を發見するに熱中したり。遠からずして、彼は其の夢想の到底實行すべからざるを知りしと雖、尙ほ常に意を留めて印度の實情及び之に達する道路を研究することを怠らざりき。千七百十六年プリンス、ベコウイッチ、チエルカッシーを總督としてキヤを征せしむるや、リユーテナント、コサン及び二名の商人を派してアストラカンより

ポール一世の慾望

印度に到らしむることを命じ、數日の後更に經驗あり技倆ありて言語に通ずるものをして波斯の道より印度に到らしめ、ボカラ及支那を經て歸らしむべきことを命じ、間もなくまた波斯への使臣アルタミオス、ポリンスキイに命じ韃靼人テブラレフをして波斯より印度へ行き支那を經て歸らしめたり。彼はまた印度よりボカラ及モスコウを經てペルチック海に出づる古の貿易通路を興復せんと欲し、オレンブルク、トロイスク及ペトロパブロブスクに貿易館を設立したりき。

（第三）、其後の諸帝、歐羅巴に於ける經營に忙かしかりしも、決して亞細亞方面の經營を忘れず、黃金の山聳へ、黃金の野廣かり、黃金の川流るゝ印度を忘れず、亞細亞方面の事業に關係ある政治家或は商人にして印度征服の夢想を夢みざるものは曾つてあらざりき。千八百年ポール一世、印度征服案を大ナポレオンに提出して贊同を勸めたりき。其案によれば、露、佛兩國各三萬五千人を出し、カスピアン海を渡りてアストラペットに送り、それより波斯、阿富汗斯坦、及ブンジヤブを經て英領印度を侵擊するに在りき。ナポレオンは之を目して行ふ能はざる策となせしが、後チルシット（普魯西亞の一市）に於てアレキサン

アレキサンドル一世及ひナポレオンの同盟征服案

ペロブスキーの名心

パリアチンスキの征服案

ドル一世に會したる時には却つて自ら印度同盟征服案を提出し、千八百七年、八年の間、兩國政府は數々此の計畫につき討議し、ラエラン（波斯の首都）駐劄佛國公使は波斯の同意を得んことを勗めたりき。

（第四）、ニコラス一世、アレキサンドル二世、及アレキサンドル三世に至りては、親しく印度征服を計畫せしを聞かすと雖、其全く印度を忘れざりしは明なる事實によりて證明せらる。オレンブルクの總督にしてニコラス一世の親友なりしカウント、ペロブスキーに親炙せるもの記して云ふ、總督か印度征服のことに關して語るときは、眼輝き、眉昂り、血躍り、肉舞ふの觀ありしと。アレキサンドル一世の親友プリンス、ペリアチンスキ高加索の知事となるに及び精密なる印度征服案を立て、アステラベットよりヘラット及ファラ、ルード及ヘルムンドの谿を經てクラットに達し、それよりインダス河に達する道路の精密なる探究の結果を添へてサンクト、ペラルブルクの内閣に送りて其の承認を得たりしが、時機を待つて發せざりき。

（第五）、露西亞參謀本部に藏められたる印度征服案は百を以て數へらるべく、而して年々幾

參謀本部の征服案

希望目的探究計算あり

多の新案提出せらる。有名なる飛將スコベレッフか立てたる征服案は――アフガニスタンに進み、カブル、ヘラット、カンダール間の地に根據を定めんと云へるものは千八百八十八年三月十三日英國議院の討議に上りたりき。中央亞細亞、アフガニスタン、カフイリスタン、波斯及び印度に關する著書の出版せらるゝもの益々多く、新聞雜誌の之を論することと益々繁きを見れば、印度に對する露西亞人の慾望は增すことあるも減することなきを知るべし。千八百八十七年に於て、露西亞參謀本部に現はれたる三著述の如きは、著者其人の地位に於て、著者其物の性質に於て、最も著しき例となすべきなり。

一、『印度國境論』、參謀本部亞細亞局長セチラル、ソボレフ著。
二、『印度軍事統計要覽』、チセンハウセン著。
三、『印度旅行』、デリーに於ける大演習を觀たる一將校著。

其の初に當りては、茫漠として殆んど無意識的傳說によれる希望なりし露西亞の印度侵略は今や、明白なる目的を有し、熱心なる探究を經、計算せられたる方法を有するものとなりしなり。

（第六）、如何に大切なる慾望も、如何に根底ある慾望も、之を貫徹すること到底出來へから

露西亞人の觀察は慾望を助く

さること明白となりたる時に於ては、如何に執着なるものも、如何に自信强きものも、何時かは其の慾望を抛棄するに至るべし。露西亞は印度侵畧の慾望を有せず、若しくは之を抛棄したりと說くもの、往々にして其の理由の一を此の點に求む。されど露西亞人の言語は其の然らざることを反證す。英國保守黨の亞細亞通を以て知られたるクルゾン曰く、——

『此問題（印度侵畧）につき著述せる各露西亞人によつて暴白せられ、之につきて余が對談せし各露西亞人によつて言明されたる根蔕深き信念（あり）、即ち印度に於ける英國の統治は惡むべく信すべからざる虐政なること、印度人民の多數は塗炭の苦に陷り居ること、最微の閃火にても此の燃燒機の上に落つるあらば、必ず英國の管轄を微塵となすべき爆裂を來すべしとのこと。』

實に印度自立を謀る印度人の中には此の如き感情を有する者少なからず、近頃英露同盟の風說傳はりたる時の如き、露西亞の力を藉りて英吉利の羈絆を脫するを以て最大方便とせる彼等の或るものは、此上は最早、自立の機會なきを明言し、希望なきを痛歎したりき。而して露西亞の外交家は常に此感情を傳播せしめんことを勉めつゝあるなり。千八百八十五年一月『ルス』に載せられたる參謀本部亞細亞局長セチラル、ソポレフの言に至つては更に甚しきものあり——

希望、目的、探究、計算に加へて信念あり

『英吉利は商賈の手を以て其の屬國人民を壓す、彼は只だ英國貿易を盛ならしめんが爲めに彼等を奴隸の境に擠す。印度人民數百萬の餓死は間接に英國の虐政より來れり。而も却つて英國の新聞は露西亞の野蠻國民たる思想を世間に傳播す。印度土民の數千萬は只だ露西亞の救濟十字軍のみを待つ。』

これ單に一種の煽動的虛文字なるのみならず、直ちに露西亞滿腔の願望を暴露し來るものにあらずや。羊を見て慾望を起さるゝ狼はあらず、況んや其羊を得べきの望なきにあらずや。滿腔の願望に加ふるに、其の願望の正當なること、成就すべきことの信念を以てす。誰かよく之を禦き得るものあらんや。其の初に當りては、茫漠として殆んど無意識的傳說に基づき、單に夢想的富源を占領せんとの希望なりし露西亞の印度侵畧は、今や明白なる目的を有し、熱心なる探究を經、計算せられたる方法を有し、成就すべき信念を有するものとなりし也。

英國は果して此の侵略に對して成効せる防禦をなし得たりし乎。

二、高加索征服（上）。

十六世紀の後半に於て、一群の「コッサク」族、ウラル山の東に廣かれる悉比利亞征服の途

無事に十七世紀を過ぐ

に上り、東歐に於ける本部よりも、更に大なる版圖を露西亞に獻しぬ。悉比利亞は殆んど無人の境なりき、其の征服の業が鬼神の業の如く速なりしは固より當さに然るべし。東方は如斯容易なりき、されど露西亞は、これよりして南方に下るが爲めには多くの障礙を排せねばならぬことを發見せり。玆に中央亞細亞方面に於ける露西亞の侵冪膨脹を記述するに當り、便利の爲め分ちて二節となすべし。(一) 黑海と裏海との間、(二)中央亞細亞本部即ち裏海とパミール高原との間。

黑海と裏海との間に於て、露西亞は、一方には嶮惡不通の山地に住し、其の結果として極度まで自由獨立を愛する慓悍決死の種族に會し、一方には昔日の富强は既に早く過ぎ去りたるも、尙ほ嚴然たる國家として存在する土耳其及波斯に會せり。されば十六世紀に於て、ヤルマックに率ひられたる「コサック」が悉比利亞を風靡しつゝある時に於て、テレク河畔の「コサック」は、一歩の地を拓くこともなさず、露西亞政府もまた西方の經營に忙がしく、手を下すこと能はずして十七世紀を經過せり。千七百二十二年ペートル大帝、名を强盜征伐に藉き兵を波斯と交へ、カスピアン西岸のデルベントを取り、次年の役に於て

ペートル大帝の波斯征伐なし

カサリン二世の政略

グルシア併領

更に進んでバクを占領し、波斯をしてデルベント及バクの兩市とダゲスタン、シルワン、ギラン、マザンデラン及アステラバットの諸州を割讓するの條約に同意せしめしが、千七百三十六年に至り全く之を失ひ、露西亞は再たびテレクの左岸まで退けり。

カサリン二世の代となり、プリンス、ポテムキンをしてモスドック、エカテリノダル、スタフロポル及びウラヂカウカスの諸市を建て、モスドック——アゾフの連絡線を建て、着々カウカサスに向つて歩を進めしめ、敗餘の土耳其をしてクーチユク、カイナルヂ條約により、グルシア、イメリシア及ミングレリアの主權を棄てしめたり。此時グルシアは殆んど無政府の狀態に陷り、王族、貴族の軋轢日一日より劇しく、而して煽動陰謀を得意とせるペテルブルクの內閣は益此の勢を助長せり。ヘラクリオス王、失望落膽の餘、遂に地を露西亞に讓らんことを發言し、繼嗣ゼオーシ十三世も同一の意を明し、其の沒するに及び、露帝アレキサンドル一世、遂にグルシアを併領するの宣言を公布したり。グルシアの總督として非常手段を以て鎭壓を行ひ、イメルシア及ミングレリア併呑の道を開きたるはプリンス、ツツアノフなりき。

波斯との衝突

グリスタン條約

タルクマンシャイの條約

土耳其との衝突

アドリアノープル條約

波斯は露西亞がカウカサスを踰へて領土を拓くを見て不快の念に堪へず、千八百十一年露西亞に對して戰端を開けり。勝敗は直ちに決せり。ゼヲラル、コトラレウスキ手兵を提けて波斯嗣子の軍を敗り、カスピアン海岸のレンコランを占領し、千百十三年グリスタンの條約により波斯をして全くダゲスタン、グルシア、イメリシア、ミングレリア及アブカシアを讓るの止を得ざるに至らしめたり。千八百二十六年戰端再たび開け、波斯軍はまたゼヲラル、パスケウイッチに破られ、タルクマンシャイの媾和によりて露波兩國の疆界を確定し、波斯は三百五十萬「ポンド」の償金を拂へり。爾後兩國の平和長く破れず、タルクマンシャイ條約の疆界線は今日に至るまで變せず、露西亞は今尚ほ波斯の首都テエランに於て最も著しき勢力を有す。

グルシア併領の結果として、露西亞は亞細亞方面に於て土耳其と相會するに至りぬ。其の後兩國數々戰を開きしも、利害は常に歐羅巴方面に關して商量せられ、勝敗は常に歐羅巴に於て決せられたり。されど露西亞は常にカウカサス方面を忘れず、千八百二十九年アドリアノープル條約に於て、土耳其をしてアカルチク、アカルカラキ、アナパ、ポチ及び

アナパよりポチに至る黑海沿岸の地を割讓せしめ、千八百七十八年伯林の平和によりて更にカルス及ペツームを割讓せしめたり。かくて露西亞は、東方に於ては波斯に勝ち、カスピアン沿岸の地を得、西方に於ては土耳其に勝ち黑海沿岸の地を得、中央に於ては、兩國をして交々主權を棄てしめ、北方高加索を併せ、中央高加索を併せ、東方に於て歐亞の疆界を破りたるが如く、後方に於ても歐亞の疆界山脈を踰へて後方高加索を併せ、黑海裏海間の地を專有せり。

露西西は既に高加索全土を併有せり。而して此併有を完成せんが爲めに更に大なる困難を排せざるべからず。實に露西亞は更に四十年の心血を此地方に注ぎたり。中央高加索の高地に住める山民は世界に於て最も秀麗なる人種として知られたると共に、最も勇悍なる人種として知らる。彼等は生命よりも獨立を重んじ、宗教の如く名譽を尊べり。而して、此の如き險惡の地に住する種族の常として、侵略、强奪を以て生活となせり。彼等は詩人レルモントフが喩へたる鷲の如く、攀づべからざる絶壁の上に巢を搆へ、得んと欲するものあれば輙ち平野に降つて、之を攫取り、良民を脅やかせり。彼等自ら彼等の住家に他の

高加索人民

ゼチラルエルモロフの經營

高加索同盟

近づき得ざるを信ぜし如く、新たに此地方の主人となりし露西亞人もまた容易に近づき得ざるを思ひ、千八百十六年ゼチラル、エルモロフが總督に任ぜられたるまでは、クバン——アレク線及ウラヂカウカス、チフリス間の連絡線を保つを以て滿足したりき。

ゼチラル、エルモロフ總督となり、其の參謀長ウエリアミノフが所謂、世界最大の城——百萬の人によりて守られ、糧食充實せる世界最大の城を攻撃し始めたり。蟠踞數百哩、高加索全山脈を繞り、四十八年間の合圍長策、此時より始まれり。參謀長の語を借りて云へば、此の世界最長の合圍始まりし時は、此の世界最大の城の守兵は未だ編制組織され居らざりき。されど彼等は、區々隨意の運動を以て整々確實の運動に對すべからざることを速に承知せり。されど極度まで自由を愛する彼等は如何にして一致結合せらるべき乎。露西亞人の勁敵なることは日と共に明白になり、而して之を憎むの念は日と共に增進せり、而して此の憎むべき勁敵の異教徒なることは、此等の人種に特殊なる猛烈の宗教心に點火せり。露西亞人は啻に高加索人のみの敵にあらず、神聖なるマホメットの神の敵なり、我等の神アラー、何すれぞ、其の撰民を憐まざる、何すれぞ人を賜ふて其の撰民の危急を救

新宗教新國民

高加索の英雄シャミル

はざる」と。渴望せる人は速に出で來れり。潔齋的生活と勇辨とを以て著名なるカヂ、ムラ、マホメット出でゝ彼等の教師となり、「ミウリヂズム」の教を立てたり。其の根本的教理に曰く、總ての信徒の平等、異教徒に對する神聖戰爭、個人主義の拋棄、豫言者の繼嗣にして神と人との調和者なる「イマン」に向つて無限の服從。高加索は此の教理によつて一變せり。彼等は屈すべからざる獨立心と、燃ふるが如き宗教熱とによりて一致し、獨裁者を戴き、政法を設け、糧食、彈藥、兵器、人員を供給するの道を立てたり。教師ムラ、マホメットに立てられたる第一世「イマン」が千八百二十九年の末に於て、神聖戰爭を宣言したるの時、ダゲスタン及アベリアは直ちに來つて其の麾下に投せり。

三、高加索征服（下）。

高加索戰爭史に不朽の雄名を止めたるは第三世にして最後の「イマン」なるシャミルなり。彼は卓越なる資性を稟け、强大なる腦力を有し、拔倆ある治者として剛毅なる元帥として、二十四年間露西亞全身の力を愚弄せり。彼終に捕虜となりたりとの報傳はりたる時、直ち

組織されたる高加索人

に之を信したる露西亞人はあらざりき。

最初よりシャミルの有したる兵力は甚だ多かりしも、人心の統一全からず、身を以て僅かに免るゝ敗を取りたること數々なりき。千八百四十年に至つて、漸く全土の歸服を得、アウル、ダルゴに本據を定め、二年にしてタゼスタン及ゼズナ人を服し、極力全土の經營組織に着手せり。組織者として非常の技倆を示したる後、千八百四十三年、ウンズクル、ザタニック、モクソック、ゼルゼビル、チャンサック其他の諸砦を陷れ、戰利の大砲を以て自家の砲兵旅團を組織し、戰鬪者として非常の技倆を示して勢力の絶頂に上れり。組織は勝利を意味す。高加索人が如斯、組織を立てたる時に於て、露西亞人は却つて、エルモロフの組織と畫策とを失へり。千八百二十七年エルモロフに代りたるゼチラル、パスケウイッチは、波斯及土耳其との戰爭に雄名を博したれども、高加索に關する智識を有せざりき。パスケウィッチの後、總督の任命なく、全線分かれて右翼、左翼、中部及黑海沿岸の四區となり、各區の司令官、個々任意の運動をなす間に統合的勢力なるシャミルは獨り意を擅ちにしたりき。

プリンス、チロンソフ

プリンス、パリアチンスキー

シャミルの最後高加索平定

此に於て露西亞政府は其の失策を曉り、千八百四十四年プリンス、チロンソフを擧げて總督とせり。チロンソフ大擧して掃蕩の任を全ふせんとし、進んでシャミルの本根アウル、ダルゴを占領せしも、糧食續かず、千八百四十五年末の退陣に大敗してより、エルモロフの策を繼ぎ、長圍を築き徐々に歩を進めたり。合圍の策愈々堅固にして兵力愈々增加せられ、千八百五十五年、プリンス、パリアチンスキー、千八百四十年來露人に對して禁土たりしチエチエーニアを貫きたり。千八百五十六年パリアチンスキー、總督の任を執るに及び、合圍愈々密となり、攻擊愈々嚴となり、次年には全くチエチエーニア高原を占領し、千八百五十八年にはブラック諸山合擊の策を定め翌年四月シャミルが據れる堅城ウエデノを陷れ、八月グーニダを拔きて遂にシャミルを虜となせり。露軍シャミルを獲たる後西部高加索に全力を用ひ、幾多の苦鬪の後、千八百六十四年五月二十一日グランドデューク、ミカエル（千八百六十三年パリアチンスキーに代りたる）高加索全土鎭定を露帝に上聞したりき。

千八百五十五年土耳其の將オメル、パシャが二萬の兵を率ゐてスークム、クールに上陸し、

高加索の價値

クタイスに迫りたる時、西歐の聯合軍がクリミア半島に希望少なき戰爭をなすことなく、高加索に其の鋭鋒を向けしならば、高加索は遂に露西亞の有にあらざりしやも知るべからず。セバストポールの創痍は速に愈へたり、此時露西亞若し高加索を失ひしならば、其の損害は如何なりし乎、何時恢復する時あるべかりし乎。西歐特に英吉利は四半世紀を經ずして再たび東方問題の切迫する不幸を見ざりしやも知るべからず、土耳其の病床に侍して日夜心痛するを要せざるやも知るべからず。

『政治上及社會上の露西亞』の著者チコーミロフ曰く――

『彼等と戰ふことは我等の必要に驅られたる也。大概皆な回々教徒たりし人民は總て土耳其の治下に屬せり。土耳其の守兵は黑海岸に於ける城砦を保てり。山民の反亂は高加索に於ける土耳其兵の運動を保護せり。土耳其と露西亞との不斷の戰爭は論理的に云へば山民との戰爭なりき。』

ウラヂキンは高加索を掃蕩せざるより生ずる危險を論じて曰く――

『これ危急の時に於ける露西亞防禦の問題なりき――否、否、露西亞死生の問題なりき、故に高加索人を鎭定せざるは罪たるべく、將た彼等に酌して從來の地に生存せしむるは罪たるべし。』

以て高加索の價値を知るべく、之を領有し、鎭定せんが爲めに露西亞が其の全力を盡したるを知るべし。千八百〇四年には露西亞が高加索に有する兵僅かに三千なりき、二十年に至り、「コサック」を除き二萬八千を備へ、五十三年に至りては增して二十八萬となし、之を征服せんが爲めに時日を惜まず、費用を惜まず、之を鎭定せんが爲めには人情を惜まず、最も慘酷なる方法を以て、其の住民を放逐し撲滅するに至り初めて止みたりき。

況んや、これによりて、征服侵畧の新天地、露西亞の前に開かれたるをや。

四、中央亞細亞征服（上）。

乞ふ、中央亞細亞に於ける露西亞侵畧の事蹟を尋ねむ。露西亞は此の地方に於て、人と戰ふのみならず、茫漠たる「ステップ」、汚泥深き湖沼、不毛無人の砂漠の如き最も頑固なる天然と戰はねばならぬ困難に際會せり。

イオワン烈帝カザンを取るや、小兒を除くの外總ての男性住民を死に處し一人も剩さしめざりき。南方の諸汗此の果斷に怖れ、爭ふて貢獻し、露帝の臣民たらんことを乞ひ、千五百五十六年にはウラル山の南方に住める「バシユキル」種族、款を通じ來りぬ。數年にし

ペートルの事業

てウファ、ピルスク、メンゼリンクス、ホグルマ、チエリアビンスク等の新殖民移住市建てられ、ウラル州の總督府ウファに建てられたり。

ペートル大帝、悉比利亞の總督プリンス、カガリンよりヤーカント附近の地金鑛に富むとの報告を聞き、千七百十四年、ブコールツをして二千人を率ひ、イルチツシユ河に沿ひて進みヤルカントを占領し、夫よりカスピアン海に達する水路を探索せしめたり。ブコールツは命の如くヤルカントまて達する能はざりしも、イルチツシユ中流の地を征服してオムスク市を建てたりき。幾何もなく、ホパに使せるプリンス、ベコウイツチ、チエルカスキーが介したる「トルコマン」人の説――アムー、ダリアはカスピアン海に注ぎ居りしが、「ウスベツク」種族土工を起して之をアラル海に導けり、故に舊水路を回復する爲めには「トルコマン」種族喜んで力を盡すべく、此の種族の應援を得ばトルキスタン諸汗を征服するは最も容易なりとの説に誘はれて、第二の中央亞細亞遠征隊派遣せられたり。千七百十六年チエルカスキー四千人を率ひて、アストラカンよりカスピアン海を渡り、アムー、ダリアの舊河口クラスノボドスクに上陸し舊河底に沿ふて進むこと九哩にして道を失

バシユカル地方の殖民

キルギツツ征服

ひたり。次年、方針を變じて陸路直ちにキバに進まんと謀りしも、キバの附近に於て二萬四千の土兵に會し、塵殺の最期を遂げたりき。

かゝる間にバシユカル地方に於ける露西亞の殖民地は漸次發育せり。飛石の如く一歩一歩進んで築かれたる城砦及殖民地、ウラル河畔のイレツクよりオルクスに出で、マグニトナに出でトボル河畔のゼルニゴロブスカイア、スタニツツアに達し、オムスクより支那境に至る悉比利亞線と連絡を通じ、キルギツツ種族に臨めり。

キルギツツは、西、カスピアン海及ウラル河によりて限られ、北は悉比利亞により、東はクルヂヤ及支那帝國により、南はアラル海及シル、ダリア河によりて限られたる廣大の土地に遊牧する種族にして、曾つてヂンギス汗及タメルレーン大帝國の一部たり、十八世紀に於ては、大、中、小の三種族に分れたりき。彼等は他の中央亞細亞種族と同しく軋轢、分裂爭鬪によりて相互に自ら弱め、十七世紀の末には早くも自ら保つ能はずして露西亞の助を乞ふものなりき。千七百三十年小「キルギツツ」のアブヂユル、チエール汗コーカント人を禦く能はずして自ら露西亞に獻して其の助を乞ひ、ウラル附近の小種族を領する數多の「ソ

小キルギッツの服從

カルムック族圧殺

ルタン」も服從の宣誓をなしぬ。露西亞は固よりよくキルギッツの組織を知り、諸「ソルタン」服從の宣誓の頼むに足らざるを知り居たりしも、其の外交家は知らざる風を裝ひ、一の汗と小「ソルタン」の降服を以て總ての汗の降服となし、小「キルギッツ」の服從を以て全「キルギッツ」の服從となし、「キルギッツ」の內事に干涉する辭柄を作り、良民保護、暴徒逮捕の名を以て二千の騎兵を「キルギッツ」領に送れり。

「キルギッツ」の西に當り、エンバ、オル、ウラル及ボルガ河の間に、「キルギッツ」と同じく蒙古の子孫なる「カルムック」種族住めり。彼等は露西亞の主權を認識し、露西亞の爲めに補助兵力を供給すると共に、其の風習傳說を保存し、自己の「ソルタン」を戴けり。されど露西亞は其の領內に於て長く露西亞以外の制度の存立を忍容し得るものにあらず、千七百六十一年回々教徒の風習を破り、十三歲の幼者を立てゝ汗となし、施政委員を置きて實權を握らしめたり。「カルムック」族、此等の專擅破格に激し、遂に貴重なる國風を失はんことを怖れ、千七百七十一年蒙古の舊土に歸らんとて出立せり。彼等の準備は極めて秘密を保たれ、露西亞政府が事實を聞知したる時は全「カルムック」族三十二萬餘の大衆が

露西亞の權威大に震ふ

中キルギッツ降服

既に旅行を始めたる時なりき。露西亞は此の大移住を防遏するに足る兵力を有せざりしかば、「カルムック」人水火の敵たる「キルギッツ」族を誘ふて其の力を借りたり。かくて「カルムック」族、安全にウラルを渡りたる時、「キルギッツ」人の爲めに四方より圍まれ、「コサック」騎兵の爲めに驅り立てられ、其の大半は殺され、僅かに少數のもののみ支那の本土に達し、殘れるものは「コサック」の間に散布せられぬ。傍觀せるものは此の果斷に畏怖し、用をなせるものは其の報酬に悅喜し、これよりして露西亞の權威、中央亞細亞に暢張せり。

千七百九十七年ブケエフ、ソルタン其の部下壹萬二千幕（戶と稱せられずして幕と稱せらる）を率ひて「カルムック」種族の遊牧し居たる地に移住せり。此他舊土に安んぜる「キルギッツ」はオレンブルク及オムスク總督の管轄に隸せられたり。中「キルギッツ」の數「ソルタン」は間もなくオムスク總督の勸誘に從ひ露西亞に服從することゝなりぬ。

キルギッツは東西兩方面より侵略征服せられたり。西は。オレンブルクを根據としたるオレンブルク線、東はオムスクを根據としたる悉比利亞線漸次延長せられ、殖民市及城砦一

大キルギッツ降服

歩一歩進められ、楔子の如くキルギッツの腹心に打ち込まれ、各種族相互の分裂爭鬪を甚しからしめたり。

悉比利亞の方面よりは、アレキサンドル一世の時代に於てイシム及ヌル水源に達し、コクチエタフ、カラカリンスク及ペヤン、アウルの「コサック」殖民地を立て、ニコラス一世の時代に於てアクモリンスク、セルヲオポル及コパルを立て、千八百四十七年に至り、大「キルギッツ」來つて露西亞臣民に編入せられんことを請へり。大「キルギッツ」服從して露西亞版圖の擴張は一大進歩をなし、遠からずしてイリの流域及イシク、クルの湖畔に達せり。

オレンブルク方面よりの進歩は悉比利亞方面よりも遲緩なりき。千八百十年所謂新線路イレク河に沿ふて造られ、ウラル、イレク及ベルヂアンカ河に夾まれたる地編入せられて「オレンブルク、コサック」の領となれり。千八百三十年オレンブルクの總督に任せられたるカウント、ペロブスキーはニコラス一世の親友として印度征服の大願望を懷き、中央亞細亞に於て大事業を成さんとの功名心燃ゆるが如くなりき。されば千八百三十二年オルス

ペロウスキーの計畫

キバ遠征の結果

ク城よりウイ河上のペレゾウスコーの村に達する新線路を立て、千八百三十三年カスピアン海岸にノボ、アレキサンドロウスクの城を立つるが如きを以て滿足する能はず、ペートル大帝以來印度に達する飛石として慾望せられたるキバ征服を企てたり。キバは由來强盜の本據として「キルギッツ、ステップ」を通過する商隊を劫やかし、中央亞細亞貿易の最大妨害者たりき。しかのみならず「トルコマン」族及「キルギッツ」族の虜となりたる露西亞人は多くキバに送られて奴隸となれり。此等の事實を理由として四千の兵と九千の駱駝とを以て組織されたる遠征隊派遣せられたり。カスピアン海とアラル海との間なるウスト、ウルト沙漠を横斷せねばならぬ困難を慮り、冬期戰爭の計畫定められ、千八百三十九年十一月二十九日ペロウスキー遠征隊を率ひてオレンブルクを出發したりしが、駱駝は嚴寒に冒されて死し、馬は積雪に妨げられて進まず、翌年六月莫大の損傷を受けてオレンブルクに歸れり。

遠征隊は失敗したるも、遠征隊の派遣せられたる事實は大にキバ人及び英國を警醒し、英國政府はキバの汗に勸めて露西亞捕虜を解放せしめ、ニコラス一世も英國の感情を和げん

ゼチラルオブルゼフの經營

爲めにペロウスキーを免し、ゼチラル、オブルゼフを以て總督となせり。

オブルゼフは少しの人と少しの費によりてウラル河よりアラル海に至るまでのキルギッ沙漠を征服するに着手せり。測量探檢を盡して後、千八百四十五年より新交通線を造り、カラ、ブタク河に同名の城を築き、イルギッ河にウラルスクを、サルガイ河にオレンブルクを立て、千八百四十七年の終に至り、アラル海に達してシル、ダリアの河口を占領しレイムスク（後にアラルスク）を立て、更に第二の城をコス、アラルに立て、アラル海軍の根據地となしぬ。これより轉じてカスピアン海の東岸に手を下し、マンヤシユラク半島にアレキサンドロウスクの新城を築きたり。形勝の地を占めたる新城は敏捷の活動を以て大に勢力を振ひ、オレンブルク政府をして城砦附近の「トルコマン」族の中、何れを以て露西亞の臣民と認むべきやをペテルブルクの外務省に問はしむるに至りぬ。此時露西亞政府は東方に露西亞の限界なしと答へたりき。

未開種族に對しては鐵鞭を用ひねば功を奏する能はず。されば露西亞は容赦なく擾亂者を罰し、罪を犯せる種族は直ちに放逐し、爭ふべからざる威嚴を以てキルギッ沙漠を掃蕩

ニコラス即位二十五年節の最大紀念物

コーカント征服

せり。千八百五十年ニコラス一世即位二十五年を祝したる最大の紀念物は、露西亞が此地方にて征服し得たる地は、佛蘭西及西班牙の全土を合したるものに敵すと云へるオレンブルク總督の宣言なりき。

五、中央亞細亞征服（下）。

（第一）コーカント　露西亞既にキルギッを併せ、アラル海を領して、キベ、コーカント、ボーカラの三汗、望むがまゝに征服し得べき地位に立てり。內部の軋轢爭鬪をのみ事とせる彼等は繰返して云ふまでもなく露西亞の敵にあらざりき。何れにても容易に征服し得べき露西亞は英國の輿論と西歐に於ける利害とを商量して先づコーカントに向ふを決したり。侵略の辭柄は直ちに作られたり。此の時コーカント人はシル、ダリア河畔に城砦を有し、時にキルギッに出でゝ掠奪をなせり。露西亞はキルギッを征服し得たる前より既にキルギッ保護の名を以てコーカント人の城砦を攻擊し、千八百五十二年にはゼチラル、ブララムベルク二三の小砦を陷れ、翌五十三年には再任オレンブルク總督カウント、ペロ

クリミア戰爭の影響

ウスキー歩兵七百五十、「ウラル、コサック」四百、「パシユカル」人二百、大砲二十三門の小兵を率ひてアク、メスエットを陷れ、コス、アラル及アラルスクの舊城を捨て新たに第一砦を築き陸海の根據となし、シル、ダリアに沿ふて第二砦及ペロウスキー城（アク、メスエット）を築きたり。

シル、ダリアに沿ふてペロウスキーまで達したるオレンブルク線と支那の西境に沿ふてイリ河まで達したる悉比利亞線との間には六百哩以上の間隙あり、コーカント人の自由に出入し隨意にキルギッツを掠奪するを許したり。此に於てオレンブルク、悉比利亞兩總督、ペテルブルクの内閣と會し、兩方より同時に起りて兩線の連絡を通ずることを決したりしが、間もなくクリミア戰爭の破裂に會し、殆んど十年間、露西亞は著しき進歩を中央亞細亞に於て見る能はざりき。されど全く進歩なきにはあらず、悉比利亞方面よりはウエルノー城、次でカスラック城築かれ、千八百六十年にはコロチル、チンメルマン、チユーの流域に進み、トクマック及ピシユペックを取り、マウリー、アタまで探檢隊を出し、シルダリア線よりはユレツク城築かれ、ヤニ、クーラン取られたり。

オレンブルク及悉比利亞よりの協同運動

タシユケンドの要地

ボーカラ征服

千八百六十四年に至り、兩方面よりの協同運動始められ、東よりはゼチラル、ゼルニアイエフ二千五百人を率ひてアウリー、アタを取り、西よりはコロチル、ウィエロフキン千二百人を率ひてタルキスタンを取り、チユーの流域とシル、ダリア流域との連絡を通じ、コーカント線を作りたり。同年の秋、コーカント線司令官ゼチラル、ゼルニアイエフ、チユムケントを取り、次年チナツツ及タシユケントを取れり。タシユケントは七萬の人口を有する中央亞細亞主要の都市たり。之を取りしより露西亞の進歩は甚だ迅速なりき。

後千八百七十五年コーカントの民、コダヤール汗の虐政に驅られて蜂起し、首領アブヂユラマン、露西亞人に對して神聖戰爭を宣言するや、ゼチラル、カウフマン直ちに所謂同盟者の危急に赴き、反亂を鎮めてナマンガンの領地を取り、次年再たび起れる反亂を機として遂に全くコーカントを併呑せり。

（第二）ボーカラ　千八百六十六年ゼチラル、カウフマン三千六百人を率ひてボーカラの君をイルヤールに破り、次でコーカント人の城コーサエントを取り、ボーカラ人の城、ウラチウブ及ヂサックを取り、ボーカラの君をして和を容れしめたり。千八百六十七年オレンブ

タルキスタン總督府新設

サマルカント

セルブル條約

ルク總督府廢せられてタルキスタン總督府新設せられ、タシユケントを以て其の本部と定められたり。ポーカラ人既に和を講じ、ゼチラル、カウフマン、タルキスタンの總督となるに及びコーカント人をしてまた和を容れしめしが、千八百六十八年、回々教の狂熱は、ポーカラ人をして異教徒露西亞人に對して再び戰を開かしめたり。カウフマン直ちに之を破り、タメルランの首都サマルカントを占領せり。

ポーカラ人再たび敗れて再たび和を講じ、セルブルの條約により莫大の償金を拂ひ、サマルカント、ドヤム、クルキ、及チヤル、ヲユイの地を割きてより、眞に露西亞に歸服して其の保護を求め、汗自身も其の子をペラルブルクに送り「ザール」の監督を乞ひ、露西亞もまた屢々力を供して反亂を鎮定せり。かくて中央亞細亞に於て最も富强、勇悍にして露西亞第一の勁敵たりしポーカラは今や僅かに獨立の形骸を抱きて滿足するに至りぬ。敗北は常に全滅を意味したる中央亞細亞に於ては、無慈悲の殺戮をなし、無遠慮の併呑をなしたる露西亞も、單に敗者をして獨立生存の名を保たしむることのみによりて、最も寛大なる勝者なりと感謝せられたり。

キバ征服

突厥征服

(第三)キバ　次でキバの運命は廻り來れり。千八百六十九年露西亞は既にカスピアン海の東岸クラスノウォドスクを占め、次でチキミユラルを占め、漸次トルコマン族を征服し、キバに達する道を探檢せり。準備充分に整ひ、口實容易に設けられ、千八百七十三年キバ征服の擧決せられ、クラスノウォドスク、ペロウスキー、及オレンブルクより三路の兵派遣せられたり。三路の兵、近きも四百八十哩、遠きは八百四十哩の道を越へて無事キバに達し又に血ぬらずしてキバを征服せり。アムー、ダリア右岸の地を占領し、ヌスキ及ペトロ、アレキサンドロウスクに城き、二百二十萬「ルーブル」の償金を取り、未來永劫に至るまでの重荷を課したる露西亞人は、ポーカラに於けると同じく、汗の子をして位を嗣がしめ獨立の名を有せしむることによつて、感謝に餘る恩惠を施しぬ。

(第四)突厥　ゼチラル、クロパトキンが其著『中央亞細亞に於ける露西亞の侵畧』に於て云へるが如く、三汗既に征服せられたる後は、トルコマン種族の國のみ沙漠に於ける擾亂の唯一中心として殘れり。カスピアン海の東岸一帶の地を占め總數百萬以上に達する彼等は中央亞細亞に於ける最も慓悍無頼の種族として、阿富汗人を除くの外、如何に勇强なる

突厥人の性行

ヨムーツ併呑

種族も彼等の襲擊掠奪を防禦する能はず、『トルコマン來』の聲は兒女の啼を止むるに足りたりき。『神ファ第一、馬及兵器第二、家族及親屬第三』と云へるもの彼等の宗教にして『再たび試みよ、若し成功せずば三たび繰返せ』と云へるもの彼等の規則なりき。露西亞が此地方を征服せんとの意志は千八百二十五年より表示せられたり。後に有名となりしムラウイエフ此年、命を受けてクラスノウォドスクよりキペに至る間を探檢し、千八百三十五年にはカレリンの探檢グルガン河よりクラスノウオドスクまで達し、夫より毎年、或は學術の衣を着け、或は商業の帽を戴きたる露西亞檢探員のカスピアン東岸に彷徨するを見ざる年はあらざりき。かくて西歐諸國が夢にも此地方を見ざる前に露西亞は既に地理人情の詳細なる智識を蓄へたりき。千八百三十六年には「ヨムート、トルコマン」君主の二三を誘ひて露西亞の權威を承認せしめしが、キルギッツ征服、三汗征服の後までは決然たる運動を始めざりき。千八百六十九年クラスノウオドスクの建てられたる後に至り、始めて「ヨムーツ」を併せて露領に編入し、キシル、タキルに於て服從せざるものを破り、チキシュラルに根據を定めたり。「ヨムーツ、トルコマン」の東に住める「テッケ、トルコマン」は

スコベレフの事業

テッケ、トルコマン征服

アスカパットの要地

富强なる「トルコマン」中の最も强く最も富みたるものなりき。千八百七十四年トランス、カスピアン總督府置かれぜヂラル、ロマキン其司令官に任ぜられてより、遠征隊屢〻派遣せられ屢〻敗北し、千八百七十九年ロマキン自ら大敗の苦を嘗めたり。此に於てペテルブルク政府はゼヂラル、スコベレッフをして歩兵七千五百、騎兵三千、大砲百門を引率して一舉征服の功を擧げしむるに決したり。驍勇の名は此役によりてスコベレフに與へられたり。運動は六月より始まり、千八百八十一年正月、三萬の守兵を有せる「ゲオク、テッケ」の城屠られ、守兵の殆んど半數、戰士として捕虜として殺戮せられ、婦人小兒に至るまで虐殺せられたり。此一舉、直ちに中央亞細亞最强種族の力を碎き、一群また一群、順次之を征し、之を降し、スコベレッフの嚴勵に嗣ぐにゼヂラル、ロールベルクの惠政を以て之を和らげ之れを懷け、アスカパットに新根據地を定めたり。

アスガパットは「トルコマン」地方の政治的中心たるのみならず、直ちに商業的中心となり、單に露西亞に服從せる「トルコマン」のみならず、尙ほ獨立を有せる多くの「トルコマン」を吸集せり。半は商業の目的を以て、半は見物の目的を以て最も多くの客をアスカパット

メルフの要地

コマロフの事業

突厥酋長露帝即位式に招かる

に送り出したるはメルフなりき。メルフは「テツケ、トルコマン」よりも更に多くの人口(二十五萬)を有し、更に廣き土地を有する獨立「トルコマン」の中心にして、蒙古以前の時代には『世界の女王』と稱せらるゝ榮華を有し、此時尚ほボーカラ及ペルシヤ間の商隊の爲めに最もよき停泊地たりき。露西亞將軍の好標本たるゼチラル、コマロフ、ロールベルクに代りて司令官となり、千八百八十二年二月、有名なるアリカノフを長として一商隊をメルフに派遣したり。アリカノフ、メルフに留まること二週間にして、メルフは「ゲオク、テツケ」の如く殺戮を以て取るべからず、半ば熟したる林檎をして露西亞皇帝の懷に落ちしむるには只だ幾何の時日と忍耐を要せば足るとの觀察を齎らし歸りぬ。實にメルフには曾つて「ゲオク、テツケ」の防戰を率ひたるマクヅム、クリ汗あり、「ゲオク、テツケ」降服の後、全く心を變じて露西亞の良友となれり、而して彼はメルフ諸酋長の中最も勢力あるものなりき。アリカノフは此の勢力ある汗がモスコウに於けるアレキサンドル即位式に臨むの約束をも齎らし歸りぬ。露西亞大皇帝即位式の壯觀宏景、如何に半開酋長の眼を眩ましたる乎、彼が歸りて語りたる所のものは、如何にメルフ人の亞細亞的想像力を擾した

メルフ降服

る乎。これよりしてメルフ突厥の露西亞に心を傾くるもの其數を增したること疑ふべくもあらず。

かゝる間にゼチラル、コマロフは漸次手を南東に延ばし、コロチル、ムラトフを派してアスカバットより百三十哩、メルフ(九十哩なるテゼントの「オーシース」を占め、平和的手段を以て成効せざる時の爲め豫じめ備へたり。劃策圖に中り、千八百八十四年アリカノフ少數の騎兵を率ひ、マクヅム、クリ汗と共にメルフに現はれ、公會に於て、コマロフがメルフ人に與へて露西亞に歸服するを勸むるの書を讀むや、首座の長老等、テゼントの「コサック」を恐れて直ちに最後の書に調印し、四名の酋長及二十四名の貴人アリカノフに伴はれてアスカバットに來り、千八百八十四年二月六日コマロフの客室に忠義の宣誓をなせり。事の運ばれたること甚だ神速に甚だ秘密にして最も血氣の非露西亞黨も僅かに形式的反抗をなすに過ぎず、カトアル汗が率ひて起てる數千は一擊の下に敗られ、三月十六日露兵難なくメルフを占領せり。かくて「トルマコン」征服全く効を遂げ、露西亞は中央亞細亞に於て波斯及亞富汗斯坦と直ちに境を接することゝなりぬ。

有名なる中央亞細亞旅行者プロフエッメル、アルミニオス、ウァンベリー、メルフ併呑の結果及利益を論じて曰く――

一、メルフの併呑及全「テック」種族の征服によりて、露西亞は殆んど總ての「トルコマン」國民を其の臣民となせり。「トルコマン」領今や一團体となされべく、爾後の反亂また憂ふるを要せざるべし。

二、メルフの位置たる、ボーカラとペルシヤとの中間を占め、カスピアン海の東岸に新設せられたる鐵道とセレフシヤン及東ペルシヤ間の商路との最良の交通方法を供せり。ボーカラよりメルフにサラクに達する鐵道布設に付き近頃得たる報告は、此の中樞的位置の自然の結果と見られればならず。此地、知るべからざる昔より、諸汗とペルシヤとの間の大道なりき、露西亞は「トルコマン」の劫賊を平げたることにより總べての中央亞細亞貿易を此の新設潅漑に吸集するに至らん。

三、メルフに於ける「テック、トルコマン」をして後來再たび抵抗するならしむることによりて、露西亞はサラクよりヘラットに向ひて其の交通本線を進まんと欲するとき、面前に起るべき障礙を排し得たり。而してかくすることによつて、露西亞は都合よく、中央亞細亞より公然として印度を攻擊し征服せんとする總ての亞細亞征服者の蹤に倣へり。恰かも昔日の亞歷山大王が今日のアフガニスタンの地に入る前に昔日のアルキアナ（即ちメルフ）を占領したるが如く、ジンギス汗の兵もヘラットに入る前にメルフを占領せり。同一の事アムル、ウスベック、シエイハニ汗及ナザル、シヤによつてなされたり。故にアレキサンドル三世が印度に對する最後の計畫を押進めんが爲めメルフを領有したるは全く兵略に適すと云ふべし。

コロチル、ワレンチン、ベーカーは千八百七十三年に於て、サー、チヤーレス、マックレゴルは千八百七十五年に於て、既にメルフの價値はヘラットに近きに在ることを云へり。千八

百八十四年二月、『ヘラットの門に迫れる露西亞人』の著者チヤーレス、マルビン記して曰く、――

メルフ征服は沙漠中の「オトシス」を併領せしのみのことに止まらず、コウカサスとタルキスタンとの兵力の協同連絡の成りたるを意味す、アルカの併領と共に、ヘラットを距て一週日程の地に世界最良の不規則騎兵十萬を養ふことを意味す、「コサック」兵と「アフガン」人と最初の出會を意味す、露西亞帝國の間にキバを包圍することを意味し、ボーカラをして邊疆獨立國の地位より併呑領地の狀態に陷らしむることを意味す、中央亞細亞征服の完成を意味しペルシヤ及アフガニスタンの富饒なる山地併呑の開始を意味す。

メルフを併呑したる露西亞は機を見れば直ちにメレエットに進み得べく、ヘラットに進み得べくペルク、カヂルに進み得べく、直ちに「コサック」騎兵をしてインダス河に飲ましむるを得べき地位を占めたり。

六、トルキスタン及びクルシヤ。

茲にクルシヤに於ける露西亞の運動を附記し置くの便宜なるを覺ふ。露西亞はボーカラの方面より阿富汗斯坦を壓するのみを以て滿足せず、トルキスタンの方面よりは支那を壓し、かくて兩面よりパミールを圍みて印度を脅やかさんとせり。カシユガル、ヤルカント、コタ

兩面よりパミールを包む

ンの地、コーカンドの征服せられざる前、既に支那の版圖に歸し、露西亞をして意を得せしめざりしも、一たびコーカンドを征服し、根據を定めたる後は、ポーカラ方面と相待つてパミールを包み印度の正北境を壓する此等の地方は常に香はしき餌の如くに猛鷙を誘はずばあらず。千八百九十二年四月英國地學協會が上版したるキャプテン、ヤングハズバンドのパミール地圖は此方面に於ける露西亞の運動及支那と衝突すべき地點を示したり。北西より南東に向ひ劃せられたる一條の對角線に從ひて眼を注げば、コーカンドの根據地よりカラクル湖を過ぎ、ランクル、パミールを過ぎアクス河のアクタシュ(北緯三十七度三十五分、東經七十四度五十五分)に達す。ランクル、パミールは支那帝國が支那領なりと云ひ、露西亞帝國が露西亞領なりと爭ひたるものにして、アクタシュには露西亞の兵鎭ありたり。

ランクルパミール

アクタシュを北東に距る少許にしてタガルマあり、此處にも露西亞の前營ありと稱せらる。夫より少しく南西に行けば、千八百九十一年キャプテン、ヤングハズバンドが露西亞の探檢隊コロチル、ヤノフと會したるポシヤイ、グムバズあり、ポシヤイの北西アリクルに於ては阿富汗人と「コサック」との爭鬪起りたることありき。コロチル、ヤノフがパミー

ヤクーブ汗叛亂

クルジヤ占領

叛亂鎭定退去要求

ルを占領せんとしたるを聞きたる支那政府は今更の如くカシユガルの警戒に心を騷がしたりき、露西亞は實に確然たる支那領の中に足を着けて働きつゝありし也。而してカシユガルの北東クルジヤ地方に於ては、開戰に及ばんとする葛藤を生じたることありき。

ヤクーブ汗回々教徒を率ひて支那トルキスタンに反旗を立て、中央亞細亞の大部分忽ち無政府の混亂に陷るや、露西亞は邊境を自衛せねばならずと稱し、クルジヤは露西亞の中央亞細亞領に出沒して掠奪を恣にする蠻族の本據地なりと云ひ、千八百七十一年クルジヤ及イリを占領したり。されど尙ほクルジヤの地が支那の領土なる事實を蔑にせず、北京政府に通ずるに、占領の止むべからざることを以てし、占領の一時に過ぎざることを以てし、支那政府にして反叛を鎭定し、再たびトルキスタンに權威を立て秩序を復するに至らば、直ちに占領地を還附して退去することを約したり。コビ沙漠と叛地とに遮ぎられたる支那は露西亞の云ふがまゝに從ふの外なかりき。既にしてヤクーブ汗は死し叛民は統一を失ひ、トルキスタンは再たび支那の權威の下に屈從せり。既にして征討の將軍劉錦棠カシユガル、アクス、及アルチシヤアール地方を充分に鎭定するや、前約を履みてクルジヤの地を還さ

んことを露西亞に要求せり。露西亞は固より此の要求を拒絶せざりき、されど占領の始に於て支那が叛亂鎮定の條件を充たし還附を要求し得るの望はなしと豫定し、遂に露領と稱せらるに至らんと信じたる地を無條件にて要求のまゝに返附する程に寛大ならざりき。交渉は開かれ、條件は提出せられたり、されど支那もまた始より自己の版圖に屬し、一時露國が自衛の口實を以て、他の希願にも依頼にもよらず任意に占領したる地の還附を要求するは、自己のものを自己が取ると同じく尋常至當のことなりとして條件を斥けたり。

支那政府は北京駐劄の露西亞公使と談判して纏まらず、崇厚を辨理全權大臣としてサンクト、ペテルブルクに派遣し直ちに露西亞政府に談判せしめたり。意外にも、只だ何處までも無條件にてクルヂヤを返附せよとの要求を押し通すべき任務を帶びたる全權大臣は、露西亞に與ふるに、クルヂヤの一部、及占領費五百萬「ルーブル」及び著しき貿易上の特權を以てする、極めて寛大のリバヂア條約を齎らし歸りたりき。條約は滿廷の激怒痛罵の中に直ちに破棄せられ大臣は直ちに獄に投ぜられ、死刑を宣告せられたり。露西亞は直ちに之に酬ゆるに戰備を以てし、兵を國境に出し、艦隊を支那海に送り、支那は之に對して防禦

の姿勢を取り、軍器軍需を買收し、多くの援加軍を豫定衝突地に送れり。今日にあらざれば明日、明日にあらざれば明後日、談判は只だ開戰の宣言によりて決せらるべき切迫の際、外に於ては今一度平和の交渉によりて前條約を修正すべく、英國駐劄の公使曾紀澤命を奉じてペテルブルクに來り苦心周旋するあり、内に於ては支那政府間接の招待に應したるコルドンが北京に來り勸告建議するあり、支那政府は崇厚を赦免し、露國政府は再たび談判を開くことを承諾せり。

當時北京政府の形勢また紊亂するを須ひず、今日の北京政府は昔日の北京政府のありし如くあり、十年前の北京政府は十年後の北京政府のあるが如くありき。幼帝を狹みて權力を專らにせる皇太后及醇親王は舊守黨として開戰論を主張し、トルキスタン總督はヤブーク汗の兵にすら正面の敵對をなし得ざりし弱兵を以て、能く露西亞軍と戰ひ得べしと大言したり。形勢に鑑み得失に量るの眼識ある恭親王、李鴻章等が漸進黨として彼等に對し、如何に明白なる利害を示して平和論を主張するも、其の勢力に於て其の頭數に於て攝政太后の徒に及ぶべくもあらざりき。此の如きの際に於て、コロチル、ゴルドン來りて忌憚なき

ゴルドンの忠告

ペテルブルク條約

忠告を與へ、城砦及艦隊の微弱なることを暴露し、軍隊組織の不完全不實用なることを切論し、戰論一たびクルヲヤ地方に於て開かれなば露兵は黑龍江方面より滿州を襲ひ、二ヶ月にして北京の門に迫るべきことを警告せり。長髮賊の鎭定に與りて信用を得たる義勇武官の忌憚なき忠告は主戰論の鋭鋒を挫くに少なからぬ力を與へたること疑を容れず、而して冒紀澤の哀訴によれる崇厚の赦免は露西亞の感情を和げたり。

談判は再び開始せられ、領土を擴張するに最も鋭意なる露西亞の要求と、領土を保守するに最も頑固なる支那の躰面とを調和すべき方法求められ、千八百八十一年に至りペテルブルク條約決定せられたり。此の條約により、露西亞はリバタ條約の償金を增すに滿足し、支那はテック谿、天山道を回復し、殆んど全クルヲヤを回復したり。クルヲヤはスンガリアの藩屏也。

七、中央亞細亞諸疆界決定。

彼斯は固よりカスピアン海の東岸に於ける露西亞の侵畧を意ばず、而も之を拒くの力を有

波斯の對露西亞策

波斯との境界決定

アフガニスタンとの境界

せざりしかば、單に文書によつて權利の侵害を抗爭し、或ひは外交の秘密手段によりて、アカル及メルヴ、テックをして波斯の主權を承認せしめんと試むる等のことをなすに過ぎざりき。露西亞の外交は容易に波斯を制し、其の兵力は容易に「トルコマン」を服したり。「トルコマン」は遊牧種族の常として自己の境界を知らず、屢々波斯の邊境を擾がせり、故に彼等を征服したる露西亞は波斯と新領土との境界線を劃定するの必要に迫まられたり。露西亞僅かに「ゲオク、テップ」を征服して早くも波斯と商量し、千八百八十一年即ち征服の年十二月九日露波境界を條約に規定し、後數年にして實地に劃定せり。千八百八十四年露西亞は蓄サラク及び波斯、阿フガニスタン間一帶少許の地ウァンベリーが所謂『主人なき地』を取りしが、波斯は之を默々に看過するのみなりき。

波斯との境界は容易に決定せしも、アフガニスタンとの商量は、英國のアフガニスタンを助くるあり、露西亞の思ふがまゝには決定せられ得ざりき。中央亞細亞に於ける露西亞の進歩に對して最も心安からざるは云ふまでもなく英國也。千八百七十八年ロルド、ビーコンスフイルト早くも、サラクよりアムー、ダリア河上コーシヤ、サレーに至る一帶の中立

露阿の意見

地を畫かんとの意見を示したりき。英國は地圖的境界を立てんと云ひ、露西亞は人種的境界を立て、「トルコマン」に屬せしものは「トルコマン」に屬し、「アフガン」のものは「アフガン」に屬せんと云ひ、商量數年、未だ決せずして露西亞は「トルコマン」の全土を征服したり。千八百八十四年、ゼチラル、ルムスデン一千の隨者と共に地圖的境界を立てん爲め英國の委員として出張するや、露西亞は境界委員の來るを待ち設けたり示威運動の來るを待ち設けざりしと宣言して容易に委員を送らざりき。千八百八十五年三月、クシユク河畔英國境界委員の目前に於て露西亞と阿富汗との間に劇鬪あり、阿富汗大敗地を棄てゝ退きたり。後、露西亞政府は西歐列國との交渉益々繁なるを見て、中央の境界を速に決するの得策なるを見、アフガニスタンの君主は英國の干渉何の實利をも與へざるを見、千八百八十七年六月、アフガニスタン西北の境界を決定せり。此の決定によりアフガニスタンは更に一歩を讓り、露西亞は更に一歩を進めヘリ、ルード河畔ツルフイカルを少しく北に上りたる地よりコーシヤ、サレーに至るまでの線を劃せり。

千八百八十七年の決定

アフガニスタン東北の境界は千八百七十三年の英露決議により、東サリクル湖より西アムー、ダリアの合流コクチヤに至るまでは、アムーダリア河を以て、アフガニスタンと、事實に於て露西亞の屬國なるボーカラとの境界となし、ペダクシヤン及ワカンの地はアフガンの有となり、パミール高原に於けるシンナン及ロサンの二汗は獨立と定められたり。されどサー、ヘンリー、ラウリンソンが其の著『東方に於ける英國及露西亞』に於て云へる如く、遡遡なる此地方の地理的智識の不足と書記の誤寫とにより、コクチヤのアムー、ダリアに合する以東、何物か千八百七十三年に定められたる境界線なるか明白ならざるに至れり。英政府のアール、グランビルが露政府に提出し、露政府が同意したる原案には——

更に充分なる報告を閣下になさん爲め、余は女皇陛下の政府がカブルの君主に屬すと思考する領地及境界を盲明す。即ち——(一)ペダクシヤンと其の屬領ワカン、東に於てサリクル(水湖)より西に於てオクソス(またペンジナ)とコクチヤの合點まで。オクソスの流此に於て全域を過ぎてアフガン領の北境を劃す

とありき。而して書記の不注意により『西に於て』の語と『オクソスの流此に於て』の語、脱漏しコクチヤ以東の境界、條約に於て明白ならざるに至りぬ。されば英國は原案を以て事實に於ける境界となすも、露西亞外務省の機關『インヴァリット』の如きは、千八百八十七年九月に於て、ンンナン及ワーカンは千八百七十三年の條約により獨立地と定められた

千八百七十三年の決定の不明了

英露解釋の相違

りと記したりき。爾後幾多の困難紛々は此の不明より起りぬ。

パミール境界の語は屢々列國の外交家をして眉をひそめしめたる後、ザリクル以東の境界、千八百九十五年、三月十一日倫敦駐劄露國大使スタールと英國外務大臣ロルト、キンバレーとの往復文書によつて決定せられたり。四月二十日の露國官報によりスタールの公文を左に掲く――

伯爵閣下。

余は本日の日附を以て閣下の發せられたる公文に接する榮を荷へり。

此公文にはゾル、クーリ（ヴヰクトリア）湖の東方に於けるパミール域内の露西亞及大不列顛管轄區域を劃定する件に關し、我露國皇帝陛下の政府と英國皇帝陛下の政府との間に談判を開きて、約定したる條歡を包含せり。

余は、我政府が此條約を領承することを確むる權能を正式に付與せられたれば、更に左に其條歡を列記するの義務あり。即ち

第一　ゾル、クーリ（ヴヰクトリア）湖の東方に於ける露西亞及英吉利の管轄區域は、同湖の東端に近き一點に起り、其緯度線より少しく南方を走る山脈の連山に沿ひ、終にペンデル及ガルタ、ベリの狹路に達する境界線を以て分劃す。夫より境界線は、此山脈がゾル、クーリ湖の緯度線より南方に在る間は、此山脈に沿ひ、其緯度線に達しては山脈の斜面を下り、アクスウ河上のキジーリ、ラバートをヴヰクトリア湖の緯度線より北方に在らざるものとすれば、同處に達し、夫より東走して支那境に接し、若しキジーリ、ラバートのヴヰクトリア湖緯度線より北方に在ることを確定せる場合には、境界線はアクスウ河上に在りて前記の緯度線より南方に當り、最も近くして且つ最も便宜

パミール高原

千八百九十五年新露西亞領界
道路
千八百七十三年來英露勢力の及べる境界
支那領界（未確定）
印度領界
鐵道

露領トルキスタン
支那
ヒンドスタン
ヒンドゥクシ
ヒンドゥクシ山脈
ヒンドゥクシ山脈
ヒンドゥクシ山脈

なる點に達し、夫より前記の如くあるべし。

第二　境界線は、純然たる技術的の聯合委員をして、該委員の安全のため極て必要なる程の護衛兵の護衛の下に在りて、之を劃し、其精確なる方向を定めしむべく、而して該委員は露西亞及英吉利の代表員に、必要なる技術上の補助員を加へて、之を組織すべし。

委員會に於て、阿富汗王を代表すべき方法に附きては、英國皇帝の政府に於て同王と商定すべし。

第三　兩國政府は境界線に隣接せる支那領の境域に關し、最も便宜と認むる方法を以て、支那政府と約束を取結ぶ便宜を得んため、現場に於て支那境の位置に關し既集し得らるべき總ての材料に附きても、亦報告せんことを委員に委托すべし。

第四　露西亞皇帝の政府及英吉利皇帝の政府は、甲は境界線より南方の地に對し、乙は其北方の地に對し、一切の政治上の管轄權、若くは勢力を及さざるべきことを約定す。

第五　英吉利皇帝の政府は、ヒンダー、クーシとヴ井クトリア湖の東端より支那境に到る境界線との間に在りて、其管轄區域に屬する土地を阿富汗王の版圖に入るべきこと、此土地を大不列顛に併呑せざるべきこと、及其處に軍隊の屯所竝に堡壘を設けざるべきことを承諾す。

露西亞皇帝の政府及英吉利皇帝の政府は、各々其勢力を用ひ、阿富汗王をして、其ヒヤンダの右岸に於て占領したる總ての土地より、又ボーカラ王をしてアムー、ダリヤの南方に於けるダルヴーズの一部分より、撤兵せしむべきことを約定したるが故に、本條約は其事成就するを待ちて之を遂行すべきものとす。

讀者乞ふ別に掲げたる地圖によりて形勢を承領せよ。

露西亞に於ては此條約を以て讓歩に過ざりとなし、前外務大臣故ギールスを非難する聲ありと傳へらる。

中央亞細亞征服の容易なりし所以

英國の防禦策

第一回英波同盟

八、英露の衝突。

露西亞が斯くも容易に中央亞細亞の諸種族を征服したるは怪しむに足らず。ジンギスカン、タメルレーンの子孫は當時世界に於て最も臆病なるものなりき。彼等に次て征服せられたる「トルコマン」は尚ほ昔日の勇猛大膽なるものを有したりしも、鞏固なる統合を有せず、精良なる兵器を有せざりき。中央亞細亞は固より露西亞の敵にあらざりし也。而して中央亞細亞自身の外に露西亞の侵畧を遮らんと試みたるものありき。印度の寶庫を所有する英吉利は中央亞細亞に於ける露西亞の進歩を默視する能はざる也。

十八世紀の末年に於て、ナポレオンの埃及征討は印度總督ロルド、ウエレスレーの注意を喚起し、埃及を征服したる後、波斯を貫きインダス河を踰へんとする佛蘭西の計畫を破らん爲めカブテン、マルコルム、テヒランに遣はされ、千八百年佛蘭西に對する英吉利及波斯の攻守同盟結ばれたりき。佛蘭西は埃及に意を得る能はず最初の計畫を實行する能はざりしが、千八百〇四年——六年の戰爭は波斯をして露西亞に讓地をなさしめ、次で佛帝ナポ

第二回英波同盟

グリスタン條約

レオン一世、露帝アレキサンドル一世と印度攻擊を協議し、波斯の贊同を誘ふに及び、英國政府はサー、パーフォルト、ジョーンスを遣はし、印度總督はメーヂョル、ゼネラル、マルコルムを遣はし、佛露の計畫を破壞するに勉めしめたり。マルコルムは財を散して佛蘭西の使者ゼネラル、ガルダンヌの勢力を削かんと試み、ジョーンスは露西亞に對して波斯を保護すべきことを發言し、千八百〇九年三月十二日再度の攻守同盟結ばれ、英國は士官を派して波斯兵を組織し訓練せり。久しからずして波斯は露西亞と戰を開き、英國士官は波斯兵を指揮して數〻勝利を得たり。而して千八百十二年英は露と和して士官を呼び返し、仲裁者の地位に立ち、波斯は數〻破れて遂に千八百十三年十月十二日グリスタンの條約によりてグルジア、イメルシア、ミングレリア、アバカシアの地及びカラバー、シエキー、シルワン、ダルベント等の諸汗を割き、カスピアン海に戰艦を置くの權を棄てたり。最初の英、波攻守同盟成りてより十二年にして、波斯が英國との同盟の實益なきを見たることと再度なりき。

波斯王はグリスタン條約の遺恨を抑ゆる能はず、此に於て英國特命使臣サー、ジョーンス、

第三回攻守同盟

ウーセレー第三の攻守同盟を締結するに成効せり。千八百十四年十一月二十五日調印せられたるテヘラン同盟條約是也。此の條約によりて、波斯は歐羅巴中の何國たるを問はず、波斯を通過して印度を進擊せんとするを遮り、キバ、ボーカラ及コーカントを誘ひて同樣の防禦をなさしむることを約し、英國は波斯に兵士を送り兵器を送り、毎年八萬三千「ポンド」の國費補助金を與ふることを約せり。是の條約締結よりして、英國は波斯に全權を振ひ、士官を送りて造兵廠を建て新軍隊を訓練して政治上の勢力を得たるのみならず、また社會上の勢力となれり。久しからずして露西亞の嫉妬は口實を求めて千八百二十六年の開戰となり、露西亞の勢力は勝利を得て千八百二十八年のタルクマンチヤイ條約となり、波斯はまたエリバン及ナチッチエバンの地を割き二千萬「ルーブル」の償金を拂へり。英國との同盟が最大必要の場合に於て實益なきを波斯人に示すこと、最初の露波戰爭以來二十四年間にして三度、三度の苦き經驗は波斯をして賴み少なき味方を賴まんよりは寧ろ恐るべき敵を恐れて地を有つの得策なることを悟らしめ、これよりして露西亞は英吉利に代りて無上の權威をテヘランに振ふに至りぬ。

タルクマンチヤイ條約

波斯終に露西亞に賴る

沙上に家なつくる政策

サー、ヘンリー、ラウリンソン、波斯を以て露西亞に對する印度の藩屏となさんとする英國の政策を評して曰く、『我等は濱沙の上に家を建てつゝありき』と。英國既に波斯に成効せざるを見、轉じてアフガニスタン及キバ、ボーカラ及コーカントによりて露西亞の侵畧を防がんと試みたり。以爲らく、此等の地、露西亞に對して前に廣大なる沙漠を控へ、中に勇敢無敵の住民を有す。彼等若し互に相約して攻守同盟を組織し、兵器、軍需、教導を供せられなば、如何なる露西亞も其の野望を貫徹する能はざるべしと。かくて幾多の謀士策臣は遣はされたり。されどアフガニスタンは波斯の如く結合を有せず、結合を愛せず、キバ、ボーカラ、コーカントに至りては、前に云へるが如く、獨立を喜び軋轢を事とし、叛亂、爭奪絶ゆることなく、一分一秒間にても西歐の文明を以て束縛するを得べきものにあらざりき。かくて英國か、外交の手段を主としてアフガニスタン及キバ、ボーカラ、コーカントに露西亞防禦の堤防を築くは、波斯に於て然りしが如く濱沙の上に築くものなることと、寧ろ波斯に於けるよりも甚しきを發見するの時は久しからずして來りぬ。

英國、波斯を棄て、露西亞代つて全權を占むるや、直ちに其の地位を利用し、從來波斯の

ヘラットを領有せんとする慾望を煽動し、アフガニスタンに交渉を起さしめ、漸次手を印度の寶庫に延ばさんとせり。かくて波斯人は千八百三十三年に一たびヘラットを圍み、王の逝去に際して退き、千八百三十八年及千八百五十三年に再度及三度の進擊を試みしも、英國士官の防禦軍を指揮するありて意を果さず、再たびヘラット地方に出兵せざるべきことを約して和解せり。

英國ポーカラを誘導す

露西亞阿フカニスタンを誘導す

英國、波斯を棄てアフガニスタン及びキヤ、ポーカラ、コーカントを以て露西亞を防ぐ堡障となさんと欲するや、敏捷なる蘇格蘭土の少壯外交家サー、アレキサンドル、バーンス命を受けてポーカラに行き、恐るべき敵の遠からざるとを警告し、其の君主に勸めて英國と通商條約を結び印度と友邦の誼を修めしめたり。されとバーンスは遂にコーカント及キヤに行く能はず、而してポーカラは彼が去りし後間もなく、恐るべき敵につきての警告を忘れ、隣邦と力を合せて此の敵を防ぐ如きを思はず、前の如く爭鬪によつて自ら弱めつゝありき。露西亞はバーンスのポーカラ經畧に對して同しことをなさんが爲め巧妙なる波蘭土人ウィトコウイッチをカブルに遣はし、アフガニスタンの君主に說かしめたり。此時露西亞はア

アフガニスタン戰爭

フガニスタンの境を距ること尙ほ甚だ遠く、ウィトコウイッチは實行の望ある約束を以てアフガニスタン君主の心を收むる能はず、充分の使命を果す能はざりしも、其の煽動、反間はドスト、マホメット汗をして英國に對して冷々淡々或は敵意を狹むの擧動をなして憚らざらしめたるに與りて力なしとすべからず。千八百三十九年一月第一回阿フガニスタン戰爭開かれ、英國の精兵直ちにアフガン全土を征服し、シヤ、スーヂヤを立てゝ君主となせり。千八百四十一年十一月革命起り、シヤ、スーヂヤ廢せられ、英國の守兵塵殺せられ、翌年英兵再たび來りて之に復讎せり。爾後數年無事にして、英國遂にドスト、マホメット汗と『永遠』の和睦をなし年々二十萬の補助費を給することゝなれり。

中央亞細亞に於ける露西亞最南の地、印度の門を距ること尙ほ甚だ遠き時に於て英國がアフガンに力を盡すこと此の如く大なりしを見れば、以て其の如何に對露策に銳意なりしかを知るべき也。されとまた一方に於て其の使臣ストッダート及びコノリーが千八百四十年ボーカラの君主に捕縛され次て殺戮せられたるに對して、何の復讎をもなす能はざりしを見れば、英國の對露政策は、歐羅巴方面に於て然りしが如く中央亞細亞方面に於ても一弛

一張ありしことを知るべく、其の調子の不整なりしことを知るべく、またボーカラ、キペを以て印度の藩屏となすことの如何に行はれ難き空論なるかを知るべき也。

既にして露西亞はシルダリアの谿を平定し、キペ、ボーカラ、コーカントを脅やかし、先づコーカントに進み、チエムケントを占領するや、不安、嫉妬、恐怖、憎惡の念再たび英國に燃へあがれり。露西亞は此の感情を和らけん爲めに千八百六十四年十一月二十一日ゴルチヤコフ回章を發表して、中央亞細亞政策の理由、經綸及目的を辨明せり。ゴルチヤコフの論法は實に巧妙なりき。蠻族と近接する各文明國が然る如く、露西亞は襲擊掠奪に對して自衛せねばならぬことゝなれり。襲擊掠奪を禁ずる爲めに邊疆の人民を充分に討服せねばならぬことゝなれり。時を經て邊疆の人民は鎮撫せられたり。降服人民は次の蠻族の襲擊掠奪に苦しめられたり。露西亞は之を保護せねばならぬことゝなれり。露西亞は利慾よりも必要に迫られて隔絶せる地方に困難なる遠征をなさねばならぬことゝなれり。露西亞政府は一方シル、ダリアの地を定め、一方イシク、クルの地を定め、邊疆の爲めに止むを得ざる平和を維持せんと試みたり。されど此の間には廣大なる荒地あり、野蠻種族此處に

出沒して、殖民及商隊を刼やかし、露西亞の企圖を實行せしめざりき。此に於て露西亞政府は最初の意志に反し、支那境を沿ふてイシク、クルに達するものと、アラル海よりシルダリアの流を遡るものと、二つの境界線を連絡し、其の間に城砦を築くかねはならぬことゝなれり。而して防禦より攻擊に轉じ、遂に際限なき侵畧となる常有の弊を避けん爲め此線を以て最後の限界として確定するの必要を見たり。『新界線は膏腹にして森林に富み、灌漑に便なる地方を通過し、殖民を便にし我守兵の生活を便にす。而して又此の新界線により、定居あるコーカントの農商國民と境を接し、より多く品位あり、より多く結合あり、より多く組織ある社會的人民と交る。されば政策と地理と相合して劃したる境界此處に在り。利益と道理と相合して此處まで進むことを告げ、此處に止まることを告ぐ』。

回章の墨未だ乾かず、『際限なき侵畧を避くるの意切なる』露西亞はシル、ダリア谿に運動を始め、千八百六十五年タシユケントを占領し、千八百六十六年コーヂエント及コーカント汗國の大部分を占領せり。英國の感情は再たび激昂し、外務大臣ロルト、ラツセル千八百六十五年七月三十一日附を以て、此の感情を和らげん爲め中央亞細亞に於ける英露相互の

ラウリンソンの意見書

中立地帯定發議

地位につき外交公文の交換を露西亞政府に要求し、露相ゴルチャコフは曩日の回章既に之を言ひ盡せりと答へ、二ヶ月の後更に露西亞皇帝の政府は中央亞細亞に於て一の野望を有せず、只だ商業の利益と領土の平和を維持せんと欲するのみなることを言明せり。而して宣言の響未だ消へず千八百六十八年露西亞はボーカラ君主を破り、サマルカントを併呑せり。サー、ヘンリー、ラウリンソンが『中央亞細亞問題に關する意見書』を英國政府に提出して注意を喚起し、全國の人心を聳動したるは此の時なりき。露西亞國際法の大家チャールス、マルテンス之を評して曰く『サー、ヘンリン、ラウリンソンの意見書は甚だ勢力ある感化を印したり。意見書の中に充ちたる不安、不信の念は爾來常に兩國の外交往復に著しかりき』と。小冊子の範圍に於て此の貴重なる覺書を摘錄するの餘地なし、只だマルテンスが意見書の結果は『學術的境界線』政策及ロルト、ピーコンスフィルドのアフガニスタン政策に現はれたりと思ふと云ひしを聞くに滿足せしめよ。

サマルカント併呑の後千八百六十九年の初ロルト、クラレンドン、露西亞公使ペロン、ブルンノウに告ぐるに英國の人心甚だ安からざるを以てし、中間中立地を設定し兩國直接の

アフガニスタン境界決定發議

千八百七十三年の決定

接壤を避けんことを發言せり。ブルンノウは千八百六十九年三月七日附ゴルチャコフの訓令により、此の發議の如く露西亞皇帝の意を得たるものなきことを答へ、英國政府が露西亞に對して全く舊時の偏情を捨てんことを請ひ『皇帝陛下の政府はアフガニスタンを以て全く露西亞が勢力を及ぼし得る範圍外にありと見る』ことを申明せり。協議は開かれたれども實際に於て意見の一致を見ること難かりき。次で千八百七十年五月、アフガニスタンは露國勢力の範圍外なりとの語を基礎として、英國政府はアフガニスタン境界決定の協議を露國政府と開けり。協議は殆んど三年間續けられ、露西亞は遂に全く英國の提議に從ひ、千八百七十三年一月十二日、コクチャの合流よりコーシャ、サレーに至るまでアムー、ダリアを以て境となし、ベダクシャン及ワーカンをアフガニスタン領とし、コーシャ、サレーより波斯境に至るまでの一線によりてアンドクイ及マイマナはアフガニスタン領内とし、メルフは領外とし、アフガニスタンを純然たる獨立國とするの條約に調印せり。英國は露國の讓歩に滿足なり、されどこれ露國に取つては何の讓歩にもあらざりき。境界の決定せられたるは僅かにアフガニスタン北東の一點のみ。コクチャ合流より東の境界は決定

せられず、中央亞細亞には充分なる活動の餘地ありき。アフガニスタン獨立問題につきても、露西亞は既に早く其の中立地たることを公言したり、而して英國はアフガニスタンと決定すべき多くの問題を有せり。此の間に於て英國をして自らアフガニスタンの獨立を害せしめ、從つて露西亞をして約束の縛より脫せしむべき機會多し。されば露西亞は讓歩の名によりて對手たる英國の肩に責任を投ぜんと欲したる也。露西亞の外交に與れるマルテンスは千八百八十年に於て、アフガニスタン既に英國の附屬となりたるが故に千八百七十三年の條約は單に歷史的價値を有するのみとなれりと說明せり。

英國が滿足の安眠をなしつゝある間に、露西亞はキバ征服の計畫を實行せり。英國は其の何の意なるかを質問せり、露西亞は單に掠奪を罰する爲め四個大隊半の小兵を派遣するに過ぎざることを說明せり、而して實際の運動は倍數の大兵なりき。英國か露西亞の說明に滿足しつゝある時に、キバ君主の使臣シムラに來りて英國の助を乞へり、印度總督ロルド、ノースブルックは露西亞の意に從ひて平和を結ぶの最得策なることを答へたり。キバは『全露西亞皇帝の忠僕』となり、事實に於て屬國となり、近隣諸國諸汗と直接の交通をなす權

利を棄てたり。此時に及び英國が、此の擧動を以て千八百七十三年カウント、シユバロフのなせし宣言——『キバを領するは皇帝の企圖に違ふのみならず、之れを妨くるの命令豫備せられ、要求せらるべき條件は畢竟キバの占領を長くせざるものたるべしとの訓令與へられたり』と云へるものに反對すとし、露西亞は故意に公約を破りたるものなりとしたれども、露西亞の黨は『政治問題に關する宣言或は申明は必すしも約束にあらす』と答へて顧慮することあらざりき。ロルド、クランウィルは更らに千八百七十四年一月七日附を以て露都駐劄公使に訓令し、キバ征服より來る中央亞細亞の變局が英露兩國の親交に及ぼす影響につき、露西亞の注意を促かし、次て露西亞か企圖すと傳へらるゝメルフ遠征果して實行せられなば、露西亞はアフガニスタンとの戰を避くる能はさるべく、而して英吉利はアフガニスタンの獨立を以て印度の安全、亞細亞の平和の最大要件となすことを告げしめ、露相は之に答へて、英國がアフガニスタンの境を距ること甚た遠きメルフに關して容喙せんとすること、甚た其の意を得すと云ひたり。

千八百七十四年二月權を執りたるヂスレリー內閣は始めより排露西亞を以て外交政策の第

ゲスレリー内閣

千八百七十五年の覺書

英國の辨駁

一主義となし、中央亞細亞に於ける露西亞の運動に注意して少しも怠らず、露國政府も遂に間斷なき英國の質問に答ふるの煩に堪へず、千八百七十五年四月十七日附を以て詳細なる覺書を英國政府に送り其の口を拑せんと試みたり。覺書は先づ從來英國との交渉を復記し、露國屢〻最初に發表せし企圖の範圍外に出てたることあるも、實に止むを得ざる必要よりして然るものなることを辨じ、尚ほ將來に關しても皇帝はポーカラ、クラスーノボトスク及アトレク河の方向に領地を擴くる企圖を有せざることを云ひ、而も企圖の發表は形式を備へたる約束にあらざることを辨じ、兩國共に其の安全を維持するに必要なる方法につき運動及判斷の自由を保有することを云ひ、根本の主義として承認せられたるものとして左の件々を擧げたり。——

一、此の地方に於ける兩國政府の爭鬪は、双方の利益及開發的使命を傷ふべきこと。

二、故に中間中立地を設けて直接の接壤を避くること。

三、アフガニスタンは此の中立地たるべく、兩國共に其の獨立に手を觸れざるべきこと。

英國政府は少しく辨明せざるを得ざりき。英國政府のアフガニスタンに關し、中立地に關する主意は異なれり。アフガニスタンは獨立國たるべし、されど英國の勢力の下にあるべ

中立地設定の議開はす

露土戰爭の影響

し、中立地はアフガニスタンの彼方に定めらるべしとは始めより英國が發表せし意見なりき。露西亞政府は千八百七十六年二月十五日カウント、シユパロフに通牒し、アフガニスタン境界に關する決議に同意し、中立地に關する協議は調はずして終りたりと見ることを告げ、將來兩國は十分なる活動の自由を保持して出來得る限り直接の接壤を避け兩國勢力の範圍内にある諸國の葛藤を防ぐべしと宣言したり。

かゝる間に中央亞細亞に於ける露西亞の進歩は其の調を緩めず、ゼネラル、ロマキンはクラスノボドスクより年々「トルコマン」遠征を企て、ゼネラル、カウフマンは千八百七十六年コーカンドを併呑せり。露土戰爭の局延ひて英露交渉の切迫となるや、英國政府は印度兵をマルタに召集し、露西亞は之に對し、サマルカンド及クラスノボドスクよりアフガニスタン境上に兵を集め、ゼネラル、ストリエトフを將としたる外交隊をカブルに送り、英國はまた之に對しサー、チビーエ、チヤンベレーンをして一千の護衛を率ひてカブルに入らしめんとせり。露西亞の使節は巧に効を奏したり。されど伯林會議は無事に結了したるのみならず、土耳其との戰爭に全力を盡したる露西亞は直ちに中央亞細亞に於て英國と

第二アフカニスタン戰爭

アフカニスタン獨立を失ふ

爭を始むるの餘力を有せず、十月八日を以てアフガニスタン王に暫らく戰意を棄つることを通知せり。短日月の親密の後、露西亞の情夫と離れたるアフガニスタンは直ちに、本夫を以て自ら許せる英國の復讐に會せり。英國は十一月八日を以て最後の要求をなし、十一月廿一日國境を踰へ、千八百七十九年五月ガンダマクの條約を命令せり。

一、アフガニスタン王は英國に諮りて外國との關係を所置すること。

一、英國の常駐公使は多數の護衛を率ひてカブルに住み、アフガニスタン國境に英國使節を派するの權利を有すること、

一、英國はクルラム、ペシン及シビの谷を占領し、キベル、パス及ミチニ、パスを差押ゆること。

一、アフガニスタン王は年々十二萬「ポンド」の補助金を給せらること。

爾後アフガニスタンの反覆紛擾常なく、英國政府の方針一弛一張定なかりしも、アフガニスタンはこれよりして獨立國の名を失ひたりき。露西亞は冷然として、少しも此の如き運動に關心せず、只た自己のなすべきをなさんと欲するものゝ如く、東カスピアン地方に力を盡し、千八百八十一年グオク、テップを征服し、千八百八十四年メルフを征服し舊サラクを征服したり。メルフ征服前後の外交はキベ征服の外交を丁寧に繰返したるものなりき。露西亞にして成さんことを欲し、成さんと決したる侵略は極めて嚴密なる英國外交家

レッサルの傳命

露兵アフガンを襲ふ

の監視も之を如何ともする能はざることの實例再たび示されたり。

千八百七十三年の決定によりアフガニスタン境界の決定せられたるはオクソス河に沿へる一部のみ。コーシヤ、サレーとサラクとの間は只た大躰を決定したるのみに止まれり。

爾後アフガン境界に關する照會屢々往復せられたるも、何の決定もなく、千八百八十四年に至り兩國の委員十月一日を以てトルキスタンに會し實地の境界を劃定するを約し、英國の委員ゼチラル、ラムスラン一千の人數を率ひ約束の日約束の場に至りしも、露西亞の委員は待たれ居る場にはあらず、却つて千八百八十五年トルキスタンの地理に通曉せる技師レッサル特命を帶びて倫敦に來り、英國政府と直接の協議を開かんと試みたり。かゝる間に露西亞兵とアフガニスタン兵と益々境上に近接し來り、協議の成る前に一歩にても多くの地を占領し置かんと試みたり。英、露兩國政府は此の擧動につき相互ひに詰問したるの後、三月十七日露西亞、アフガニスタン共に一歩も進まざるべしと決したりしが、三月三十日ゼチラル、コマロフ、クシユク河畔プリキスチに於てアフガニスタンの兵を襲ひ、之を敗りてバンジエより追ひ拂へり。時恰かも英國が露西亞のメルフ併呑を不當とし運送船

英國の戰備

千八百八十六年の決定

をボルツマウスに集め後備及民兵を召集し、印度の二軍團を充員して中央亞細亞に事あらんとするの決心を示し、これが爲めアフガニスタンとの同盟を協議せんとしたる時にして、日は恰かもアブヂユラマン汗が印度總督ロルド、ダフインの請に應じラワル、ピンヂに來りたる日なりき。さればコマロフの擧動は英國の目前に於てアフガニスタンに打擊を與ふることにより、アフガニスタンをして英國の力、露西亞を制し能はざることを示さんとの慣用政策より出でたること云ふを要せず。屈辱は自由黨にも保守黨にも一樣に憤られ、戰爭は到る處に叫ばれたり。されど英國はスダン、埃及、コンゴー、加奈陀等の事件に忙かはしく、露國はブルグリアの事件に忙かはしく共に中央亞細亞に戰ふを欲せず、英國はコマロフの召還を要求し、露西亞は却て之を賞したる外、何事もなく默々に消へ去り、千八百八十六年へり、ルード河よりムルガフ河に至るまでの協議調ひ、露西亞はヅルソイカル、パスを棄て英國はアフガニスタンの名によりパンヂエを棄て、千八百八十七年に至りペルシヤよりオクヅス河に至るまでの境界に關する兩國政府の落着を見たり。

かくてアフガニスタンの境界は殆んど全く決定せられたりしも、英國が希望せし如くアフガニスタン其物が英國の爲めに露西亞を防く堡障とならんには、千八百八十六年のギルゼイス紛擾、千八百八十八年のインヤク汗反亂によつて示されたる如く、英國の誘導に向つて心服するの傾向を有せず、ボーカラに奔竄せる不平酋長を通して來る露西亞の陰謀に抵抗する結合を有すること容易ならざりき。

英國の政策一貫せず

九、中亞の局遂に如何。

英國が中央亞細亞に於て露西亞の南下を拒ぐ能はざりし歷史は英國自身及後人の爲めに多くの教訓を與ふ。

此の歷史を讀んで最初に感ずるは英國の政策の終始一貫せざりしこと也。強大なる攻擊に對するには强固なる防禦を要す。攻擊の來ること急激なるときは防禦の反動、之れに應じて深酷なるを得るの利あり、されど攻擊の來ること徐々なるときは防禦の勢力時として倦怠するの弊を免れず。露西亞の中央亞細亞に於ける進步は前者の場合にあらずして寧ろ後者の場合の如く、若々一步を進めまた一步を進むる者、印度に對して確實なる合圍の策を

執るに似たりき。されば之に對する英國の政策、長日月の間には自ら一弛一張なき能はず。其の初め波斯を經過して印度に達する露佛同盟攻擊の計畫せられたる時に於て、サー、パーフォート、ヲヨーンスをテヘランに送りたる英國政府、ゼチラル、マルコルムを送りたる印度總督府の神經は如何に敏捷なりしよ、其の政策は如何に活潑なりしよ。露、佛外交家の目前に於て英、波攻守同盟は結ばれたり。而して間もなく波斯危急の際に於て露西亞と調和し自ら同盟を破り、露西亞をして多くの地を併呑するを得せしめたるは英國にあらずや。千八百十四年のテヘラン同盟條約に於ても然り。條約の成りたる當時、政治上、外交上、社會上、英國人は事實に於て波斯の主人たるが如く見へたりしにも拘はらず、露西亞は千八百二十八年に於てタルクマンチヤイ條約の重荷を以て波斯を壓し、波斯をして、今までは味方なりしも政策の一貫せざる英國頼もしからず、今までは敵なりしも一定の政策を有する露西亞却つて頼もしきを知らしめたり。

波斯に於ける實例

テヘランに於ける政策失敗して人心安からざる時に於て、ヲヨン、マックチール、ダビットハウルカート、及ヘーリー、フレーザーの三愛國者出で、有名なる『ポートフォリオ』を

發刊し、露西亞の侵畧、印度の危險を絶叫せり。此の絶叫は如何に著大なる反響を第一アフガニスタン戰爭に於て見出したるよ。排露西亞熱は殆んど其の絶頂に達せり。英國はアフガニスタンのみを以て滿足せず、オクソス以北の諸汗國にまで其の手を延したりき。而してアフガニスタン及びキバ、ボーカラ等を誘掖して强國ならしむること甚だ容易ならず、露西亞の運動は尚ほ遠くキルギッにありて深く憂慮するに足らざるを見るや、第一アフガニスタン戰爭に張れる弦は久しからずして弛み、アフガニスタン、キバ、ボーカラ、コーカンド、互に爭ひ自ら弱むるがまゝに放任せられたり。クリミア戰爭に張りしも、の弛み、キバ征服に激せしもの靜まり、『徹頭徹尾無爲政策』の嘲笑となり、ラウリンソンの『噴火山頂舞蹈政策』の絶叫となれり。千八百六十九年以來、外交文書の往復頻繁ならざるにあらず、質問詰責、要領を得ざるにあらずと雖、總ての往復總ての質問、皆な一定の積極的政策なきことを示し、却つて露西亞の利益を增したるの觀なくんばあらず。第二回アフガニスタン戰爭の如き、保守黨內閣が强硬の運動を以て經營したるもの、自由黨內閣によつて半以上を破壞せられたるを見ずや。

無爲政策
舞蹈政策

英國地利を失す

されど中央亞細亞に於ける英國の政策一貫せざりしもの、獨り英國の過失之を爲さゝるによるのみならず、地位の呪咀之を能はざらしむるによるものなくんばあらず。蛇を殺せば再たび蘇らしめざるを要す、人を救はゞ再たび斃はれざらしむるを要す。されど中央亞細亞に於て露西亞に對する英國の地位は此の如きものを許さず。波斯と境を接する露西亞は急に應じ變に乘じ直ちに兵を境土に集め、直ちにテヘランを指して進むを得べし。されど英國は莫大の準備を整へたる後にあらずんば波斯灣頭に出づる能はず、波斯灣頭に出でたる後、千艱萬難の行軍をなさゞればテヘランに進む能はず。英國若し波斯を攻めんか、露西亞は直ちに危急に赴くを得べし、露西亞若し波斯を攻めんか、英國は只だ口に好意を表し手に汗を握るの外なき也。千八百〇四年——千八百〇六年の戰爭に於て一度、千八百十二年の戰爭に於て再度、千八百二十六年の戰爭に於いて三度、三十年ならずして三度、波斯は運命の不幸を悲しみ、英國は地位の不便を歎じたり。中央亞細亞に至りては更に甚し。波斯に取つては最も不便なる救護の道、而も英國に取つては唯一の進軍の道たる海さへも中央亞細亞には備へられざる也。印度を距ること甚だ遠く、本土を距ること更に甚だ

中央亞細亞に於て

議院政治の不便

遠く、陸に軍艦を駛らすの術發明せらるゝまで、英國は中央亞細亞に武威を示す能はず、中央亞細亞の住民は一人も英國の勢力に感ずるものあらざる也。而して露西亞の「コサック」は天然の疆界なきこと太洋に似たる曠野に馳驅し、南方の水平線を指して未だ見ざる印度の黃金境を語り樂むの自由を有したりし也。言語を以て金錢を以て中央亞細亞諸汗の歡心を結ばんとしたりし英國の政策は言語の消ゆると共に金錢の去ると共に消え去るべし、されど現在に於て武威を以て壓服し、將來に於て印度の富貴を以て誘導し、亞細亞的舉動を以て亞細亞的傳說を喚ひ起す露西亞の政策は一歩を進むる毎に武威を增すべく、一歩を進むる毎に希望を激すべき也。

クロムウエル以來、ピット以來、强硬なる外交政策の英國によりて行はれたるを見ること少なし。これ豈に議院政治の結果にあらずや。大國の外交は强硬なるを要し、遠大なるを要し、永續するを要し、敏活なるを要す。而して多頭政治、輿論政治、討論政治は往々にして强硬にして遠大なる外交の敏活に動きて永久に續くことを許さず。總ての人クロムウエルたるを得べき權利ある時に於て獨りクロムウエルの權利を占めんこと難く、總ての人

議院政治は外交運動の敏活を妨ぐ

ピットたるを得べき地位を有する時に於て獨りピットの地位を占むること難し。建設、膨脹の事業は專制の權力を要し、維持、守成の事業は衆議の道德を要し、外交は强硬一貫の意志を要し、內治は溫厚無私の心情を要す。人類の大歷史より、邦國、國躰の小歷史に至るまで、專制政治は起點にして民主政治は終極なりとの敎訓を繰返さゝるはなし。「プロテスタント」敎會の敎理は「カトリック」敎會の敎理よりも進步したるものなるべし、されど「プロテスタント」敎會の事業と肩を幷ぶる能はざるものは統合的意志を欠くが故にあらずや。支那の兵卒は日本の兵卒よりも强大のものなるべし、されど支那軍の遂に日本軍に敵する能はざるものは、統合的意志を欠くが故にあらずや。英國の議院は男を女となし、女を男となすの外何事にてもなす能はざるなき萬能者なりと云はれたり。此の萬能議院はよく、英國の腐敗を拒ぐと共に運動の敏活を妨ぐ。英國若し世界をして其の內政の整頓を稱贊せしむることに就きて議院政治に感謝する時あらば、列國をして其の外交の不確を侮慢せしむることに就きて議院政治に悔恨する時なくんばあらざるべし。試みにロスベリー內閣の末路を見よ。其の首相はピットの崇拜者として、內に於

外交と軍備

ては社會的主義を執り、外に於ては帝國擴張主義を執るものなりき。其の私淑する所のもの彼の如く、其の抱懷する所のもの彼が如し、而して其の技倆に於ても得易からざる秀逸なりき。されど英國今日の組織は此の如き政策の實行を許さず、其の日淸戰爭に處する外交は智者にあらざるものをして尙ほ老大國の鼎の輕重を問はしめたるにあらずや。新聞、演說——輿論喚起——總撰擧——議院開會——下院上院平民貴族——議案——討論——質問——決議——政府の一擧一動、總て面倒なる議會の鼻息を窺はねばならず、兵數の多寡も每年の豫算によりて決せられねばならぬ如き組織を以て一貫の精神あり强硬の意志ある外交を行はんことは、烏帽子裝束嚴めしく金覆輪の鞍に跨り「デルビー」競馬に加はるが如き也。

外交は常に軍備と最も密接なる關係を有ち相携へて進まざるべからず。會社商店が契約を結ぶに當り、必ず其の法律の規定に違反するなきや否やを問ふが如く、一國の外交は常に軍備の計算と背馳せざるや否やの考査を經ざるべからず。不幸にして英國は此の最も大切なる調和を欠きたりき。ロルド、サリスボリー云へるあり、『英國政府は市民政府として市

政治家軍事を知らず
軍人政治を知らず

民に適合するものなり』と。文明國と稱せらるゝもの、政府、何國の政府か市民政府ならざるものあるべき。內閣の椅子を占むるもの、議員の椅子を占むるもの、殆んど總て市民ならざるはなく、英國の如くならざるはなき也。されど如何なる市民政府も武官を內閣に列せしめ、陸軍武官をして陸軍のことを司どらしめ、海軍武官をして海軍のことを司らしめ、軍事的觀察點より總ての國政に與り議せしめざるは稀也。英國に於ては然らず、陸海軍大臣たるもの、他の大臣に優りて軍事上の智識を有せず、實際の武官は政治の機密に關せず、政治の機密に關するものは軍事に關する意見報告を精讀するの勞を取らず。參謀總長たるロルド、ウオルスレーは貴族院に於て內閣の秘密を與り聞き得ざりしことを告白したるが如く、總理大臣たるロルド、サリスボリーもまた貴族院に於て英國軍事上の位置に關するロルド、ウオルスレーの報告を讀まざりしことを告白せり。軍事の主腦者にして外交の方針を知らずんば何によりて實際の方向を定めんとする耶、外交の主腦者にして軍備の實狀を知らずんば、何を賴みて一定の意志を貫かんとする耶。英國の軍事は武人のみ之を知り、其の外交は政治家のみ之を知り、外交は政治家にあらずんば知るを要せず、知る

能はざるものゝ如く思はれたり。英國に於ても其他の國に於ても、領土廣き國に於ても、領土狹き國に於ても、試みに外交をして軍備の意見を聞くことなからしめよ、政治家をして外交は我が專賣特許なりと揚言せしめよ。彼は出兵を決すべき時に出兵せざるべし、開戰すべき時に開戰せざるべし、而も船中に於て唯々諾々を旨とする屬僚に向ひ、髯を掀け手を振りて外交の講和をなし、「今日までの成行に於て、軍事上のことはいざ知らず、外交に於ては一點一畫非難せらるべき進退をなさゞりし」と廣言するとあるべし、而も强國連合干涉の虛聲に狼狽し、十萬の兵士が、雪に艱やみ日に曝され、血を流し肉を傷りて、初めて得たるものを忽ち棄てゝ顧みることあらざるべし。軍備の意見を聞かず、外交の專賣特許を誇る政治家は伯爵となるべし、侯爵となることあるべし。されど其の國威の伸暢は如何、利益の防禦は如何。英國は此の如き外交によつて中央亞細亞に於ける露西亞の進步を防ぐ能はざりき。自由黨は外交よりも內政に得意なるべし、保守黨は內政よりも外交に得意なるべし、されど自由黨も保守黨も政治家專賣の外交によつて、中央亞細亞に於ける露西亞の進步を防ぐ能はざりき。他の歐羅巴諸王國に於ては、內閣の政治家が軍事上の智識に富

女皇を戴くことは更に外交軍備を隔離す

英國社會の軍事智識欠乏

まざることあるも、帝王は殆んど常に陸海の總督、大元帥として軍事上の智識を集め、陸海の武官に親しみ、以て市民政府の欠點を補ふ、而して英國は千八百三十七年以來、軍事問題に對して異姓のものたる女皇の統治する所たり。獨り內閣のみならず政治家のみならず、軍事上の智識考量は英國社會一般の欠乏たり。丁年に至れは必ず兵たるの義務を有する國民は求めずして、假令極めて僅少なりとも、軍事上の智識を得べし。されど强制徵兵の苦痛なき英國の市民は此の恩惠に浴すると能はず。堂々たる參謀總長ロルド、ウオルスレーが『野戰將卒手簿』の如き卑近なる書を著はすに至つては、以て英國が如何に軍事文學に欠乏し、軍事文學に欠乏する英國社會が如何に軍事的智識、考量に欠乏するかを證明して餘あり。此の如き社會により此の如き政府により、誰かよく列國兵を按じて相對峙する休戰時代に處し成効する外交を行ふことを得む。敵を知り己を知るものは百戰百勝す。英國の政治家は往々にして己を知らず、殆んど常に露西亞の力を誤算し、中央亞細亞に於ける觀察を誤りたりき。英國の觀察者は以爲らく、露西亞は波蘭土を鎭壓する能はず、波蘭土人民の執着力と愛國心とは常に內よりして露西

英國は露西亞の力を誤算したり

波蘭土に於て

高加索に於て

中央亞細亞に於て

亞の進歩を妨ぐべしと。されど實際に於て波蘭土人の愛國心も執着力も露西亞の外政に大なる影響を及ぼさゝりき。彼等は露西亞政府に租稅を拂へり、獨逸に屬したる彼等の同胞が獨逸國旗の下に戰ひしが如く露西亞國旗の下に戰へり。英國の觀察者は以爲らく、高加索住民の野蠻的勇氣、絕對的獨立心、熱狂的宗敎心は、彼等をして無二の天險により何時までも露西亞の侵略を喞り立つを得せしむべしと。されど實際に於て八十年間屈せず撓まざりし露西亞の忍耐力は總ての天險を陷れ、總ての悍族を降し、降服せるものは移住せしめ、移住せざるものは之を殲除し、最も危險なりし土地を變じて最も堅固なる根據となせり。英國の觀察者は以爲らく、「キルギッツ」及「トルコマン」地方の大沙漠は永く露西亞の前に、普通の人力を以て踰ゆべからざる大溝渠として存すべしと。而して實際に於て露西亞は少しの費用と多くの忍耐とを以て、一歩一歩「キルギッツ」を征服し、「トルコマン」を征服し、波斯の境を壓し來れり。千八百十一年に於て、千八百二十八年に於て、露西亞が波斯に對して僅少の兵を動かしたる事實を知れる計算者は、依然露西亞は亞細亞方面に强大の兵を送る能はず、强大の兵を有つ能はず、韃靼種類の抵抗力、防禦力を排するに足る

ラウリンソンの如きすら然り

攻擊力を有する能はざるべしとなせり。而して實際に於て高加索に於ける露西亞の兵力は十九世紀の初めより絶へず增加せられ、千八百年に於て三千なりしもの、千四百四年には壹萬五千となり、千八百五十三年には一躍して二十八萬に達したり。觀察者は、露西亞が其の軍備の全力を歐羅巴領に置きて對歐羅巴策の用に供し、亞細亞方面に於ては出來得る限り、少數の兵力を以て事を成すの方針を執るとは雖、機に臨み變に應じ、必要に際しては著しき增加を爲し能ふことを見過せり。彼等はまた、實際に於て、中央亞細亞回々教民は高加索の如く頑固ならず、アルゲリア人の如く勇悍ならず、シヤミルの如き、アブデルカテルの如き統卒者を有せず、無政府の紛擾爭鬪によつて常に自ら弱めつゝあることを測量せざりき。中央亞細亞の事情に精通せるサー、ヘンリー、ラウリンソンの如きを以てして尙ほ、露西亞は到底波斯に勝つ能はざるべし、道に當れる幾重の山脈は各々新なる高加索となり頑として露西亞の前に立つべし、キヤ、ボーカラ、コーカント、波斯、カシユガリア、及アフガニスタンの防禦同盟は決して露西亞の力を以て攻擊し顚覆する能はざるべしと論定するを見れば、誰かまた滔々たる島國の政治家が、點滴よく巖石を穿ち、一指よく

パルメルストンの誤算

ノースコートの誤算

巨鐘を動かすの理を知りながら、相率ひて樂天的計算に滿足せしを怪むものあらんや。英國の觀察者は長き間、露西亞の攻擊力の眞價、及中央亞細亞諸州の防禦力の眞價を誤算したり。コーカサス平定せられ、タシユクント占領せられたる後、『露西亞が韃靼の障壁を全く破壞し、ボーカラ及印度間の地に近づき來る前には新時代また來りまた行き、數十時代また來りまた行くべし』と云ひたるものは外交を以て誇れる大宰相ロルド、パルメンストンにあらずや。『英國女皇陛下の政府は中央亞細亞に於ける露西亞の侵畧に一の疑懼すべく嫉妬すべき基因あるを認めず。露西亞が過去に於て既になしたる征服、及び將來に於て當さになすべき征服は、英國政府の見る所を以てすれば、露西亞が立てる地位の自然的結果なるが如く見ゆ』と印度總督に敎示したるはデルビー內閣の印度事務大臣サー、スタッフォード、ノースコートにあらずや。ノースコートの言ありてより十年ならずしてラウリンソンの意見書は朝野を聳動し、パルメルストンの言ありてより十年ならずしてコーカントは征服せられ、キヤ、ボーカラは露西亞の屬國となれり。

觀察の誤謬、計算の誤謬は英國をして得易からざるの機會を逸せしめたりき。若しも英國

英國好機を逸す

クリミア戰爭の好機

にして中央亞細亞に於ける地位を正當に觀察し得たりしならば、露西亞の希望及力量を正當に計算し得たりしならば、而して區々たる局部の外交により露西亞の進歩を防止し得ざることを知りたりしならば、而して印度寶庫の危險を眞に認めたりしならば、早くもクリミア戰爭の當時に於て斷乎たる處置を以て長く全局の趨勢を決定し得たりしなるべし。事情に通ぜるものは云ふ、ナポレオン三世がクリミア戰爭の同盟を誘ひし眞意は單に露西亞の土耳其を占領するを妨げんと欲したるのみに止まらず、更に大目的を有し、大決戰を望みたるものなりしも、英國をして土耳其救濟以上の同盟に贊成せしむる能はず、而して英國をして最初より贊成せしむる能はざりしも、戰爭の進歩するに從ひ、漸次英國を誘導するの希望を賴みたりと、此の說若し眞ならば英國は實に希有の機會を攫むを肯てせざりしも。千八百五十四年六月二日大宰相ロルド、アバルヂーン貴族院に演說して曰へり、『戰爭は土耳其を保護せんが爲めに起されたり、露西亞を分解するが爲めにあらず』と。機會は絕えてなくして稀に有るの好機會なりき。されど英國は之を攫むを肯てせざりき。墺地利は露西亞をして復讎をなす能はざらしむるまで斷然たる處置をなすならば同盟に加はるべき

露西亞分解同盟となりしならば

露西亞は自ら危險を知れり

好機一たび去つて容易に歸らず

意を示せり。英國一たび斷して英、佛、澳、土の攻守同盟となり、無益の日月をクリミアに費すなく、無益の血をセバストポールに流すなく、佛蘭西と澳地利とは歐羅巴方面よりし、英吉利と土耳其は小亞細亞方面よりし、一方に於て露西亞をドニエペルの彼方に追はゞ、露西亞は永く歐羅巴方面の進歩を望み得べからざるに至りしなるべく、一方に於て高加索を西歐の手に握れば、カスピアン海は露西亞の專有ならず、露西亞は永く中央亞細亞に於ける進歩を望み得べからざるに至りしなるべく、單に土耳其の安全のみならず、全世界の安全此の一擧によつて長く維持せらるべかりし也。露西亞は自ら此の最大危險を認めたり、曰く『これ露西亞死活の問題なりき』と。高加索總督たりしゼチラル、ファヂエイエフ當時の危懼を述べて云ふ、オメル、パシヤ若し同盟軍の助を得たりしならば、露西亞は絕望の地位に陷りたるべし、七百二十哩の戰線守らざるべからず、守るべき兵多く集め得べからず、一戰敗れなば未だ全く征服せられざる勇悍の山民一齊に起ち、高加索は直ちに露西亞の有にあらざるべしと。好機一たび去つて容易に歸らず、千八百六十三年波蘭土叛亂の機會も空しく過ぎ、千八百七十七年露土戰爭の機會も空しく過ぎぬ。今に於て英國

アフガニスタンの内亂

の爲めに痛歎するもの豈に只だ土耳其のみならんや、印度のみならんや。

露西亞は遂に印度に達すべき乎。英國は遂に中央亞細亞に於ける露西亞の南下を拒む能はざるべき乎。過去に於て英國をして露西亞を拒く能はざらしめたるもの、其の重なるもの、現在に於て尙ほ存在するを見れば、誰か其の然らざるを斷言するを得ん。更らに露西亞の力量を詳にせんと欲せば乞ふ『露西亞の同化力』を論ずる一章に就きて商量せよ。

十、中亞に於ける最近の要件。

中央亞細亞に關する觀察を終るに臨みて、近年に於ける重要なる二三の事件を記し置くの必要を感ず。

（一）ハザラジヤの叛亂。　ハザラジヤの地、アフガニスタンの中央にあり、壹萬八千哩の中に八種族五十餘萬の人口を有す。千八百九十年の夏、アフガニスタンの君主は貢獻を督促する爲め上部ヘルマンド地方に兵を派遣したりしが、軍隊の駐屯二年に亘り、住民、婦人及小兒に對して慘酷惡虐の舉動をなしたりき。「ウルスガン」種族之に激して蜂起し、叛亂

は次第に擴がり、君主（アミール）の軍隊容易に鎭定の効を奏せず、而して他の種族の叛亂に同情を表し聲援を與ふるもの多く、一時はカブールに在る「アミール」の地位も危殆となり、重大なる問題を協議する爲め印度總督より派遣すべき使節を迎ふる能はざるを宣告するに至りしが、千八百九十二年の冬に至り戰鬪中止せられ、千八百九十三年に至りアフガン全土漸く鎭定し、「アミール」の權威恢復せられたり。アフガン全土の鎭定、「アミール」權威の恢復は、アフガニスタンと印度との關係に利益を與ふること少小なりとせず。

（二）首都カブールの進歩。「アミール」アブヂユラマン西歐文明の利益を認識し、カルコツタの「ワルシユ、ロウエット」會社を以て用達となし、多くの文明的器械をカブールに輸入したり。鐵業、彈藥製造、大砲製造、其他の生產的製造業の工場盛に運轉をなし、學校、病院の如きまで整備せられ、英人は其の誘導者として補助者として到る處に尊重せらる。

サリスボリー現內閣の外務次官ジョージ、クルゾンか近頃『タイムス』紙上に掲げたるアフガニスタン實見の記は、「アミール」の人物の稱贊、カブールの進歩の稱贊を以つて充たされ、西歐の文明が、ヒンヅー、クシユの蔭に於て燦然たる華を開くべき好望を豫想す。「ア

ジルシット征服

ミール」は昔つて全アフガニスタンに布告し親しく英國に遊ぶの意あることを示せしが、其の子サルクル、ナル、ウルラン汗は今年の夏「セント、ゼームス」宮廷の珍客たりき。

(三)ジルシットの征服。　近く露西亞の境に進めるジルシットの領は屢々近隣山族の襲擊に苦しめられたり。英國政府其の重要の地たるを認め、千八百九十一年此に達する道路を修築しフンザ、ナガルの境なるチャルトまで開鑿の功を擧げたり。始めより抵抗の色を示したるフンザ、ナガル族此に至つて兵を執り敵對せり。彼等は固より文明國軍隊の敵に非ず、數週ならずして首長は奔竄し英兵は最後の巢屈まで迫り、後カシユガルより支那官吏を招待し前酋長の弟を立て「ラジヤ」となしたりき。此の征服——千八百八十八年キリク、パスによりムズタフ山脈を踰へて來りたる露西亞の探檢者グロムチエフスキを歡迎し、英國の使臣サー、ウイリヤム、ロックハート及コロネル、ウードクルブに對しては、其の生命を奪はんとする擧動に出でたるフンザ、ナガルの征服は軍事上、政治上幾多の利益を英國に與へたること疑ふべくもあらず。

(四)チトラルの占領。　チトラルの地、印度西北の障壁ヒンズー、クシユの「パス」を制し

チトラル占領

ジエララバットよりバダクシヤンに出づる要衝に當り、コロネル、ヤノフカパミール高原に示威運動をなせし以來、英國政府、印度政府の特に注意怠るべからざる地となれり。千八百九十二年「メタル」アマン、ウル、ムルク死するや、繼嗣の爭鬪起り、次にアフズル、ウルムルク兵庫金庫を收め國人の承認を得しか、間もなくバダクシヤンに逃れたるアフズルの諸父シエル、アフズルカン汗數百のチトラル人及アフガン人を集めドラ、パスを踰へてチトラルに入り、アフズルを殺して位を奪へり。長子ニザム、ウル、ムルク之を見て其の隱れ家を出で勇兵を集め、行く〳〵ヤツシン及マスチユジを徇へシエルを追ひ人民の承認を得て平和を恢復したりき。ニザムは初めアフズルとの爭に敗れてジルシットに逃れ居たるものなりしかば、歸りてチトラルの主人となりしより好意をジルシットの英國官吏に通じ、英國官吏のチトラルに駐劄することを承認したりき。今年の春に至り、土人と英人との爭亂あり、英政府精兵を派して之を征討し夏に至りて全く鎮定したるは最近の事實としてまた說くを要せず。印度及印度を寶庫として所有する英吉利は、鎮定の後チトラルを如何にすべきかの問題解釋せらるべき時に際し、之を放棄せんと欲せる自由黨內閣と之

パミール境界決定

ヤノフの探檢隊

を占領するに決したる保守黨内閣とが更迭したるを感謝するの時あるべき也。

(五)パミール境界の決定。　困難なる境界問題は漸次決定せられ、アムー、ダリアの方面先づ決定せられ、次でアムー、ダリアより波斯に至るまで決定せられ、英、露、支那、アフガニスタンに關係せるパミール方面は長き間不明瞭に經過せり。千八百九十一年印度政府の命により支那トルキスタンに派遣せられたるカピテン、ヤングハズバンド、初夏の頃ヤーカントにありて支那パミールに露兵の駐屯するものあるを聞き、リユーラナント、ダビトソンをアリクル、パミールに派し實情を探究せしめたり。かくてヤングハズバンドはワーカンに歸らんと欲しポサイ、イ、グムバズに於てコロチル、ヤノフの隊に出會し、「ザール」の領として要求せらるゝ地に達するバスを踰へざるべしとの誓約を強ひられ、ダビドソンもまたフエルガナに於て同じヤノフの隊に出會しマルシーランまで拐帶せられ、カシユガリアに歸りタクデユムバシユに於てヤングハズバンドに會しジルシット及カシユミールを經て印度に歸れり。露西亞は英國官吏に對する此の如き擧動につき悔恨の意を致せり、されどペテルブルク政府の常例として表面の譴責は裏面の賞與を以て打ち消され、千

アフガンを襲ふ

最後の決定

八百九十二年六月十四日、歩兵、「コサック」、砲兵等を以て組織し義勇兵、科學者を加へたる強大の探檢隊ニユー、マーランを出立し、嶮を排し難を冒してアクタシユに達し、アリクル、パミールのソタマツシユにアフガンの大兵駐屯するを聞き道を轉じて之に向ひ塹の爭鬪を開きたり。露帝は再たびヤノフの處置を否認し、印度政府は之に對しジルシット守兵の援加を命じたりしも既に遅く、探檢隊は欲するがまゝにアリクル谿、ランガル、キシット(ヒンヅー、クシユの麓)及タシユグルカン、タクデユムバシユ附近の三ケ所に示威運動をなして十月一日マーランに歸れり。これよりして各關係國委員を派して境界決定を商量するの議となり、今年三月十一日に至りウイクトリア湖以東の境界、英露の間に決定せられ今や實地につきての劃定を商議しつゝあり。露西亞の新聞は或は此の條約を以て讓與に過ぎたるものとして故外務大臣を非難するありと雖、露西亞は過去の例に於て然る如く故なくして讓歩をなすものにあらざることの知らるべき日來らざるを保すべからず、短日月の間に起れる二三の小事實は歴史に刻まれたる大事實を打ち消す能はず、パミール境界決定は中央亞細亞の局の圖圓にあらざるべし。若し夫れコロチル、ヤノフの敏活

露西亞が得たる經驗

なる運動が、此の如き高地に於て騎兵、砲兵の如きものを運搬し、給養することの困難——到底打ち勝たれざるべしと論ぜられたる困難を、實際に於て、打ち勝ちたる經驗及びヤノフが要處に分ち殘したるものが著しき損傷なく、半北洋的寒氣のバミールに於て、千八百九十二——三年の冬を過したる經驗は、少なからざる兵略上の利益を露西亞に與へたるべし。

中央亞細亞鐵道の延長

(六)中央亞細亞鐵道の延長。　英國が幾分か印度の疆界を固めたる間に、露西亞もタルキスタン疆界の勢力を增すに怠らず、交通の迅速を加ふるに怠らず。最近に於て最も著しきはサマルカントよりアンヂシャンに達する後裏海鐵道延長及タシュケントに達する支線布設が今年六月八日を以て裁可せられ、三年半を期して竣工すと定められたること也。

ヱルマクの功業

第四、朝鮮及滿州へ。

一、悉比利亞征服。

露西亞人は十一世紀の頃より、ノヴゴロットの商人により朧ろげに東方悉比利亞無人の廣地あることを知れり。而して歐羅巴に於ける本土よりも更に廣大なる此地方を露西亞の領土とする端緒を開きたるは「コサック」の頭領ヱルマクなりき。十六世紀の末葉、今のペルム州地方に住し廣大の土地を所有し、貿易の利益を專斷せるストロゴノフの一族あり、「オスチャク」、「ボグル」、「ゼレミス」等野蠻種族の掠奪を防ぐ能はず、露帝に請ふて、ペルム地方の司令官となり、露西亞殖民地の壯丁を募集し隊を作り兵を執らしむるの許可を得たり。既にして彼等は速かに自衛の地位より攻擊の地位に轉じ、千五百八十二年「コサック」の頭領ヱルマク、チモフェエライッチ、大なる事業には手をつけざれば止まざる部下を率ひてウラルを踰へ大冒險の途に出立せり。是れより先き彼等はトボル河畔の韃靼人を制服した

イスケル占領

エルマク戰沒

りき。露帝此の報を聞き、專斷の所爲を憤り、急使をペルムに發し、ストロゴノフをしてエルマクを召還せしめたりしが、時既に遲く、冒險隊は既に驚くべき事業の半を成就したり。彼等は數門の大砲、小銃、案內者、通譯者等を有するのみにして、征服せんと欲する廣土の眞狀も知らず、遠征に必要なる材料も貯へず、小舟に搭して出發し、川盡きて舟を棄て、川に遇ふて舟を作り、『火花を散し電光の如く閃き、矢は見へずして人を殺し傷くる弓』を以て土人の膽を奪ひ、トボル河に達し流に順ひて進行せり。悉比利亞の汗クチユム危機の切迫するを見、三十倍の大兵を集めて邀へ戰ひしも大に敗れ、首都イスケル(またシビル)を棄て森林に奔竄したりき。エルマク號令して秋毫も犯すなく、寬嚴相濟して四方の土民を懷け、副將イワン、カルッオをして悉比利亞制服のことを露帝に奏し、司令官及援兵派遣のことを請はしめたり。

此後運命一轉し、最初にして最剛なる冒險隊は或は捕はれ或は死し、一人一人其の數を減じ、千五百八十四年にはエルマク自身もイルチッシユ河畔に於て伏兵に陷り溺沒せり。エルマク沒せしも、其の功業は遂に空しからず、悉比利亞征服の基礎は彼によりて定め

オコツク海に達す

ベーリング海峽發見

アラスカ占領

られ、次の二世紀間、「哥索克」の群、商人、獵夫、脫走農奴等陸續、ウラルを踰へて新原野に殖民し、一步一步露西亞の爲めに領土を擴張せり。

エルマクの遠征以來八十年ならずして悉比利亞全土を橫斷してオコツク海に達したる「コサック」の一群ありき。彼等は千六百四十三年——五十年南に下りてアムール河に達し之を占領せしも千六百八十九年支那人の爲めに退けられたりき。

千六百四十八年「コサック」のデヤチスなるものベーリング海峽を發見し、翌年亞細亞大陸の東北端を廻航したりしか、人の之を知るもの少なく、亞細亞と亞米利加との最狹海路の學術的探究は全くベーリング(千六百八十年——千七百四十年)の功業に歸するに至れり。ベーリングのカムチヤツカ半島探檢、アリユーシアン群島探檢の成功により、露西亞人は亞細亞の東端に達し、遂に海峽を渡りて亞米利加の大陸に達し、アラスカ半島を占領し、新世界に於て英吉利人と不思議の對面をなせり。されど加奈陀の西端が英國を距ること遠きが如く、アラスカが露西亞本土を距ることも甚だ遠く、地圖の上に於ては英露間唯一直接の接壤地も實際の上に於ては關係する所甚だ少なく、重要なる出來事を喚び起すに足らず。

此に於て露西亞政府は千八百六十七年、七百五十萬「ルーブル」の廉價を以てアラスカの地五十三萬餘方哩を北米合衆國に賣渡したりき。

歐洲に於ける本土よりも廣大なる悉比利亞の地は夢の如くにして露西亞皇帝の懷に入れり。抑もまたこれ運命か豫定せる事業にして、天然に於て、氣候に於て、風土に於て同調一樣なる歐羅巴露西亞と亞細亞悉比利亞とは一躰として存在すべきものにして、分裂して存在すべき疆界を有せざる也。悉比利亞征服は露西亞か眞の露西亞となりたるに過ぎず、悉比利亞は露西亞によらずして發達するを得ず、露西亞は悉比利亞なくして活動するを得ざる也。

ウラル山を踰へて東しまた東し、遂に悉比利亞全土を併せて亞細亞の東端大平洋の岸まで達したる露西亞は一たびベーリング海峽を渡りて北米の一角を占領せしも、アラスカの賣渡によりて再たび天然の指定せる域内に歸れり。東侵の事業を終局したる露西亞はこれよりして專ら力を南下の事業に注がんとす。

二、黑龍江地方侵畧。

黑龍江地方に於ける露西亞蠶蝕の事蹟を知るものは、悉比利亞に於て、太平洋岸に於て、滿州國境に於て、朝鮮國境に於て露西亞の勢力益々增進する今日、支那が日清戰爭の局を結ばん爲めに深く露西亞に倚信し、前門の虎を防がん爲めに後門に狼を誘ふの不謹愼を怪まざるを得ざる也。

千六百五十年の頃「コサック」統領エロフェイ、オレクマ河及タンゲル河より南下して黑龍江岸に達し、富饒の土地を發見し、ヤクツクに歸りて百五十餘の冒險者を誘ひ千六百五十一年再たび來りてアルバジンに營せり。富饒なる黃金境發見の報、全悉比利亞を通して首都モスコウに達し、オヌフリ、ステパノフ統領として遣はされ、四方より壓し來る滿州人に對してカモラ城を守ること數年なりしが、千六百五十八年に至り敗死したり。ユニセイスクの司令官パシコフもまた此時バイカル湖を渡りてチルチ河に達しチルチンスク城を立て黑龍江畔の冒險隊を集中せんとせしもステパノフの敗死に會し意を果し得ざりき。

千六百六十五年ニキフォル、チエルニゴフスキ罪囚の一隊を率ひて再たびアルバシン城を

チルチンスク條約

築きたり。千六百七十七年ゼヤの上流にフェルコゼイスク築かれ、セリムベイウスク及ドンスク諸鎖築かれたり。八十五年一萬五千の滿州兵再たび來りて、アルバシンを攻め、露兵を追ひ、露兵援軍を得て再たび之を復し、滿州兵三たび來りて之を圍み、露將トルブジン戰歿し、アファナシ、ベイトン代りて力守するに及び、八十七年二月露政府書を送りてアルバジンの圍を解かんことを乞ひ、ゴロウヰムを遣して疆界談判を開かしめ、八十九年八月二十七日左のチルチンスク條約を決定したり。

一、將下由レ北流入二黑龍江一之綽爾納即阿倫穆河相近格爾必齊河上、循二此河上流不毛地有レ石大興安一以至二於海一凡嶺南一帶流入二黑龍江一之溪河、盡屬二俄羅斯國界一、

一、將下流入二黑龍江一之額爾古納河（アルグーン）爲レ界、河之南岸爲二我屬一、河之北岸令爲二俄羅斯屬一其南岸之眉勘爾喀河口、所レ有俄羅斯房舍遷移二北岸一、

支那は黑龍江を以て疆界となさんと欲するゴロウインの提議を斥け、興安嶺（スタノウオイ）を以て疆界となし、黑龍江外に露人を追ひ、康熙帝の使臣はペートル大帝の使臣に對して外交の勝利を得たり。土耳其、瑞典等と生存競爭の戰鬪に從事しつゝあるペートルは此の不利益なる條約を默認するの外、遙遠なる東方に於て爭ふの閑を有せざりき。これより

ニコラエフスク占領

ムラウイヨフ遠征

百六十年間、黑龍江地方貿易に關する二三の條約あり、貿易のことより生じたる葛藤あり、遂に境界の衝突となりしこともありしがゼヤラル、ムラウイヨフが愛琿（アイグン）條約を締結するまでチルチンスク條約によりて決定せる疆界線は變更せられざりき。

千八百四十一年東悉比利亞總督に任ぜられたるゼヤラル、ムラウィヨフは千八百四十八年チウエリスキをしてバルチック海より黑龍江口に航せしめ、五十年八月六日今のニコラエフスクに黑鷲旗を建てしめたり。此時黑龍江下流は實際に於て主人なきの地なりき。ムラウイヨフはまたチルチンスクの鑛夫を募り「コサック」に編入し小滊船二隻をシルカ河に艤して各地の防禦を嚴にし、千八百五十三年本國政府に勸めて、黑龍江地方、ゴルビッ河の上流より以下海に達するの疆界は未だ明白に劃定せられざれば、清政府より疆界商量委員を派遣せられんことを請ふとの公書を送らしめ、翌五十四年黑龍江第一回遠征艦隊を率ひ、シルカを發しゼーア河口を過ぎ八月ニコラエフスクに至り、イルクツクに歸り、五十五年第二回遠征艦隊九十三隻を率ひてマリイムスクに至り、兵を集合せり。黑龍江の水利、富饒なる沿岸既に充分に探究せられ、之を攫取せんことは東悉比利亞總督の最大願望となれ

沿海州設置

支那の危機

り。されば此時黑龍江將軍奕山がマリイムスクに來り疆界決定の談判を開きしも、露西亞は最早チルチンスク條約の不利を忍ぶ能はず、黑龍江及ウスリー江を以て疆界となさんことを固執したりき。

千八百五十六年第三回黑龍江遠征をなすこと及歸國すべき兵士の爲めに沿岸に兵營を建つべきことを清國愛琿府の知事に報じ、翌年マリイムスク、ヒレガム、ゼーア、カマーラの四營を設けて江上數百里の連絡線を作り、東悉比利亞に沿海州を置き、カムチヤッカ、ウード及黑龍江沿岸を以て之に屬し、移住民を送り、事實に於て露領たることを宣告せり。

千八百五十七年露國は緊要の事件を辨理せん爲めカウント、ブーチヤチンを以て全權大臣となし派遣することを北京政府に通報し、ムラウイヨフをして一行を保護して黑龍江を下らしめたり。ムラウイヨフこれを機としてシルカ及アルグン河の合流するウスチ、ストレウカより興安嶺に至るまで黑龍江左岸に許多の兵鎮を增置したり。

國內の長髮賊を鎭定せんが爲め、英佛の聯合軍を拒絕せんが爲め全力を盡しつゝある支那は、眉目の間に迫れる現在の危急より脫出するの外、將來の大憂患たるべき徐々の侵略が

アイグン條約

英佛同盟軍の賜

遙遠の地にて起りつゝあるを知るも、また如何ともする能はざりき。ムラウイヨフ十數年の經營は其の功を奏し、黑龍江岸の主客は其の地位を轉倒したり。百六十年前の談判に於て、優勢の武力を以てゴロウイムを脅やかしチルチンスク條約を强ひたる復讐は來れり。

千八百五十八年五月十六日ゼチラル、ムラウィヨフと將軍奕山との間に決定せられたる愛琿條約により、露西亞は一兵を動かすことなくして莫大の地を併領せり。

一、黑龍江松花江左岸、由二額爾古納河(アルグーン)一、至二松花海口一、作爲二俄羅斯國所屬之地一、右岸順二江流一、至二烏蘇里河一、作爲二大清國所屬之地一、由二烏蘇里河一往レ彼至レ海所レ有之地、此地如下同接連二兩國交界一、明定之間地方上、作爲二兩國共管之地一、由二黑龍江松花江烏蘇里河一、此後只准二中國俄國行船一、各別外國船隻、不レ准下由二此江河一行走上、黑龍江左岸、由二精奇里河一以南、至三豁爾莫勒津屯一、原住之滿州人等、昭レ舊准下其各在二所レ住屯中一、永遠居住、仍著二滿州國大臣官員一管理上俄羅斯人等和好不レ得二侵犯一、

滿州の疆界に大變革を來し、露西亞をして遂に黑龍江に意を專らにせしむるに至る此の重要の條約は僅かに五日間にして決定せられたりと傳へらる。同盟軍が櫛風沐雨備さに辛酸を嘗めつゝある時に於て、傍觀者たる露西亞が一兵を勞せずして此の大利益を得べしとは英も佛も清も共に思ひ設けざりし所なるべし。而して二年ならずして更に著大なる疆界條約の決定せられんとは誰しも思ひ設けざりし所なるべし。

ブーチヤチンの使命

これより先き千八百五十七年カウント、ブーチヤチンはニコラエフスクより軍艦「アメリカ」號に乘じ、九月天津に着し清吏に接し國書を示せしが、天津は外人の入津を許さゝる地なりとて斥けられ上海に至り、訓令を待ち、英、佛、米三國の全權大臣と謀り、各自要求の件を北京に錄送し、北京政府が全權委員を上海に派出して商議を始めんことを照會せり。北京政府は之に答へ、英、佛、米との談判は廣東に於てすべく露との談判は悉比利亞に於てすべしと云ひ、到底温言を以て勸誘の効を奏すべく見へざりしかば、英佛の同盟軍武威を示して白河に至り、河口の砲臺を破りて天津を進擊し、續てブーチヤチンも露西亞政府が豫ねてペルチツク海より派遣したる七隻の軍艦を率ひて天津に至れり。此に於て支那政府俄かに大臣を天津に派し、愛琿條約に後るゝ二週日にして露、英、佛、米四國と天津通商條約を締結したりき。然るに千八百五十九年英佛の公使、批准交換の命を帶び白河に來りたるに、支那政府は河口を封鎖して之を拒み、再たび同盟軍と開戰し一時之を擊退したるに勢を得、愛琿條約及天津條約の不當を唱へ其の遵行を拒まんとする傾向を示せしが、翌千八百六十年同盟軍北塘に上陸し、天津を陷れ北京に迫るに及び、同盟軍の要求に

天津通商條約

同盟軍再度の攻擊

北京條約

從ふと共に露國大使ゼチラル、イグナチエフの要求に從ひ恭親王をして北京條約十五條を議定せしめたり。北京條約の滿州疆界に關するもの三條、

一、議定詳明ヤ一千八百五十八年、歸乙月十六日、即咸豐八年四月二十一日、在二愛琿城一所レ立和約之第一條上、遵照、是年伊云月初一日、即五月初三日、在二天津地方一所立和約之第九條上、此後兩國東界、定爲由什勒喀、額爾古納兩河會處、則順二黑龍江下流一至二斡江烏蘇里河會處一、其北邊屬二俄羅斯國一、其南邊地至烏蘇里河口、所レ有地方屬二中國一、自二烏蘇里河口一而南上至二興凱湖一、兩國以烏蘇里及松阿察二河一作有交界、其二河東之地、屬二俄羅斯國一、二河西屬二中國一、自二松阿察河之源兩國交界一、踰二興凱湖一、直至二白稜河一、自白稜河口、順二山嶺一至二珊布圖河口一、再由二珊布圖河口一、順二渾春河及海中間之嶺一、至二圖們江口一、其東皆屬二俄羅斯國一、其西皆屬二中國一、兩國交界、興二圖們江之會處及該江口一、相距不レ過二二十里一、且遵二天津和約第九條議定一、給還地圖內、以二紅色一分爲二交界之地一、……

上所レ實者乃空曠之地、遇レ有二中國人住之處及中國人所レ占漁獵之地一、俄國均不レ得レ占、仍准二中國人照レ常漁獵一、設立界牌一之處、永無更改、並不レ侵占附近及他處之地、

一、嗣後交界、遇レ有二含混相疑之處一、以上兩條所レ定之界作爲二解釋一、至二東邊自二興凱湖一至二圖們江一中間之地、西邊自二沙漠達巴哈一至二洪罕一中間之地、設立界牌一之事一、應二如何定立交界一、由二兩國一派出信任大員一、聚レ公勘查、東界勘查在烏蘇里河口一會齊、於二咸豐十一年三月內一辦理、四界勘查、在二哈爾哈臺一會齊商辦、不二必限程一日期一、所レ派大員等、遵二此約第一第二條一、將二所レ指各交界一、作記一給圖一、各寄爲二俄羅斯字二分、或滿洲字或漢字二分其四分一、所レ作圖記、該大臣等蓋押用印後、將二俄羅斯字一分、或滿或漢字一分共二分一、送二俄羅斯一收存、將二俄羅斯字一分、或滿或漢字一分一送中國一收存、互換二此記文地圖一、仍會同具文、蓋押用印、當爲補綴二此約之條一、

一、此約第一條所定交界各處、准許二兩國所屬之人隨レ便貿易一、並不レ納レ稅、各處邊界官員、護助二商人一、按理二貿易一、其愛琿和約第二條之事、此次重復申明、

イグナチエフの外交手段

同盟軍は、實に、天津を陷れ清人の詐謀を破り北京に迫りつゝある時に於て、再たび此の如き大利益を傍觀者たる露西亞に與へんとは夢にも思ひ搆けざりし所なるべし。されば或は露西亞が此地を得たるは舊式の大砲數百門と交換したるなりといふものあり、或は露兵の支那軍中に交りて英佛の兵と戰ふを見たりといふものありき。露西亞は實に如何にして主人なき地を取るが如く容易に此の廣大の地を取りたる乎、支那は何が故に敝屣を脱するが如く此の廣大の地を讓りたる乎。イグナチエフに從ひ此の北京條約決定に與りたる人の語として記されたるものに曰く、――

『イグナチエフは千八百五十八年ブーチャチンが結ひたる天津條約の批准交換を翌年四月廿四日北京に於て行へり。彼は英佛同盟軍が白河封鎖に對し如何なる方畧を以て復讐すべきか、事件の落着如何に成り行くべきかを視察し機に投し居間仲裁をなすべき露廷の訓令を持して北京に留まれり。既にして同盟軍北京に迫り、清帝は各大臣と共に熱河に逃れたり。既にして同盟軍は北京に入り作戰の目的を達せしも、此處に終局の談判を商議すべき對手を見出し得さるに苦めるに際し、イグナチエフ出てゝ仲裁の位地に立ち同盟軍に含して意のある所を問ひしに、清廷今日の威力また其の國を治むるに足らさるを以て他に國帝を擇ふべしとの論あり、二三の候補者すら指定せられたり。イグナチエフ極力舊政府を破壞するの不得策を論ず、歸りて恭親王に說き同盟軍に含せんことを勸め、親王が不測の變を恐れて容易に諾せさるを見、禮部衙門と露西亞公使館とは極めて近接し居れば、同盟軍若し親王に無禮を加へんとする如きあるも、隣の露西亞公使館に及はんことを慮りて敢てせさるべしと保證し、談判開始を見るに至れり。露國の好意とイグ

滿州を挽り朝鮮を窺ふ

ウエーベル來る

ナチエフの盛力に報ゆる爲め、清廷は採れてより露西亞の要求にして一度は之を斥けんと欲したる讓與をなすに至れり。』

兎に角、愛琿條約、天津條約及北京條約を合せて完成したる讓與により、露西亞は全く黑龍江の下流を併せウスリー江に沿ふて南下し、彎月の如く清國の根據滿州の背後を繞り、圖們江より朝鮮半島を窺ふに至れり。印度を中央としコンスタンチノーブルを右翼とする南下運動の左翼はかくの如く容易に成り、而も著大の結果を來すべき望を約せり。

三、露西亞及び朝鮮。

露西亞既に烏蘇里一帶の地を領有し朝鮮と境を接し來りしも、歐羅巴方面及び中央亞細亞方面の經營に忙がしく遠隔なる東方に多く意を用ふる能はず、漸く千八百八十四年（明治十七年）に至り、清國に在りしウエーベルを以て全權委員となし、朝鮮と通商條約を商議せしめたり。ウエーベル京城に入るや、獨逸人モルレンドルフを利用することによりて、早く其の技倆を示せり。モルレンドルフは清の直隸總督李鴻章に任用せられて久しく其の

モルレンドルフ

露韓通商條約

幕中に在り、李の意を受け朝鮮顧問として來りたるものなりき。彼れ盲昧なる朝鮮に於て功名心を充たすの地を發見し、自ら朝鮮人の後裔なりと稱し其の名に當つるに穆麟德なる漢字を以てし京城の人望を得んと勉めたり。ウエーベルの京城に入るやモルレンドルフは直ちに直隷の舊主人を棄て新來の客、露西亞の用をなすものとなれり。ウエーベル外に於て外務衙門總理大臣金炳始と表面の談判をなせば、モルレンドルフ内に於て其の地位と韓廷の無智とを利用し日本及支那の朝鮮に不利なることを說き、露西亞によりて兩國を制するの最も安全なるを說き、商議速やか決了し、六月廿五日(露曆)露韓通商條約及び附錄幷に特別條約書に調印し翌千八百八十五年十月交換を行ひたりき。モルレンドルフは此の功により露帝より「セント、アンナ」第二等勳章を受領し、ウェベルは代理公使兼總領事として京城に駐劄せり。

此の際アフガニスタン境界事件につき中央亞細亞に於て英露の衝突あり、兩國連りに戰備を修め最後の手段に訴へんとするの風を示し、英國は逸早くも支那海の安全を保つの關門として、悉比利亞沿岸を攻擊するの根據として、千八百八十五年四月十五日、朝鮮と對馬と

英の巨文島占領

露西亞の反對

朝鮮の强硬

の間に位する巨文島を占領せり。朝鮮は直ちに列國利害の燒點となれり、日本は英國が如何なる契約を朝鮮と結びたるかを質問せり。露西亞は固より强硬なる反對をなせり。かくて四月廿七日朝鮮の主國たる資格を以て異論なき旨を英國政府に答へ、ロルト、グランウイルの節畧を受領したる倫敦駐劄支那公使は五月六日を以て

『……されど北京に在る露西亞公使が、支那政府にして若し英國の巨文島占領を承認するあらば、露西亞政府は之に對して朝鮮王國の或る港灣若しくは或る土地を占領するの必要を感するに至るを承知せられたしと總理衙門に通知したるを以て、而して、日本もまた同一の方針を執るに至らんとするの憂あるを以て、支那政府は此等の不便及び此等の不便より結果し來るやも知るべからざる葛藤を避けんが爲めに、女皇陛下の政府が提出したる約束に調印することを其の公使に許し能はざるを遺憾なりとす……。』

と英國政府に通知したり。五月二十日朝鮮政府が英國公使に送りたる照會書は更らに著しきものなりき、――

『內海より來りたる風說によれば英國女皇陛下の政府は巨文島になすあらんとすと。

此島は吾政府の所有にして他邦の之を犯す權利を有するものなし、此の如き騷動は國際法の理に於て許されざるものたり。吾政府報を聞き、驚き且つ惑ひ、遽に官吏を派して風說の果して眞なるや否やを確かめしめたり。使者未だ歸り來らずと雖、公文を以て北京公使館よりの通牒を報告せられたるを查し、前記風說の正確にして信ずべきを知れり。英國の如き禮節の義務を重んじ、國際法の規定に通ずる政府にして、此の如き唐突の騷動に出づるは殆んど信ずべか

朝鮮政府の黒幕

らさる所……。

女皇陛下の政府にして禮節の義務を重んせば、吾邦家の幸福の爲めに直ちに其の方針を改め此の島より退去するを要す。然らすんば吾政府は義、正に之を默視する能はす、締盟諸國に報ゝ輿論に訴ふべし。……』

照會書は後に至りて撤回せられしも、朝鮮政府をして此の如き强硬の辭を連ねしめたるものの、確かにモルレンドルフの德源によりたるを知るべく、モルレンドルフを通じて露西亞公使ウエーベルの面影を認め得べしと判斷せらる。

英國は五千磅の借地料を拂ふべきことを申出で、貧弱政府を誘はんとせり。露公使は朝鮮政府が巨文島を英國に賣らんと欲することを確知したりと外務衙門に嚴談し、英國の申出を拒絶せしめたり。朝鮮若し之を承認したりしならば同樣の要求は他の方面よりも來るべかりし也。既にしてアフガニスタンの事落着し中央亞細亞の風雲收まりしかば、露西亞は愈ゝ嚴しく支那政府及朝鮮政府に迫れり。李鴻章の如きは英國若し現時難局の因を斷つの擧に出づるにあらずんば英清兩國間の國交を害するに至るべしと公言したりき。ロルド、サリスボリーは之に對し、支那政府若し英國が巨文島を撤退せるの後、他國をして之を占領せしめざるを勉めなば英國は速かに撤退すべしとの意を示し、千八百八十六年四月十四日

巨文島撤去露西亞の約束

英露の約諾

に至りロルド、ロスベリー公文を以て發議をなし、支那政府此の發議に從ひ、協議を整ゝ、左の結果を報告せり——

『……彼（露西亞公使ラゼンスキー）はまた英國若し巨文島を撤退せば、露西亞政府は如何なる場合に於ても朝鮮領土を占領せざるを誠實に誓約することを告げたり。

此に於て總督李はラゼンスキー氏に告ぐるに、英國軍艦、巨文島を去るの後、再たび他國の軍艦來りて占領することあるを恐るが故に、露西亞は今後決して此の島を取らざるべきことを保證し、支那政府をして此の保證を英政府に呈し、其の撤退を要求せしめざるべからざるを告げたり。

かくて後、ラゼンスキー氏は露西亞政府の訓令に從ひ、最も確實なる保證をなし、將來露西亞は朝鮮領土を取らざるべきことを明白に宣言せり。』

千八百八十七年二月廿七日英國軍艦は巨文島の占領を撤去したりき。露西亞は實に支那政府を通して、從來朝鮮の地に手を着けざるべきことを約束したる也。

露西亞既に朝鮮と通商條約を締結したるの後、追加條約を設けて陸路貿易を開かんことを要求し、モルレンドルフは韓廷の名を以て、遠からざる中、時を期して要求に應ずべきを約束せり。支那が袁世凱を任して駐劄朝鮮總理交渉通商事宜となし、大院君を護送して天津に歸るや否、直ちに引き返して京城に行かしめたるは、一は日本に對して支那の權威を

張り、一は露西亞に對し陸路貿易條約の締結を監視するにありき。袁は使命の如く陸路貿易條約の商議を妨害せんと試みたるのみならず、入韓の翌年千八百八十六年（明治十九年）八月の頃、有名なる露韓同盟事件の捜索を行ひ内外の耳目を驚かしたり。

露國公使ウエーベルの技倆果して或るものが云ふ如く恐るべきものにあらざりしとするも、確かに碌々たる他邦の公使に超越したるものありしこと疑を容れず。されば李鴻章が特に派遣したるモルレンドルフ直ちに其利用する所となり、李之を悔ひ更にデニーをして代らしむれば、デニーもまた直ちにウエーベルの利用する所となり、ウエーベルは國王の信任を得、夫人は王妃の親友となれり。袁世凱が中國の威を以て大院君の一派を助け、暴風の如き政略を行ひつゝある間に、ウエーベルは友邦の情を以て太陽の如き政略を行へり。上衣を吹き飛ばさんとする暴風に對しては益々堅く帶を締むる旅人も、徐々として來る太陽の熱に對しては自ら上衣を脱くと云へるイソップの譬諭談の如く、支那の干渉政略愈々甚しきに從ひて國王、王妃及閔族の徒は心を露西亞に寄せ、『親信なる』露西亞によりて干渉政略及大院君の圏外に脱するを試みんとするに至れり。かくて國王は密書を露西亞公使ウエーベルに與へ全國の保護を露西亞に依頼し、金鎬元に内意を傳へて浦鹽斯德に赴き沿海州の官吏と秘密の談判をなさしめたりと傳へらる。八月十四日袁世凱は密書事件究問の爲め清廷より海陸兵派遣の電報ありたることを告げ、速やかに詳かに事件の顚末を審査せんことを要求し、京城の騒亂は北京及東京の憂慮となりしが、關係者として指名せられたる四名の官吏は夢にだも此の如き文書のことを聞きたるなしと辨じ、ウエーベルも亦曾つて此の如き文書を領收せしことなきを辨じたり。かくて此の事件は一時の謠傳として平穩に過ぎ去りしが、當時統理衙門の署理督辨たりし金允植は國王公使間に密書の往復せるは確實なる事實なるを語りたることありと云ふ。

かゝる間に露公使は前約を踐んで陸路貿易の條約を商議せんことを要求し、所謂追加條約草案なるものを提出せり。

一、圖們江の兩岸に於て露韓兩國の間に朝鮮里程百里に渉る一帶の土地を劃し、此の地方の貿易は露國人及び朝鮮人の爲め全く自由たるべし。

一、朝鮮は現行開港場の外、特に露國人の貿易及び居住に供する爲め圖們江より朝鮮里數二百里なる富寧を他の諸開港場と同一の方法にて特に露國人のみに開くべし。

支那干渉政署の監督最も嚴重なるあり、各國公使の忠告親切なるあり、朝鮮政府も畧ぼ其の不利なるを知り躊躇遷延せしと雖、モルレンドルフの前約既に與へられ、また如何とも する能はず、趙秉式を全權委員となし、千八百八十八年八月八日所謂慶興條約に調印し、翌八十九年(明治廿二年)十月慶興を開きたり。モルレンドルフが李鴻章より派遣せられたる朝鮮顧問として却つて露西亞の爲めに通商條約の締結に盡力したるが如く、デニーもまた同一の資格に於て露西亞の爲めに甚だ利益ある慶興條約の締結に盡力したりき。

一、露國人民は朝鮮國の釜物浦、元山、釜山、各海口并に漢陽、京城、揚花津(或は附近に於ける一港)五ヶ所に於て通商するの外に咸鏡道慶興府一ヶ所を開き其の貿易を准すべし。

一、露國より派遣する所の公使及隨行員并に各處に駐劄する領事、副領事官、境土事務官等は隨意に朝鮮の各地に旅行遊歷することを得べし。而して朝鮮國地方官は沿途相當の保護を與ふる爲めに旅所免狀を發給し并に適宜に人を派し一行を護送すべし。遊歷者より發送する信書は其の地方官衙に附し遞送を依頼すべし。重大緊要なる事件に關する文書は特に露國官吏の適當なる人員或は他國人に附して專送することを得べし。此際沿途地方に於て毫も關阻を加ふべからず。

一、此外に朝鮮官吏は慶興附近五里以内に於て、空地一段長さ朝鮮里一里を超にざる地所を以て露國人民の駄牲、宰牲の牧場を設くべし。該地所撰定及看守等に關する條約は兩國地方官に於て妥議商定するものとす。該牧場に於て豪養せし畜類は貿易品として該所より輸出する場合に於ては相當の稅銀を完納せしむるものとす。露國人の自用に係るもの并に荷物運搬に使用するものに限り免稅すべし。若し此外露國人は慶興居留地を距る朝鮮里十里内外にありて、

無期限或は有期限を以て、地所を借用し又は房屋を借用購買するは其の便宜に任すべし。其の完納すべき地租等の諸項は朝鮮國自ら定むる所の稅則を遵率すべきものとす。

一、又朝鮮は露國人民に該處に在りて諸般の製造所を建設するを准し、後來其の營業を阻滯することを得す。

一、圖們江、兩國沿岸の船舶は行走隨意たるべし。其の渡船並に上下船舶に關する制度は今後兩國の官吏に於て商議を遂げ、特に行船並に河面警察規則を定め彼此の便を務むべし。

露國最初の要求たる圖們江南二百里の富寧は江岸の慶興に止まり、一百里の空地は僅かに一里に止まりしと雖、露西亞は此の特別の條約によりて其の長き手を高麗半島に着け得べき地位を確かに占め得たるも。此の條約によりて慶興の開かれたる時「ロイテル」電報は、誤つて朝鮮は露西亞の保護國となりたりと傳へたり。「ロイテル」は遂に誤報たるべき乎、或は豫言たるべき乎。

著しきは烏蘇里地方の經營也。烏蘇里の地、もと人口稀薄、以て充分の壓力を滿州及朝鮮に加ふる能はず、始めには、饑饉に際し國境を踰へて生活を求むる朝鮮の流民を保護し齎腴の土地(コルサコフ、カローノフカ、ブスロフカ等の如き)を與へ、農具、牛馬、紙幣等を給したりしが、八十六年に至り移住民規則を定め、八十七年に至り黑龍江沿岸總督府

浦鹽斯德軍港

悉比利亞鐵道

の決議に於て、邊境にある朝鮮人の南烏蘇里に轉住するを禁じ、之をして北烏蘇里及黑龍江上に移住せしめ、而して朝鮮に接壤する南烏蘇里の地は本國人を以て之を充たさん爲め八十八年烏蘇里河畔官有地永久貸下法を立て、八十九年慶興を開くに及びて南烏蘇里州「ニサック」屯田の策を施したり。ニコライウスクに築かれんとする軍港を更に南方に移し少しにても氷結の不利を減ぜん爲め、西は滿州の吉林、寧古塔等を控へ、東は海を隔てゝ日本海岸一帶と對し、而して朝鮮國境に最も近き浦鹽斯德港を以て最も適當なりと撰定したるは、同年八月卅日の勅令なり。東方沿岸總督府は早くも千八百七十二年より此の地に移され居たりき。而して此の方面に於ける露西亞の勇往邁大なる政略の最も著しき發表は、本國と浦鹽斯德とを連絡する悉比利亞貫通大鐵道なることはまた云ふを須たず。

四、日本、支那及び朝鮮。

我等の記憶を新ならしめんが爲め極めて簡約に日韓の關係及び清韓の關係を記さしめよ。

維新後日本が朝鮮と交通したるは明治元年十一月、維新の盛擧を告げ舊好を修めんとを求

日本維新の盛擧を告ぐ

東萊府使日本を侮辱す

征韓論

めたるに在りき。朝鮮受けず。其の理由を詰問して東萊府使の答書を得たり、——

『大抵貴國之稱レ皇稱レ勅、天下無二異辭一、則行二之其國一、自當二翕然而順一、苟其不レ然、則此重寶之所不レ可レ昭、衆力之所不レ可レ蔽、貴國亦知彼邦之必不二許受一而輕試以レ此、無二亦不レ諒之甚一歟。』

則ち其の書式の從來德川將軍のと異なりたるを以て傲驕欠禮となしたる也。征韓論此に於て一たび起る。

爾後屢〻使を發せしも、支那が朝鮮を敎唆し、日本に異志あるを讒するありて皆容れられず。五年八月外務大臣花房義質を派し舊藩原藩の公貿易を罷むることを報し少錄一員を釜山艸梁館に駐在せしむ。六年夏東萊府使傳令書を艸梁館門に揭けて曰く、——

『彼就レ受二制於一人、不レ恥二其變レ形易レ俗、則不レ可レ四二之日本之人一、近日來接館中、其形貌衣服、多非二日本人一、彼之變レ形易レ俗、非二我所レ管、而以三千百年自大之國一、一朝受二制於一人一、以至レ於レ此、而爲二天下所一笑、恬不レ知レ恥、出而示二我人一、亦足レ可レ慨、而況堂々禮義之邦、彼乃奚爲而至乎、』

征韓論此に於て再たび起り、猛然として朝野を風靡せしも、廟議遂に平和に決し、內閣の分裂となれり。此時朝鮮に於ても頑固鎖國の攝政者大院君退きて外交の方針一變し、七年十月東萊府使我が艸梁館長に修好講盟の意を致したりしかば、艸梁館長は歸國して政府の命令を乞ひ八年二月再たび渡航して商議を開かんとせしも、大院君は再たび出でゝ政柄を

雲揚艦砲擊

日韓修好條規

拉り居たりき。

八年八月、朝鮮西海岸より牛莊の航路を測量しつゝありし「雲揚」艦、炭水を取らん爲め漢江口に投し、永宗島砲臺の砲擊に會ひ、直ちに應戰し砲臺を破壞し水兵を上陸せしめて永宗城を陷れたり。報、日本政府に達するや、黑田清隆を全權大臣とし井上馨を副大臣として派遣し永宗島事件を責むると共に多年の要求たりし通商修好のことを迫りたり。大院君の徒、極力通商に反對せしも、日本の意氣決然たるに恐れ、清國の勸誘に應し、右議政朴珪壽及び譯官吳慶錫の陳言を納れ、遂に九年(千八百七十六年)二月二十六日修好規則を締結せり。かくの如くして日本は遂に朝鮮を開き、朝鮮は日本によりて始めて世界の朝鮮となり、日本によりて始めて自主の朝鮮となれり。八月廿四日『修好條規附錄』及『朝鮮諸港日本人民貿易規則』調印せられ、十二年八月廿六日に至り元山開港の約整へられ、十三年四月仁川開港の件承認されたり。

開國以來大院君の勢力は漸次退縮し、政權、威力、榮華一に王妃及閔族に集まれり。而も閔族に經世の才を有するものなく大院君に野心の消ゆる日なし。閔の一族謙鎬なるものあり、兵曹判書の職にあり、軍卒の食料を私するや、軍卒大に激怒し、閔謙鎬の家を圍み之を破壞し、大院君に赴き情實を訴へ閔族睹奸を誅戮せんことを乞ふ。大院君此に於て閔を倒し勢力を回復するの時機至れりとなし、鎭撫の名によりて陰に之を指揮し、王闕を圍み王妃及諸閔を殺さしめ、一方に於てはまた鎖國主義を貫かん爲め日本公使館を襲擊せしむ。

大院君の變

明治十五年(千八百八十二年)の變と稱するもの是也。

十五年七月廿三日午後五時亂民亂卒數百名、京城西大門外にある我公使館を襲擊せり。花房公使等防戰七時間、血路を開きて京畿觀察使の營に至り、入れられず、王宮の門を扣たきて入れられず、揚花津に逃れ仁川に逃れ、仁川に於て再たび暴民に襲擊せられ、海に泛ひて英艦に乘せられ三十日長崎に達せり。外務卿井上馨は報を得て直ちに馬關に出張し訓令を公使に授け、再たび入韓して韓廷の罪を責めしめ、朝鮮全權大臣李裕元、及び副官金宏集と仁川に會し八月三十日左の條約を結へり——

賠償及び謝罪

一、自今二十日を期し兇徒を捕へ、巨魁を究めて之を懲らすべし。日本官吏もまた此の究治に參すべし。
一、日本人の難の遭ふもの、朝鮮國優禮して之を葬むるべし。
一、朝鮮五萬圓を出して、日本人の死傷者に酬ふべし。日本受くる所の損害に對し、五十萬圓を拂ふべし。但し五ヶ

清國大院君を拉ふ

韓城の局一變

十七年の變

年に之を清算すべし。

一、自今日本の兵を朝鮮に駐在せしむること。兵營の設置修繕は朝鮮の負擔たるべし。但し一ヶ年の後兵卒を置くを要せずと認むれば之を撤回するも妨げず。

一、朝鮮大臣を派して罪を謝すべし。

談判の早く無事結着せるは大院君のあらざる爲めなりき。清國大院君の變を聞くや、吳長慶、馬建忠、丁汝昌、袁世凱等を派遣し、兵を率ひ艦を馳せ忠清道南陽灣より上陸し八月廿六日大院君を南大門外の營に誘ひ留めて還さず、丁汝昌をして之を護送し天津に拘致せしめたり。其の擧動迅雷の耳を掩ふに暇なきが如くなりき。大院君既に拘致せられて日韓の局は滿足なる落着を得しも、これよりして漢城の政局は一變し、支那政府の屬邦主義干渉政署の本幕開かれたり。次で十七年の變あり。

韓廷の主權者閔の一族、支那が彼等の仇敵たる大院君を除きたるを德とし漸次支那の意志に屈服せんとするや、曾つて日本に留學し、多少泰西の智識を呼吸したる朴泳孝、金玉均の徒は彼等を以て國を誤る事大黨なりとし、事大黨を殪し國政を一新する目的を以て獨立黨を組織したり。明治十七年（千八百八十四年）清國全力を盡して佛蘭西と安南に戰ひまた

賠償及び謝罪

他を顧みるの暇なきを見、日本公使の激語を發つて奬勵するを聞くや、彼等は事を擧ぐるの時來れりとなし、十二月四日京城郵政局開設の宴に於て閔泳翊が刺客の爲めに傷けられ物情騷然たるを機とし、王命を以て竹添公使に大闕の守護を乞ひ、刺客を放つて閔黨の大臣內宦を殺し、直らに獨立黨の內閣を組織せり。此時日本が仁川條約により（十五年八月以來）京城に備へたる兵は二中隊にして、清國は之れに對し二千の兵を袁世凱に附したりき。騷擾の翌日國王は大政一新の勅を國內に下さんとて左右議政を召して命を傳ふるの際、銃聲一連事大黨の復仇を報ぜり。二千の清兵王宮に攻入り、事大黨と獨立黨との爭は支那兵と日本兵との戰となり、國王恐怖して坐に堪ゆる能はず、竹添公使は事終れりとなして公使館に歸り圍を破りて仁川に退けり。日本外務卿井上馨報を得て十八年一月三日京城に入り、右議政金宏集と會議し左の條約を結びて局を決せり——

一、朝鮮國々書を修めて日本國に致し謝恐を表明すること。

一、此次日本國臣民人民の遭難並に死傷者を恤給し、竝び商民の貨物を毀損掠奪せらるゝ者を塡補して朝鮮國より十一萬圓を撥支する事。

一、禍林大尉を殺害したる兇徒を查問、捕拿し、重に從て刑を正す事。

一、日本公使館は新基に移し建築するを要す。當に朝鮮國より地基房屋を交附し、公使館竝び領事館を容るに足らしむべし。其の修築增建の處に至りては朝鮮國更らに二萬圓を撥支し以て工費に充つる事。

一、日本護衛兵舞の營舍は公館の附地を以て撰定し、壬午綏約第五款に照し施行する事。

朝鮮と談判するは赤子の手を捩るが如し、されど支那との談判は容易ならず。清兵が日本市民を殺し婦女を辱めたる憤怒の情は戰爭を以てするにあらざれば到底之を漏す能はざるが如く見へたりき。此の局を收めん爲め全權大臣として派遣せられたるは宮內大臣伊藤博文なりき。彼は戰爭の叫聲に迎へられて歸朝せり。後年馬關の『大政治家』『大外交家』たる彼が『心定め、屈辱の歎聲に迎へられて歸朝せり。

天津條約

韓城の局再變

血』を絞りて得たるは二ヶ條なりき。

一、從來朝鮮に屯在する兩國の兵を撤去する事。並に軍事教練の爲め兩國より教官を派せざる事。

一、將來、事あつて兩國兵を派せんとする時は互に行文知照すべき事。

日本によりて事をなさんとしたる獨立黨失敗し、漢城の局此に於て再變し、開國の誘導者たり、自主の認識者たりし日本の勢力は大挫折を來し、日本の名は朝鮮に於て殆んど輕侮の符號となり、支那は競爭者なく制限者なき勢力を自由に揮ふに至りぬ。天津條約にはま

防穀事件

廢王事件

た附約として、今回の變に支那兵が日本人を殺害凌辱せりとの事は、確固たる證左なきを以て、他日證左あるの時、刑に處すべしとの李鴻章よりの照會文を加へたれども、遂に何等の探究もなく處分もなく、而も袁世凱は功により駐在官に任ぜられたり。

此後、日本の朝鮮に對する政策、單に無事退縮を專一として一の見るべきものなし。鎖々たる防穀事件の談判が、方を代へ人を代へて長く結着せざりしこと、大石正巳が此の尋常茶飯の價に過ぎざる事件を決定したりとて、絕大難關を排したる東洋有數の强硬外交家の如く稱贊せられしもの、以て無事退縮政策の如何に長く行はれたるかを反證すべき也。

支那のなせし所は甚だ日本のなせし所に異なれり。十八年十月五日大院君を京城に送り歸し、十九年には露韓同盟事件の嚴重なる調査を行ひ、二十年には、王廷に萌し始めたる向露心を未だ生長せざるに芟除せんとして、兵を王闕に入れ國王を廢し、王の兄の子を立て大院君をして攝政たらしめんことを企て、二十一年には各國の勸告を排し朝鮮の意志を壓して平壤開市を否認し、其他合衆國駐劄公使朴定陽が任地到着後、先づ清國使臣を訪問せざりしとて、韓廷に詰問して定陽を召還せしめ、英佛各國公使として派遣せられたる趙臣

熙を香港に抑留し、韓廷が服制の改良をなさんとするを詰問し、事實に於て義州電線を獨占し、海關を管理する等、至らざる所なく、盡さゞる所なく、强硬の政策を行ひ來れり。

列國利害の燒點

支那の利害

五、所謂露西亞の南下(三たび)。

《朝鮮半島に於ける日、清、露》。

東洋の地圖を一見するものは直ちに朝鮮半島が列國利害の燒點たる地位を占むることを知る。日本、支那、露西亞、英吉利、――現時世界の勢力たるもの及び將來世界の勢力たるものゝ利害集まりて朝鮮半島に在り、猶ほ西歐列國の利害が白耳義に集まりて白耳義を保ち、土耳其に集まりて土耳其を有つが如き也。支那と朝鮮の關係に至りては今更云ふまでもなし。地は滿州と連なりて支那の一部たり、遠く周初箕子の時代より近く光緒年間に至るまで、大なる恩惠を支那に受け大なる屈辱を支那に受け、朝鮮の歷史は實に支那歷史の一部となれり。袁世凱曰く、『中國與二朝鮮一、東西密邇比隣也、東隣之傾覆、則西隣之庭堂、亦必暴露二於外一』と。露西亞既に黑龍江を領し烏蘇里を領し、近く圖們江を壓し來るに及

露西亞の慾望

浦潮斯德の不利

びて、此の利害は愈々緊密のものとなれり。

露西亞が朝鮮半島に南下せんとするの欲望も亦た今更說くを要せず。西方に於てはペルチック海に出口を持たねばならぬ如く、南方に於ては黑海及地中海に出口を持たねばならぬ如く、東方に於ては日本海及支那海に出口を持たねばならず。曾つてフインランドを併呑してペルチック海に出でたる如く、クリミアを併呑して黑海に出でたる如く、コンスタンチノープルに南下して地中海を制せんと欲する如く、朝鮮半島に南下して日本海及支那海を制せんと欲する也。浦潮斯德の軍港、如何に宏大なる規模を以て築かるゝも四ヶ月の氷結は其の利の六七分を滅殺す、更に南方に良港を有せずんば悉比利亞の廣地は手足なき不具者たるに過ぎず、歐亞に誇る大帝國は遂に半身不隨者たるを免れざるなり。現領土極南の浦潮斯德より更に南方に眼を注げば、圖們江を越へて朝鮮半島に到着する外なき也。既にクルゼヤ葛藤の時に於てすら、露西亞は之を口實として支那と戰ひ朝鮮を呑まんと欲すと風說するものありき。印度攻擊に頭腦の半以上を絞るペテルブルクの參謀本部の少壯士官中には恐らくは早くより朝鮮半島併呑の私語ありしならむ。英國軍艦が巨文島を占領した

るの際、露西亞もまた之に對する策に出づべしと思はれたる際、浦鹽斯德の新聞は論じて云へるあり――

『元山津は朝鮮の北邊に位し寒威頗る酷烈也。假令氷結の時間は浦鹽德斯港と長短の差ありと雖、氷結するの點に至りては一也。故に元山津を認めて周歲不凍の良港となすは誤れり。畢竟此の如きは、我が當局者が良港を得んとの意急なるを以て、單に眼を元山津に注き、氣候の良否、風土の善惡を査明せざるの誤謬に出でし也。假りに元山津を以て果して吾人の希望を滿足せしむる良港となし之を占領するも、未だ以て我が東洋海軍の根據となすに足らず。……元山津を占有して風强なる我が海軍根據地となさんと欲せば、必ずや圖們江を横斷して、元山津に至る沿海一帶の地を我に領有し、便道を築設して平時戰時の用に供せざるべからず。……如かず日本政府と外交談判を開き、曾つて我が海軍の占據したる對馬島を我に申し受けんには。日本國と雖、相當の報酬を得て、敢て之を謝絶せざるべし……。』

遠大なる露西亞人の眼は浦鹽斯德に滿足する能はざるは勿論、元山津にも滿足する能はずして早く對馬まで達したりし也。然り、露西亞の眼の對馬に注げるは此の時より始まりしにあらず、『曾つて我が海軍の占據したる對馬島』と云へる如く、千八百六十年（文久元年三月）對馬を占領し、家屋を建て海軍根據地を作り、日本海に横行したりき。露西亞は長く此の好地位を忘る能はず、事あれば則ち、其の眼は朝鮮海岸を南下して對馬に到着せり。これ豈に日本を戒しめ、對韓策をして單に對韓策に止まらざらしむる所以の一にあらず

や。

此の如きは英國の忍び得る所にあらず。西方に於てペルチック海の口を塞ぎ、南方に於て黑海の口を封するが如く、東方に於て露西亞艦隊を浦潮斯德の凍氷の中に鎖すにあらずんば、中央亞細亞に於ける弱點を補ふ能はず。露西亞一たび南方に好根據地を定め、露艦一たび太平洋に泛はゝ、地球の表面到る處に散居する兒孫を有する老婆は、傳家唯一の重寶なる海上權を安全に有つ能はず、財貨、庫に滿つる印度を保つ能はず、生産極めて少なく人口極めて多き本國を有つ能はざるを恐るゝ也。されば『アフガニスタン』に於ける衝突に際しては早くも眼を東方に注ぎ巨文島を占領し、殆んど支那の歡心を失はんとするに至るまで之を占領し、漸く露西亞が朝鮮に手を着けざるべき約束を得て撤去し、日清戰爭に際しては東方に一大勁敵を作らんとするに至るまで、支那の同盟により露西亞に對せんとの政策を繼續したりき。

日本の忍び能はざるは英國の忍び能はざるが如き度にあらざることは今更ら云ふまでもなし。唇齒の關係と云へる語、既に日韓の地位を説明して餘蘊なし。極めて鎖細なる統計に

島國たる日本の唯一希望

至るまで之を證明す。

朝鮮に於ける外人(千八百九十二年調)

	日本	支那	北米	西歐
	九八九〇	二五五六	八〇	一〇五

朝鮮に於ける貿易(千八百九十三年調)

	日本	支那	露西亞
輸出	一、九四九、〇四三弗	一、九〇五、六九八弗	二五、四一四弗
輸入	一、五四三、一一四	一三四、〇八五	二〇、九一四

政治上の關係に至つては此の如き統計の到底云ひ顯はし得べき所にあらず。島國たる日本は對馬を飛石として一夜に達するを得べき朝鮮なくんば、大陸の舞臺に加はるべからざる也。朝鮮一たび支那の版圖に歸す、日本は既に權威を以て、亞細亞の舞臺に加入する能はず、朝鮮一たび露西亞の版圖に歸す、日本既に權威を以て世界の舞臺に加入する能はず、彈丸黑子の窮天地に孱居して、過去の歷史を讀むが如くに現今の形勢を傍觀するの外なき也。戰爭をなす能はざる國民は以て外交をなす能はず。朝鮮の我側に立つあらずんば日本

明治初年の外交家の注意

少なくとも朝鮮との攻守同盟

は大陸戰爭に加入する能はず、大陸戰爭に加入する能はざる日本は大陸外交に加入する能はざる也。臺灣棄つべし、琉球失ふも可なり、されど朝鮮を失ふたる日本は活動的、膨脹的國是を一すたりとも行ふ能はず、『智識を世界に求め大に經綸を行ふ』能はざる也。活動的日本、膨脹的日本は最要最重の條件として少なくとも朝鮮の確實なる獨立を要求し、獨立せる朝鮮との鞏固なる攻守同盟を要求す。これなくんば日本は地球の表面に存在する能はざる也。唐の盛時に於て支那の文明を日本に傳ふる媒介者たりし朝鮮が、日清戰爭に於て日本の文明を支那に傳ふる媒介者たらんとし、日本をして世界の舞臺に活動せしむる媒介者たらんとするは、よく日韓の關係を說明するものにあらずや。明治初期の政治家、果して如何の計算を有したるやを知らずと雖、彼等の眼中には確かに露西亞黑鷲の影ありき。江華島砲擊、修好條規締結の後、來りたる朝鮮の修信使歸り報告して曰く、——

『詳探日本事情、方今與十七諸國通商、而値此信使、邀接館驛、照例無厭、外務卿政府大臣、俱各設宴、國君引見勞問、其大臣以富四亞地方逼近朝鮮北方、密嗾備禦之策』

先づ朝鮮を開き第一に修好條規を結び、劈頭『朝鮮は自主の邦也』と內外に宣言したるは

朝鮮の自主

征韓論を破りて平和主義を確定したる日本政府の適當なる方法なりし也。既に利害の燒點たるべき朝鮮を自ら征服せずと決したる以上は、必ず他の此に利害を有するものが之を征服することを否認し、朝鮮は自主獨立の國たることを明らかにせざるべからず。かくて朝鮮の獨立を宣言したる政府は、正當の順序として獨立の事實を正し、獨立の權威を有たしめんが爲め、東洋の安危を脅やかさゝらしめんが爲めに多少の力を用ひたりき。或は郵政を敎へ、或は韓兵を訓練し、其の財政の困難を救はん爲めには十五萬圓の償金をすら免除したりき。

朝鮮に於ける三ヶの政策三ヶの彩樣

過去に於ける朝鮮半島の局面を解拆せば、日本の獨立扶植政策と支那の屬邦干涉政策と露西亞の南下併呑政策との競爭消長と云ふべき也。而して三政策自ら三個の彩樣あり。

日本當初の平和政策

日本の外交政策は內治政治家大久保利通の時代より勳爵政治家侯爵大勳位伊藤博文に至るまで總て平和主義なりき、殊に朝鮮に對して然りし也。江華島の暴擧を責むるに際しても、政府は全權大使黑田淸隆に訓令して、我が主意は交を續ぐにあるを以て、全權使節たるものは和約を結ぶを主とし、彼能く我が和交を修め、貿易を廣むるの求に順ふときは即ち此

天津條約以來日本の平和主義

を以て「雲揚」艦の賠償と看做し承諾すべしとの意を含めたりき。而も此の平和政策なるものの我が爲さんと欲する所を爲すための平和政策にして他を恐れての平和にあらず。されば平和の意を大使に含めて派遣したる時に於ても、陸軍卿山縣有朋をして兵を率ひて下ノ關に屯し全權大使の報を待つて爲すあるの意を示さしめ、軍艦を釜山に派して警戒したり。而して率先して朝鮮最初の締盟國となり、誘掖者となれり。されば十五年の變に關する談判に於ても、我が公使は韓廷の言を左右に托するを無禮として京城を去り、遂に公使館に兵を置きて不虞に備ふるの條約を結びたりき。されば十七年の變に際しても、十五年に一跌したるに拘はらず、藏書と詩文を以て誇れる儒生公使は二中隊の兵を率ひ王宮を守護したりき。此時に於て、日本は飽くまでも獨立扶植の政策を貫くべしと思ひたるものは、豈に只だ日本の助力によりて事を成さんと欲したる朴、金の徒のみならんや。而して鹿鳴館の外交家以來、假裝會の政治家以來、十七年の政治家以來、天津條約の外交家以來、此の平和は遂に屈辱の平和主義となり、淸國を憚つての平和主義となり、「事なかれ」「爲すなかれ」の平和主義となりしこそ是非なけれ。第四議會の明治廿五年十二月衆議院議員の或る

ものは外務大臣陸奥宗光に質問して曰く――

第一回帝國議會に於て明治廿四年三月五日を以て當時外務大臣青木周蔵は本議員等朝鮮事件の質問に答辯し其終に臨み政府在來の朝鮮政略は方針の變ずたることなきを保せず必らず之ありしならんと雖も今後は之を一定して變ずるとなかるべしと云へり以來茲に二年に垂んとす而して政府は青木周蔵の所謂「一歩も日本の尊嚴を失はず」との實を亞細亞各國就中朝鮮に對して擧げ得たるか本議員等をして其の然らざるを疑はしむるものあり即ち左に事實を擧げて之を云はん

一明治十六年三月日本政府は朝鮮政府と約束して九州釜山間海底電信線を架設せしに十八年七月朝鮮政府は約束に背戻して支那政府に北京京城間陸路電信線を架するとを許諾し併せて今後二十五年間朝鮮内地の電信事務を支那の監督に任せたり

當時日本政府は朝鮮に對して其の約束に背戻せしを詰問せしも終に要領を得る能はず數年にして朝鮮政府が京城釜山間陸路電信線を架設せしに滿足し而して其線が支那監督の下に在るを措て問はざる者の如し

是に於てか京城釜山間陸路電信線は往々にして我國官民の電信を取扱ふに殊更に遲緩不便の事あり廿五年六月大院君邸内事變の時の如き最も著しとす

二明治廿二年九月咸鏡道觀察使は當時同地農作の凶歉にして米穀供給の欠乏なるを口實とし防穀令を發布して道内人民をして米を日本商人に賣らしめず加之ならず朝鮮官吏は日本商人が代を拂ふて米を受け取らず或は之を受取りて居留地外より居留地内に運ばんとするの路にて之を押收したり其防穀令は廿三年四月に及び漸く撤去せられたりと雖も其間在元山港日本商人は皆に貿易を障礙せられたるのみならず又其の損害は積んで十餘萬圓に上ぼれりと云ふ以來二三年間日本商人は百方請求して政府の朝鮮より損害を要償せんとを希望するも未だ結了を見る能はずと云ふ

三明治十六年十二月日本は朝鮮と兩國漁業規則を取替したり其後濟州其他の沿岸にて規則の實施を延期したり是要するに朝鮮政府の要求に出て以て實施の準備を爲さしめたるのみ廿四年八月濟州其他の沿岸にも亦右規則を實施せし

に廿五年濟州牧使は日本漁人の來り同島沿岸にて漁するを禁止且之を逐拂ふに至れり日本漁人は皆に規則上常に得べきの權利を失ふのみならず其の損害も少なからず

以上は本議員等をして日本の尊嚴を失へることを疑はしむるものなり若し果して如斯き事ありとせは日本人は何に由つてか安全に朝鮮と交通することを得んや之を要するに

一日本政府は朝鮮電信條約に背戻せしを其儘に默止せしは如何

二京城釜山間陸路電信線の電信を取扱ふ有樣は如何

三日本政府は防穀令損害の要償に付朝鮮と已に談判を開きたるか且は其の談判の有樣は如何

四日本政府が朝鮮の漁業規則を無視したるに付處分するの手段は如何

以上の諸項に付政府は詳細の答辯を爲し果して一歩も日本の尊嚴を失はざりしを證せんとを望む

鎖細の出來事なりと雖、また十七年以後の平和主義の一端を知るべく、其の結果の一端を知るべし。外務大臣自身すらも政府在來の方針は變じたることなきを保せずと白狀せねばならぬことゝなりし也。曩に佛蘭西牧師が拿捕せられたる時に於ては、釜山管理官を通して朝鮮に引き渡を要求したるを見たりしもの、十年ならずして巨文島の占領が英國と支那と、露國と支那との間に交渉せらるゝを見るに至れり。

日本の獨立扶植政策は十五年に一跌して支那の屬國干渉政策をして意を專らにせしめ、十七年に再跌して露西亞の南下併呑政策を招くの端となれり。露西亞は日清兩勢力消長の機

一石を以て二鳥を撃つ

に乘じて其の楔子を打ち込み來れり。

十年の頃『其爲に中國所屬に、固天下所に共和に、其爲に自主之國に、亦天下所に共知に』と曖昧冷淡の言をなしたる支那政府は、十五年の變亂に際し、敏捷の擧動を以て大院君を拘致し『朝鮮爲に中國藩服之邦に』と宣言し干渉政策を實行し來りぬ。支那は何が故にかく屬邦干渉政策を實行するに至りし乎。一は日本が、歴史に於て支那外藩の一たりし琉球を其の版圖に加へたるを嫉み、日本が朝鮮の爲めに力を盡すは遂に琉球になせし所を以て朝鮮に加へんとするものにあらざるかを疑ひたれば也。一は露西亞の爲めに黑龍江を取られ烏蘇里を取られたるを悔ひ、烏蘇里の併領によつて直接朝鮮と接壤したる露西亞は、機一たび來らば容易に南下し朝鮮を併呑すべく、一たび朝鮮を併呑せば、三面より滿州を席卷すべきを恐れたる也。支那の政治家は實に一石を投じて二鳥を斃んと試みたり。されば十七年の變に於て日本の手を抑ゆるや、再たび日本をして手を出さしめざらんが爲め、露西亞の野心を挫かんが爲め、朝鮮をして萬事支那の意志を奉し眞の藩屏たらしめんとせり。

全權公使曾紀澤千八百八十七年一月の『亞細亞每季評論』に投したる名高き論文『支那は眠れり覺めんとす』に於て曰く——

『爾後朝鮮、西藏及支那トルキスタンの藩屬に對して敵意を狹み、或は其の政治に干涉するものあらば、北京政府は此の如きことをなす國を以て支那政府との親交を破らんと欲するものと認むべし。』

朝鮮、西藏、土耳其斯坦に對して禍心を包藏するもの、これ豈に暗に露西亞に對する宣言にあらずとせんや。

支那政治家の配慮は杞憂にてはあらざりき。されど其の施政は往々にして意外の結果を生したり。其の强硬なる干涉政策は往々にして湯武の爲めに民を驅る桀紂の政策となれり。露西亞が漢城の局に手を下し得べき罅隙は實に支那が干涉政策を行ふの極、激成したる反動の結果にあらずとせんや。而して支那をして隨意に忌憚なく權威を振はしめたるもの、千八百八十四年(十七年)以來日本の平和無事傍觀政策なりとせば、日本の政治家たるもの、豈に露西亞の陰謀をして鼠の如く京城に入らしめし責任を免れ得べしとせんや。

千八百八十六年(明治十九年)黑龍州總督コルフの覺書に云へるあり、——

『千百八十四年(十七年)十一月日本の朝鮮攻擊の企圖露顯し、清國また各種の陰謀を施すに當り、朝鮮は使節を派して臨時我に請ふて其の防禦を依賴せり。時に陛下は小臣の電報に對し、其の請求を容れ充分救援を加ふべしとの答を

なさしめ、又た日本東京に在勤する公使館書記官レベール氏を朝鮮に派し實地の事情を探らしむるに至れり。』

早くも十七年に於て向鑛の芽は萠したりし也。而して千八百八十六年(十九年)には袁世凱をして同盟事件探究の面倒を見ずして止む能はざらしめたりき。同盟事件落着の後袁世凱諭言四條を朝鮮王に上りて曰く——

一曰、立レ國如レ立レ室、中國與二朝鮮一、東西密邇比隣也、東隣之傾覆、則西隣之庭宇、亦必暴露二於外一、世凱西隣人也、見二東隣之室將レ欲レ傾、每日叫呼二於東隣之門外一曰、爾室宜二急修理一、不レ然必傾、其智者聞レ之、知二其冒之不レ醒、忻然應レ之、其愚者見レ之遡然、反以爲二東隣之室欲於西隣一何干と、乃日語二於此一、不二雖不レ應、且甚惡レ之、於レ是偶心者、必從レ此開レ門、聽二棟撓榱折一、而不二相咀問一、多情者仍復不レ辭二勞怨一、時々勸告、惟恐二隣室之傾覆一、況世凱已代修數次、能不レ顧レ心耶、

二曰、朝鮮如二被舟一、水已腐朽、蓬已零落、必易レ木換レ蓬、以求二其固一、縱現在無二力重修一、亦當下隨レ時查看二漏處一、設レ法彌縫上、不二暫同舟有二小人一、希圖二舟中金幣一、不二惟不レ肯二彌縫一、而且故意搖撼、使二舟沈陷一、而後可下挑二金幣一以逃上、如二世凱充爲二舟匠一、已代修數次、殿下及諸臣民、皆舟中之人也、爲二舟匠一任二其搖撼一、倘舟一時疎忽、修レ之不レ及、舟中人不レ知漂流二何處一矣、世凱來レ此、去冬至レ今、不レ及二十月一、始而穩顯德事、繼而金玉均事、既以二今年七月事一、已撥二其舟一將レ沈者三、世凱充當二松匠一、豈不レ難哉、

三曰、治レ國如レ醫レ病、朝鮮病入膏肓、善醫者必苦二良藥一、然良藥苦レ口者、不レ知其利二於病一也、遂惡而絕レ之也、於レ是有下以二甘美之味一進者上、病者玄二其適一口而食レ之、一食而病劇、再食而病革、至及レ不レ可レ救、而後知下進二美味者一適レ害、即已晚矣、

四曰、一國如二一身一、而徒藉二其服一、而室如二懸磬一、無レ飲無レ食、其何能久、治レ國者宜二先修二內政一、後務二外觀一、譬

レ之人虛腹充腦、雖二衣服簡陋一、亦無レ所レ損、不レ然飢餓不レ堪者、即日衣文繡、其何以生、此必然之理也、

また時事急務十款を呈して曰く——

一曰、任二大臣一、大臣者當世受二國恩一、與レ國同二休戚一者也、其爵已顯、其祿已榮、所謀者無レ非下安二國家一保二宗社一而永遠之計上、國家之永遠、則其祿位永遠也、宗社永遠而其勳名永遠也、況諸大臣中、多有二閥歷一、多知二大義一、縱不レ能レ建二奇功一、亦不レ至レ僨二大事一、信レ之任レ之、民服國安、然亦須用レ之必不レ疑、疑レ之則不レ用、方能有濟、

二曰、厚二親臣一、親臣愈於二己之名利一而不レ顧二國家之安危一、一進得レ倖、能以二小忠小信一、固二人之心一、小善小惠、悅二人之意一、始即甘言巧計、無レ所レ不レ至、甚者賣レ國求レ榮、何所不レ爲、其爲レ禍可二勝道一哉、夫小人者、非レ無二小才之可用一、然祇可レ分二謀各司一、效二其片長一、而不レ可下日親二君側一、與聞二國政上、就使二玉均、泳孝、英植等一、初無二親信之極一、祇奔走於各司之下一、豈有二甲申之禍一耶、

三曰、用二庶司一、一人之聰明材力、斷難レ勝二萬幾之紛紜一、故聖如二堯舜一、尙有二幾歷之戒一、苟事無二鉅細一、必斷二於上一、積久弊生、疎淡隨レ之、小人因以隱蔽之政、扞二外若三權歸二於上一、其實已移二於下一、此從古之弊、而爲國之所レ然也、爲庶事分任於庶司一、而殿下綜核二其大綱一、計二其得失一、明二其賞罰一、則不レ勞而自治、不レ擾而有レ成矣、

四曰、收二民心一、此時民心渙散、急願二挽回一、民爲二邦本一、未レ有二本勳而技葉能茂者一、然所謂收二民心一者、非二小恩小惠之謂一也、近年水旱疾疫、民困已極、如擇二二極弊之政一、實力去レ之、再由二各司大臣一、選擇二賢守一、令興レ民興レ利去レ害、而久任以課其殿最、民無レ不二翻然向レ化、如二響斯應一、如二影隨レ形者也、

五曰、釋二猜疑一、前者上下交疑、人盡謀レ身、此事之所以日廢、而不レ能二振作一也、爲殿下振二頹起レ衰、破レ疑乾レ斷、可レ疑者退レ之、可レ信者進レ之、使二人々各盡二其所長一、猶疑之間、渙然氷釋、即臣下感奮、共濟二時艱一、政治無レ不二蒸々日上一矣、

六曰、節二財用一、量レ入以爲レ出、古人皆然、近年庫儲支絀、國債積累、求二諸實事一、則所爲無二一成一效、益急於不急

之務、小人得レ資富強爲レ名、而自求二利益一耳、如二典鹽局製藥局機器輪船等事一、無レ非二善政一、然以二朝鮮之時勢一論則不レ宜レ急レ此、宜先修二內政一、明二財之源一、而認二其力行一、節二財之流一、而事必求レ實、國帑充裕、家給人足、然後次第爲レ之徐圖二富強一、如不レ量二財賦之出入一、而只務二外觀之侈大一、將二成効無一、而費眼日益、財用竭而貧窮極甚、失レ今不レ治、不レ可レ爲矣、

七曰、慎二處明一、君レ人者一國之元首、臣下賢愚、皆賴二君上之採擇一、每有二不肖群小一、希圖二非變一、幸レ災樂レ禍、於レ中取レ利、欺罔之弊、百計叢生、或揣摩二上意一、因以利誘、或甘言悅レ耳、以快二聽聞一、或發レ辭危レ聳、以翼二恐動一、此俱雜類之輩、可レ與而不レ可レ近者也、醫レ官者須先審二其官之能否近理一、能察二其官之果否屬實一、稍有二欺罔一、則屏棄遠方一、以濟二進賢之路一、倘明知二姑容一、養レ癰遺レ患、將誤既日見二其多一、正官日見二其少一、非二國家之福一也、引レ正去讒、湯武所二以興一、引レ讒去レ正、桀紂所二以亡一、殷鑒不レ遠、可レ不レ慎諸、

八曰、明二賞罰一、夫賞罰者、政令之本、人心之所レ係也、賞必信、罰必行、而後可二以治一國、臣下或功或罪、使二有司論斷一、一秉二公正一、毋二其糾紛一、不レ存二毫私見一、則賞罰明、政令行、人心亦洽然歸服矣、

九曰、親レ所レ親、中東相依數百年矣、人心固結、亦非二一日一、朝發夕至、緩急可レ共、且能親密相依、則外人不レ能間、既誥亦可二自息一、人心賴以奠安、宗社賴以永保、然所謂親密者、非二外面之具文一也、必推レ誠相與、兩國一心、彼此相信、無二事不レ濟、況有二中國之聲援一、外侮不レ作、正可勵レ精圖レ治、力謀二富強一、亦何不利之有、

十曰、審二外交一、外交者萬國耳目之所レ係、而亦爲二國之要務一也、宜責任二外署一、認真周施、外則盡レ禮、內示以信、方可レ久敦友誼、各自相安、如號令不レ一、政出二多門一、不二但取一笑於各國一、并將レ見二疑於外人一、且有二不肖輩之居心叵測、藉端愚弄、以自逞二其狡啓鯨吞之計一、取レ亂之道也、如事無二巨細一、必有二諸大臣公議一處之、則何至レ有レ陰、謀何至レ有二陰禍一、何至レ有二甲申之變一、

朝鮮禍亂の因を摘發し頗る要領を得たりと云ふべし。言屢々甲申の變に及ぶと雖、また一

亦大藏一轉して向露黨となる

方に於て念頭常に露西亞を離れざるを見るべく、以て半島に於ける支那政治家の立脚地を知るべし。而して家愈々傾き舟愈々動き病愈々革まり、世凱等の爲す所、干涉に過ぎ壓抑に過ぎ、王妃及閔族をして漸次嫌惡の念を增さしめ事大黨より一轉して向露黨となり、曾つて支那によりて所謂日本の野心を挫きたるが如く、露西亞によりて支那の干涉を脫せんことを思はしめ千八百八十七年(明治二十年)袁世凱をして廢王の大事を計畫して露西亞黨を撲滅せんと欲するに至らしめたり。干涉甚しくして向露心を反動し來り、露西亞黨增加して干涉愈々甚しく、干涉愈々甚しくして向露心愈々激成せらる。因果循環するものなくんば、如何に露西亞の陰謀を以てするも、ウェーベル夫妻の妙腕を以てするも、漢城外交の鍵鑰を握ること此の如く容易なるを得んや。

露西亞の手によりて支那の干涉を免れんとするの念增進するもの故なきにあらず。千八百八十八年の頃(明治廿一年)モルレンドルフに代りて李鴻章より遣はされたる朝鮮顧問デニーの『朝鮮論』一篇を著はし、大に朝鮮獨立自由の義を唱へ、朝鮮政府は此の著者が內外人士の注意を喚起するに乘して獨立の檄文を發せんと欲すとまで風說せられたりき。朝鮮顧問

デニーの獨立論

の資格を以てしたるデニーの獨立論、實は露西亞公使ウェーベルが五萬金を與へて草せしめたるものなりき。曾つて朝鮮の開明、進歩、富强を冀ふの外、一點の私なき公明正大の日本か唱へたる獨立論には耳を傾けず、昔時豐公征討の舊怨を挾み、好意の敎導誘掖に對して仇をなせしものが、遂に支那の屬邦干涉政策に堪ゆる能はずして露西亞の獨立論に救を呼はんとす、運命因果の循環是非もなき次第なりとは云へ、其の經過を回顧すれは豈に慨然たるなきを得んや。

露西亞が朝鮮の獨立を唱ふるや、日本の如く獨立の爲めに唱ふるにあらず、幸福の爲めに進歩の爲めに唱ふるにあらず、之によりて支那の干涉を排せんが爲めにあらずや。支那の干涉を排し、日本をして日實なからしめ、獨立の名によりて孤立の實を與へ、かくて後自由の運動をなさんが爲めにあらずや。近時『莫斯科新聞』が『朝鮮は何國の保護をも求むべからず若し保護を要せば露國保護の下に置くべし』と云へるもの最も簡明直實なる解釋と云ふべき也。其の日清勢力の消長の際、獨立扶植政策と屬邦干涉政策との消長の際、巧みに楔子を打ち込み來る蹟を見れば、誰か爲めに悚然たるなきを得んや。

六、東亞の局遂に如何。

日清戰爭は朝鮮半島の局面を一變したり。日本は再たび權威ある言語を以て朝鮮の獨立自主なることを宣言し、支那の屬邦干涉政策は此處に終を告げ、露西亞の南下を拒ぐべき責任は直接日本の肩上に負はせられたり。支那が屬邦干涉政策を行ひつゝある間は、朝鮮半島に於ける日本と露西亞とは客と客との交際なりき。日清戰爭の結果が支那の手を禁じたる以來、朝鮮半島に於ける日本と露西亞とは主と客との對面也。屬邦干涉政策が拒ぐ能はざりしもの、日本は是非とも獨立扶植政策を以て拒がねばならぬことゝなれり。而して此の第三の變局に際して露西亞は確かに其の楔子を深く打ち込み來りたりき。曩日征韓論、修好條規の當時に於ては、最低の方法として、朝鮮の獨立を扶植し、鞏固なる親交を結ぶの政策を擇び得たるもの、日清戰爭後、馬關條約後の今日に於ては、最高の方法として朝鮮の獨立を扶植し鞏固なる同盟を望むの政策を擇ばねばならぬことゝなれるにあらず耶。而して此の最高の政策さへも芝罘に於ての批准交換以來、遼東還附承諾以來、其の活動の

英國の殷鑑

日清戰爭と露西亞の運動

範圍を制限せられ、外交の運轉進退々以て殆んど唯一の方法となさねばならぬことゝなれるにあらず耶。此の外交や、曾つて中央亞細亞に於て、キバ、ボーカラ、コーカシトに於て英國の爲めに運用せられ、確實不斷なる露西亞の侵略を防遏すること能はざりき。

日清戰爭の傍觀者として最も活潑なる運動をなせしは今更ら云ふまでもなく露西亞也。朝鮮半島及び滿州に對する露西亞の意向の種子は此の危機に際して著しく膨脹し來れり。東學黨の反亂、朝鮮內治の危急に對する支那の出兵に對して、日本が混成旅團を仁川に上陸せしめたるの報、ペテルブルクに達するや、露西亞政府は猶豫なく、最も强硬なる詰問を日本政府に送りたり。「日本は何故に露西亞の繩張りの中に無斷にて躙み込みし乎」——外交の辭令固より此の如き露骨のものにあらずと雖、其の口調は確かに此の如き詰責的意味を示したりと傳へらる。馬關條約決定の後、三國同盟の張本として最も活潑なる運動をなせしものも亦た露西亞なりき。彼の太平洋艦隊として日本海、支那海に泛びたるもの

艦名	艦種	噸數	速力
アドミラル、ナヒモフ	裝甲巡洋艦	七、七八二	一六、七
アドミラル、コルニコフ	一等巡洋艦	五、〇〇〇	一七、五
リンダ	二等巡洋艦	二、九五〇	一四、八
クレーセル	仝	一、五四二	一三、〇
ラツプシニツク	仝	一、三二九	一三、〇
ザビアカ	仝	一、二三四	一四、五
マンヂユル	砲艦	一、二二四	一四、〇
フレーツ	仝	一、二一三	一三、五
シウオツチ	仝	九五〇	一二、五
ポープル	仝	仝	一二、〇
一等水雷艇	四隻		
水雷艇	六隻		

は戰爭の繼續する間に於て漸次增加し、アドミラル、チルトーフが批准交換の場所芝罘に於て一瞬の機を待ち砲門を開かんと準備したる時に於て、增遣軍艦は左の如き著大の勢力に達したりき。

艦名	艦種	噸數	速力
ニコライ一世	戰鬪艦	八、四四〇	一四、八
パミアツト、アツヴア	裝甲巡洋艦	六、〇〇〇	一八、八
ウラヂミル、モノマツク	仝	五、七九六	一五、二
ウヂコアク	仝		
グラミアスチー	裝甲砲艦	一、五〇〇	一五、〇
オツトウアズニー	仝	仝	仝

示威運動は成効せり

ウオストツク	砲艦	一、四五六	一三、〇
アレウト	砲艦	一、三三四	一三、〇
シラウチ	仝	五〇〇	二二、〇
ヂツツト	コルベツト	仝	仝
ナエズトニツク	仝		
ガイダマツチ	水雷砲艦		
ウザドミアツク	仝		
スウイホルク			
レバル			
バルゴ			
水雷艇	四隻		

陸上の警戒もまた怠るなく、四月の末にはオデツサに補充士官を集め、五月二日には浦鹽斯德に豫備兵を召集し馬匹を徵發し、東部悉比利亞總督の令下に現役豫備各々二萬五千を出し得るの準備をなし、浦潮斯德に戒嚴令を施き、何時にても交戰を始め得べく、三ヶ月以上の交戰を繼續すべきの準備整へりと云はれたり。これ日本が開戰の目的を貫き、多くの財を費し多くの血を流し、遼東半島に堅固なる堤防を築き、以て朝鮮半島の獨立を安全ならしめんとするに對しての示威運動なりき。示威運動は成効せり。朝鮮は鴨綠江よりの

馬關條約と露西亞新聞

聖彼得堡新聞

ノーオエ、ウレームヤ

復仇及び圖們江よりの侵略に其の背を暴露すること日清戰爭以前と少しも異ならず、日本の外交官は徒らに京城の黨爭を調停彌縫するの外、何事もなす能はず、朝鮮は依然たる腐敗、擾亂、弛廢の朝鮮也。

馬關條約を批評せる露西亞新聞の口調殆んど同一轍に出づ。露西亞外交の機關として知られたる『聖彼得堡』新聞は曰く——

『日本が滿洲の南部を占領して、朝鮮を此新領地と今後日本の支配に屬すべき海面の間に挾み、以て朝鮮王國の獨立を空名に歸せんとするは、何人も看破するに難からず。加之、日本は渤海灣に横行し、北京原野の防衛たる軍略上の要地を占め、滿國帝都の鎖鑰を握るに至るべし。是れ日本の名譽心が、絶東に於ける權力平均を危ふするものにして、歐洲各國が冷淡視する能はずと宣言する所以なり』。

同じく官緣ありと知られ、時としては半官報と稱せられたる『ノーオエ、ウレームヤ』曰く——

『露國は斷じて、日本が朝鮮に保護の政策を加ふるを許すべからず。地理を以て論ずれば、旅順口は朝鮮の咽喉を扼するの關門なり。』

舊守國權黨の機關たる『莫斯科新聞』は曰く、——

『露國は日本をして朝鮮に保護權を張らしむる能はず、且決して張らしむべからず。

モスコウ新聞

露國未だ朝鮮に爭ふ能はず

是れ對韓政略の本義にして、吾人は之より一歩も退くべき理由なし。我前途の外交運動は、必ず此本義に基づかざるべからず。

本問題を決行するの良策は、朝鮮を露國保護の下に置き、其國の獨立と、其平和的發達を擁保すること、猶夫のボーカラ國を我が保護の下に置くが如くするにあり。自餘の歐洲列國は此に對して露國を詰難すべき理なし、何となれば露國の利害の朝鮮に對するや甚だ密にして、露國のみ獨り此國に勢威を及ぼすの權利あればなり。』

『露國は將來、或は日本と提携して運動するの時あるべし。故に今日日本と爭はず、反て現時の事件に乘じて、出來得る丈けの實益を收むることを勉むるを上策とす』と云ひ、遼東半島に關し無益の干渉を試むるを非難する『ルースコイドボードストオ』の如きも

『事若し露國の利害に重大の關繫を有する朝鮮半島に關せば、其の讓地は固より辭すべからず』。

と云へり。新聞は時々警報を傳へて曰く、「露西亞は此の機に乘して朝鮮に對する宿望を實行せんとすべし」。曰く「露西亞は馬關條約に於て打ち込みたる楔子を益々深く打ち込むべし」。曰く「朝鮮よりの撤兵を要求し來らんとす」と。露西亞は果して此の如く性急なるべき乎。彼の大帝國の政治家は、常に充分の時機熟したる後にあらざれば其の志望の實行に着手せず。さらば此の如き時機既に來りたる乎。恐怖の眼、敵對の眼、防禦の眼を以てするも然らず、況んや攻擊の眼、侵畧の眼を以てするをや。悉比利亞の大原野が迅速なる交通

サヨーフカ事件

慶興條約の例

の便を欠く間は、東歐に於て如何に強大なる勢力を有するも、中央亞細亞に於て如何に強大なる壓力を加へ得べきも、東亞細亞の局に充分の手腕を振はんことは、長崎の消防夫が龍吐水を運んで江戸の火事を消さんと欲するが如き也。試みに之をサヨーフカ村境界事件に問へ。露領ポシエット沿岸ヤムチハの西數十里、サヨーフカと稱する朝鮮人の一村あり き。千八百六十年の北京條約には此の村の管轄を定めざりしかば八十二年の頃、琿春の清國官吏來りて清國の保護に賴るべきを令し、露西亞の境界委員は之を聞き來りて事實を糺し清吏を捕へ、遂に兩國政府の葛藤となり、交戰にも及ばんとするに至りて露西亞は讓歩せり。露西亞は何が故にかく容易に讓歩をなせし乎。未だ意志を貫徹する程に強からず、時機尚ほ至らざるを知りし故にあらずや。降つて之を慶興條約に問はん歟。圖們江南二百里の富寧は江岸の慶興まで讓歩せられ、一百里の空地は一里に讓歩せられたり。當時漢城の形勢を以てすれば、露西亞にして必ず最初の要求を貫かんと欲せば必ずしも方法なきにあらざりしならん、而も强て之をなさゞりしものは、未だ意志を貫徹する程に強からず、時機尚ほ至らざるを知りし故にあらずや。慶興條約の當時を以て之を今日に比す、東西に

於ける露西亞の實力、固より幾多の進歩を見たるに相違なしと雖、其の最大の計畫――これなくては何時までも著大の進歩を見るべからざる最初の計畫――悉比利亞大鐵道は未だ成効せざるにあらずや。露西亞は未だ、コンスタンチノープルに加ふる壓力、印度に加ふる壓力の十一分の一を朝鮮半島に加ふる能はざるべし。我等の眼を以てするも朝鮮半島に於るけ露西亞の時機尚ほ早し、況んや露西亞自身の眼を以つてするに於てをや。而して今日、露西亞が朝鮮半島事件に對して、遼東半島事件に對して強硬なる態度を示すものは、思ふに一種の牽制的運動にあらざるなきを得んや。征清第一軍が鴨綠江方面を脅やかし奉天府を脅やかし、敵をして此處に勢力を集めしめ、虛に乘じて旅順口を陷れたる如く、強硬の態度を以て日本及び支那の主力を朝鮮半島及び遼東半島に牽制し、悉崖直ちに落ち來るの風を示し對手をして他を顧みるに暇なからしめ、而して他の方面に於て自由なる運動を試みんと欲するにあらざるなきを得んや。露清境を接する三千二百哩、手を着け得べき弱點は到る處に在り。露西亞の最強點にして支那の最弱點たるカシユガル、クルジヤ、甘肅に關する近時の報知は、多少此の推測を強むることなくんばあらず。露西亞の竦手妙腕、果

して此の如き耶、否耶。時機、露西亞の爲めに尚ほ早しと雖、其の來るや甚だ遠きにあらず（悉比利亞鐵道に關する一章參照）。

正直なる佛蘭西の『フイガロ』は三國同盟が日本の遼東占有を否みたるを論じて曰く――

『列國たるもの、爰ぞ能く列國が、他日分取せんと欲する處の獲物を、日本の所有となすことを許すものならんや。』

露西亞が滿州の地に思を掛くるは朝鮮半島に思を掛くるに讓らず、而して其の然る所以もまた朝鮮半島に思を掛くる所以に異ならず。悉比利亞鐵道の設計者は早くより、明白なる支那領滿州を横斷して浦潮斯德に達する最便最近の線路を劃し、此の設計を實行せんと試みたることありき。滿州なくんば露西亞は朝鮮半島に南下する目的を達すること難く、達したる後も之を安全に維持すること難からん。三國の干渉によりて遼東半島を回復し、滿州の土地、一點一劃も他の手に渡さずとの傳說を全ふし得たる支那の責任もまた重からずや。劉銘傳曾つて論じて曰く――

『露西亞皇帝はトムスクより黑龍江省二百哩以内のウラジオストツクに至る延長三千哩の鐵道布設を命令したり。これ露西亞大河の口直ちに我が滿州踏査に向ふた警告す。我邦をして未だ遇からざる時に於て自ら强むるの策を講せしめよ。而して之を爲すは鐵道延長に優るものあらず。』

満州の守固からず

支那公債擔保

可惜哉、大鐵道の計畫は破られたりき。支那にして敏活に應ずるに敏活を以てし、準備に應ずるに準備を以てするにあらずんば吉林、寧古塔、三姓、齊々哈爾の要地以て頼むべからず、愚比利亞貫通鐵道完成の曉に於て、露西亞は黑龍江に於ける其の地位を固め、スンガリ江に飲ふて進むの機會を攫み得べき也。

支那は露西亞に對する兵略上の弱點に加へて自ら好んで恐ろしく大なる弱點を迎へたり。

支那の政治家は日本に拂ふべき償金として募りたる公債を如何に始末せんとする乎。干渉の張本露西亞は信用地に落ちんとしたる支那の爲めに保證せり——

清國政府に於て、額面金額四億法を以て、千八百九十五年の四分利附清國金貨公債を發行するに附き、卿(大藏大臣)は朕の命令に依り、清國政府と卿の選定せる佛蘭西及露西亞の銀行及金融所との間に立ちて、其媒介者たるの任を負へり。因て卿に命ずること左の如し。

第一　如何なる事由あるに拘らず、千八百九十五年の四分利附清國金貨公債の定期利札及當戳證書に對する支拂のため、必要なる金額にして、約定の期限に該支拂を爲す銀行及金融所に渡されざる場合には、露西亞政府の計算を以て、卿の定めたる條件に依り、該目的に必要なる資金を、其銀行及金融所に拂渡すべし。

第二　政府への抵當品及物產稅支拂の擔保品として、千八百九十五年の四分利附清國金貨公債を收納するに附き、該公債の權利及特權を規定すべし。

千八百九十五年六月二十三日(露曆)

ペテルブルクに於てニコライ(御親署)

公債保證の結果

露西亞は何が故に支那の爲めに盡して此の如きに至る乎。彼れは自ら曰く何の求むる所なし、只だ永く兩國の修交を有たんと欲するのみと。直ちに報酬を求むるの周旋は如何なる性質のものなりとも恐るべきにあらず、最も恐るべきは報酬を求めざる周旋にあり。個人は時として無報酬の勞苦をなす、今日の國家は決して無報酬の勞苦をなすものにあらず。

英國の『スペクテートル』論じて曰く——

露西亞は一千六百萬磅の金貨四朱利付支那公債を保證したり。是れ近代の外交上、最も驚く可き、最も遠大の結果を豫想せる政策の一にして、絶東に於て實に一新時期を開く。

今日まで支那は全然自立獨行せり。外より來るもの、毫も支那の政治的獨立を侵すを能はざりき。佛蘭西と英吉利は屢々支那と爭ひ、支那を敗りたり。然れども支那は外國との爭ひに於て、決して、毫も、歐羅巴列國の助力に依頼せざりき。支那が外國を度外視し、輕蔑するの態度は今日まで一たびも變りたるとなかりき。然るに此支那は今や俄然として、外國と結び得可き最も親密なる關係を露西亞と結べり。

一國が他の國の公債を保證するは其國へ金を貸すに等し。露西亞は斯の如くして支那の債權者となれる也。國と國とが此の如き關係を結ぶは一方が他方に從屬するか、然らざれば兩者の間に親密なる同盟ありて、富める國が貧しき國を救ふを以て、自國の利益とする場合に限る。

公債の保證與らるゝや、二國の關係は其瞬間より一變するもの也。保證する國は保證さるゝ國の保護者となる。保護さるゝ國は保護する國の指導に隨つて動かざるを得ず。

支那は海關稅を以て公債の抵當に充つ。即ち公債の利子は海關稅を以て支辨さるゝ筈也。今試みに日本が再び支那と

開戰し、其港灣を封鎖し、其海關稅の收入を停めんとするとありと假定せよ。一年以前の露西亞は毫も自國に關係なしとして之れを度外視することを得可かりし也。然れども今は然かする能はず。露西亞は先づ日清の戰爭が海關稅の收入を停め、爲めに露國をして支那公債利子支辨の責を負はしむることなきや、否やを考ふ可し。而して若し此事ありと考ふれば、直に干涉を入れ、支那に讓步を勸めて開戰を避けしむるか、然らざれば日本を强迫して支那を攻擊することを止めしむ可し。盲ひ換ゆれば、來らんとする三十年、若しくは其れより以上の間、露西亞は支那の運命を其手に握りたるに等しく、總て支那の外交方針を左右することを得る也。否な、左右せざる能はざる也。我國は貴國公債の保證者なるが故に、貴國をして破產に赴かしむることを能はず」。此簡單なる數語を以て北京に駐在する露國大使は、支那の外交政策に對し、可否の權を行ふを得る也。

公債保證は其自身に於て一の代償也。然れども露西亞が之れを以つて滿足するは只一年の間のみ。露西亞の最後の目的は此の如く限少のものにあらず。此春の周旋の際に、露西亞が有形の讓與を得たるにせよ、將た得ざりしにせよ、晩くか、早くか、支那は露國の東洋政策の爲めに犧牲となるを免れざる可し。

最初に露西亞が要するは滿州の片端也。憑比利亞鐵道をして滿州を通過せしむるを得れば、實に數百哩の道程を省く可し。今一層遠き目的は日本を制壓するも、是れ也。露西亞は北太平洋に於て日本の雄飛を許すまじと決心せり。遼東より日本を逐ひ出したるも是が爲めに外ならず。將來に於ては益々支那を利用して日本の興隆を妨げんと試む可し。

嫉妬の眼はよく實情を穿ち得ることあり。李鴻章幕下の秀才羅豐祿慨然として曰く、——

『北京政府が露國の保證の下に一千五百萬磅の外債を起したるは正しく露國が大に清國に干涉すべき端を啓きたるものなり。蓋し我清國政府の財源の大なるもの二あり、一は海關稅にして他は鹽金稅なり。海關はロバート、ハートの監理の下に充分に整頓して、其收入著しきも、以て中央政府の費用に充つるのみにして、地方の各省に及ぶ能はず。

鹽金稅は長髮賊亂後の經濟を支へむが爲めに、曾國藩の始めて之を湖南に施したるもの。今や清國新たに日本と戰ふて、國努窮乏せり。軍國の費我は如何にか之を支出し得るとするも、新たに起したる千五百萬磅の償金に對しては、割地の外負に之を支辨すべき途なきなり。李鴻章の名は諸外國に著しきも、其威望の及ぶ所は僅かに中央政府の一部及直隸省に止まるのみ。海陸軍の全部悉く其手中に在るが如くなれども、北洋水師大臣としては、北洋艦隊と淮勇とを左右し得るのみ。淮勇は精銳の練兵以て大に依賴するに足る。然れども奈何にせん李が淮勇を統御する代りに、中原の二大兵中の他の一大兵たる湘勇には、著しく嫌惡せらるゝの實あるとを。

此故に今日に於て、李鴻章の威望は固より以て曾國藩に及ぶべくもあらず。假りに之と相伯仲するものとするも、李が如き多くの敵を有する身を以て、湖南の君子と綽名されたる天下無敵の有力家が創始したる鹽金稅に加ふるに、更に幾倍の徵收を以てせむは思ひも寄らざる事たり。若し强て鹽金稅を增加せむか、所在不平の徒機に乘じて蜂起し、禍害の出る測るべからざるものあらん。現に目下四川の哥老匪、滿州の馬賊、中央政府の命令に應ぜざるものあるにあらずや。此の如くして償金の支途之を海關稅に求むると固より能はず、鹽金稅に求むると亦不可なり。我主公は如何に此償金を支辨せらるべきか。思ふに今後露國は償金の保證と云ふを以て、大に我政府の處措に干涉せむと袁世凱が高麗半島に干涉を試みたるより一層の緊切を加へむ。

此故に、予は切に、我東洋の諸國及東洋と離るべからざる關係を有する歐洲の諸强國が、充分に此際に運動して露國の異志を挫き、其東下の端を未成に防遏せむことを希望するものなり。償金支辨に對して地を割くの事は今日に於て萬止むべからず。既に地を割きて之を彼に投ぜむか、東洋の大局面に虎踞龍蟠すべき彼が根蔕は乃ち成らむ。』

露西亞は遂に朝鮮半島に達すべき乎。支那はよく滿州を壓し來る露西亞の南下を拒き得べき乎。日本はよく東亞に於ける露西亞の南下を拒ぎ得べき乎。我等は既に東歐羅巴に於ける形勢を論じ、中央亞細亞に於ける形勢を論じて多くの言を費せり。讀者若し、頻を以て

類を推し、或は朝鮮の國情を以て衰退せる土耳其に比し、或は分裂せるキペ、ポーカヲ、アフガニスタン等に比し、關係諸國の成績を彼に比し此に較へて默考するあらば、半夜或は悚然として恐れ、慨然として歎し、憤然として衾を蹴りて立ち、或は最も恐ろしき夢に魘はるゝことなくんばあらず。若し夫れ更に露西亞の力量を詳にせんと欲せば、乞ふ『露西亞の同化力』を論ずる一章に就きて商量せよ。

露西亞の同化力

第一、雜駁なる人種。

天然は露西亞を作りて一大帝國の座となせり、歴史は天然の指定したる大帝國を成就するに適當なる人民を附與したる乎。我等は既に露西亞の膨脹力の甚だ強大なることを探知せり、此の強大なる膨脹力を有する國民は幾何の凝結力を有し同化力を有する乎。露西亞の土地の如く到る處同調一樣なるものは他に其の類を見ず、而して露西亞の土地の如く雜駁なる人種を有するものも亦た他に其類を見ず。あらゆる生活、あらゆる言語、あらゆる宗教、露西亞に標本を有せざるものは殆んど少なし。歐羅巴露西亞のみを以てするも、其の有する人種の數二十に降らざるべく、更に詳しく各處に散在する小部落を穿鑿せ

ば其の數を二倍し三倍するに至るべし。千八百六十七年「スラブ」人大會に際してモスコウに建てられたる「ダシュコフ」博物館には、生人形によつて學術的にまた實際的に露西亞各人種散布の狀況を示せるものあり、ルロア、ポリユー之を記して曰く——

『地圖的方法に從ひ整理せられたる廣間の北側には「タンクーツ」、「ヤクート」、悉比利亞の「ブリアート」に次で、馴鹿の皮衣を着、「エスキモー」に似たる「サモエート」及び蒙古人を聯想する「ラップ」を見る。降つて西方にフインランドの「フイン」農夫及びバルチック州の「エスト」あり、其の扁平なる面は「ラップ」及び「サモエート」の遠族なることを示す。東方に於てはボルガの流域に散在する他の「フイン」人種あり、其の面貌、歐羅巴國に異ること愈々遠く、愈々卑賤なり。「ベルミアン」、「ウオチアーク」、「チエレミス」、「モルタビン」及「チユバシユ」の中に散れるカザン地方の韃靼女子は「かつぎ」の下より東洋的美貌を示す。此の群に面して西側には「レット」、「サモヂチアン」及び「リスアニアン」最後に「ピエロルス」——即ち長頭鋭鼻なる「猶太」商工民と著しき反對なる方面の四露西亞住民又は白露西亞住民あり。室の中央なる廣きプラットフオームには帝國の主人「ベリコルス」(大露西亞人)諸職業の別を立て各地方の風俗を示して安置せらる。男は長き飾靴或は短き上靴の如きラプチを穿ち赤きシヤツ或は長き絲のカフタンを着け、女は花やかなるサラフアンを着け冠樣のココシユニクスを戴く。「ベリコルス」の下には更に優麗なる容貌を爲し更らに雅樣高貴の衣を着けたる「マロルス」(小露西亞人)あり、男は高き羊皮の頭巾を戴き、女はリツボンを以て花の如く飾る。小露西亞人の後に「ポールス」見ゆ。次て、四より東に至り、ペサラビアの「モルダビアン」、クリミア韃靼貴族、「ジプシー」、「猶太人」等南方の諸種族あり、最後に新露西亞又はポルガ下流の獨逸殖民あり。室の四南方に於ては亞細亞的容貌を有し鮮美なる衣服を着けたる「ステップ」の回々教徒及び佛教徒、長く尖りたる頭巾を戴く「キルギツツ」、細目黃色にして優美なる絹又は天鵝毛を着けたるスタプロポル及びアストラカン地方の「カルミク」を見る。其の次には赤き上衣を着けたるオレンブルク又はウフア地方の「バシユキル」婦人あり。南端に至れば

世界に於て最も秀麗なる容貌を有し最も鮮美なる服を着けたる高加索の種族に含す。次て黑き質素のカフタンを着けたるアルメニア商人あり、更に進んで赤きモロツコ皮の靴を穿ち、胸に厚紙のポケットを當てたるカフタンを着け、頸に駱駝の毛のバシユリクを掛けたる「チエルケス」、次に皮紐を以て編みたるラプチ、アルカルーク(股引の種類)及び長き袖、開きたる襟のツオカを着けたるジヨルジア人、次に木色帽の上衣及び薄木綿のかつぎを着けたるミングレリア婦人、次に絹の羽織、太織り絹の袴を着け、鼻環を掛けたるアラクツス地方の「クルド」婦人、絲の上衣のアルメニア婦人、黑きペチコートのジヨルジア婦人あり。廣室の最も遠き彼方に群がるバク地方の半裸眞「ゲヘルス」は火を崇拜する教徒の最後の名殘なり。

殆んど總ての人種、風俗、宗教は露西亞大帝國の中に集められたり。露西亞風土の同調一致に驚きたるものは、また其の住民の混淆雜駁に驚かずんばあらず。而も此の天然の同調一致なることは、また人種の混淆雜駁を來す重なる原因たらずんばあらず。西にも東にも侵畧者を防禦すべき天然の疆界なき露西亞は亞細亞より歐羅巴に向ふ移住民の大道なりき。平野坦々漠々たる露西亞の地を穿鑿すれば最も複雜なる最も混亂せる最も夥多なる最も變形なる人種の層を發見す。信憑すべき歷史以後に至りても、露西亞の地に殖民し、幾何かの時日の間、國を成したるものを擧ぐれば、曰く「シス」曰く「サルマチアン」、曰く、「ゴス」、「アベル」、「ブルガル」、「オングル」又は「ポンガリアン」、「カザル」、「ペチヘチク」、

同胞の天然はまた人種の混合を來す同化の原因

「リスファニアン」、曰く蒙古人曰く韃靼人、曰く何、曰く何、一々枚擧するに勝ふべからず。

天然の疆界なき平野は、此の如く如何なる人種にても迎へたり。而して迎へ入れられたる人種は天然の疆界なき平野に於て個々別々の國を建つること能はず、前のものは後のものを防ぐ能はず、後のものは前のものを侵さずして止まず、恰かも際涯なき太洋の水が大波小波前波後波漾々として相追ひ相迎ふが如き也。言語、宗教、風俗の差異によりて混同する能はざるものも、長き間相隣りて住み、一歩一歩互に他の領内に行き違はずんばあらず。而して或るものは茫漠なる平野を充たさんとて分裂し、或るものは長き間の動搖によりて薄弱となり、恰かも河身に散點する小沙洲の如く大水一たび來れば總て押し流されて混同するが如きに至れるものなきにあらず。露西亞の土地にして若し現にあるが如く同調一樣ならざりしならば、かくも多くの人種を有せざりしなるべく、一旦多くの人種を迎へ入れたりしならば、天然と歴史とは相待ち相助けて、何時までも此の人種の混同を許さゝるなるべし。英國の如き小天地に於てさへも、天然に於けるイングランド、スコットランド及

びアイルランドの區別は、何時までも「イングランド」人、「スコットランド」人及び「アイルランド」人の區別を保存し、混同一致せしむること難し。若しも露西亞の如き大國に於て此くの如きものあらば、露西亞は今日の如く一國として存在せざりしやも未だ知るべからず。

歴史は多くの人種、血液を露西亞に集め、天然は此の多くの人種、血液を調和融合す。強大なる國民は多くの人種血液の調和融合より化成し來らずんばあらず。基督教の教化とモスコウの權威とは此の調合融合を助け、かくて六千萬乃至七千萬の露西亞國民なるもの發育し、太洋の島を呑み岸を食ふが如く、中央に散點する小種族、邊疆に群居する大種族を同化しつゝあり。

第二、統合せる國民。

露西亞大帝國の中に居住する人種の數、今尙ほ五十以上に及ぶことは、決して露西亞が明白なるナショナリチーを有することを妨げず。露西亞は澳地利の如く土耳其の如く、異人種異教徒が單に政治的作用によりて彌縫せられたるものにあらずして、寧ろ佛蘭西の如く確固たる國民的統一を有す。

異種族、異宗教の人民の住するは多く邊端の地にして、中央には膨脹の力と併呑の力とを兩つながら有する强健なる國民あり。其の調和融合の密なる、他の西歐諸州に於て多く見ざるものあり。旅行者は此の地方に於て同調なる天然を見る如く、同調なる言語を聞き、同調なる郡市を見、容貌、生活、習慣に至るまで同調なる農夫を見る。露西亞中部の如く方言の差少なく、土風の別少なき國はあらず。

同調一樣なる露西亞の天然が森林と「ステップ」との二大部分に區別せらるゝ如く、露西亞

の住民にも自ら二つの區別あり。一を大露西亞人とし他を小露西亞人となす。一はモスコウを中心とし、他はキエフを中心とし、一は北東に擴がりボルガの流域より漸次森林地方を充たし大湖よりウラルまで擴がり、次で南進しボルガ及びドンに沿ふて黑土地方にまで達したる間に、他はドニエペル、プク及びドニエステルの間に鎖されたり。外に尙ほ白露西亞人あり、其の誕生に於ては最も古く其の血液に於ては最も純粹なるものなれども、モイレフ、ピテベグ、グロドノ、ミンスクの如き富饒なる森林にして而も最も不健康なる地方に住み、長き間露西亞人と波蘭土人との爭鬪の間に介立して發達を止められ、大露西亞人の數が四千七百萬乃至四千八百萬に達し、小露西亞人が千七百萬乃至千八百萬に達したる間に、僅かに四百萬內外に止まれり。

大露西亞人は最も强健なる膨脹的活動者なりき。五六世紀の頃ドウイナ及びドニエペルの上流――露西亞諸大河の水源たる地方より發し、最大の河ボルガに從ひて移住し膨脹し、南進し、イヴワン三世、四世及びペートル大帝の時代に至りて俄かに方向を西に轉じてバルチックの舊土を恢復せんと求めたり。

最初の移住及びフイン人同化

されど此の種族が露西亞の地に根據を定め遂に露西亞人となりしは、急激なる戰鬪の結果にあらずして、始めより緩徐なる同化の結果なりき。現時露西亞と稱せらるゝ土地の大部分は頭圓くして脚短かく、顏面平らかにして頰骨高く、目細く鼻廣く、口大にして唇厚き「ウラロ、アルタイック」人種と稱せらるゝ者の一族「フイン」人の住居なりき。彼等は其の容貌に於て既に然るが如く「スラブ」人より劣等の人種にして、其の數は大平野を充たす程に多からず、彼處此處に散布して、孤立遊牧の生活を營めり。されば優等人種なる「スラブ」の移住民は漸次露西亞の中原に進み來り、劣等人種なる先住者を東はペルチック海の方へ追ひ、西はウラル山の方へ押し、殘れるものを容易に併呑し同化し得たりき。スツダル、ウラヂミル、トフエル、リアザン、モスコウの都市皆な「フイン」人が住せる土地に建てられたるものにして、露西亞の教導者ペートル大帝は遂に「フイン」人の中央ペテルブルクまで進みて首都を定めたりき。

露西亞人は「フイン」人を併呑し同化すると共に、同化し能はざる韃靼人を放逐するに多くの力を費したりき。成吉斯汗の鐵騎、既に亞細亞を畧し、ウラルを踰へて露西亞の大平野

韃靼人侵來

韃靼人放逐

に落ち來り、リアザン、ロストフ、ヤロスラブ、トフエル、トルジョクの諸市を燒き、遂に西歐羅巴の中心にまで達するや、此時露西亞人は未だ全く搖籠を出でずして早くも既に粉碎せられたるが如く見えたりき。されど亞細亞の征服者は歐羅巴の征服者の如く、被征服者の內治及び宗教に深く征服者の權利を及ぼさず、只だ廣大なる土地を風靡し得たるに滿足し貢獻を受領するに滿足したりき。露西亞人はかくて韃靼人の大なる蔭の下に、自ら强め自ら養ひ、漸次他の土地を併呑し他の種族を同化し得たりき。而して韃靼人に對して露西亞の人民かなし能はざりしもの、露西亞の天然よく之をなせり。粗大なる韃靼人は隙間なく繁茂せる北部露西亞の森林地方に自由なる競馬場を見出す能はず、南東「ステップ」の饒かなる草の香を慕ふて歸り來れり。彼等が「ステップ」の遊牧競爭に滿足しつゝある間に、露西亞人は益々生長し、發達し、增加し、膨脹し、遂に全く彼等の羈絆を脫したるのみならず、カザン地方より彼等をアストラカン地方に追ひ、次てアストラカン地方よりクリミア地方に追ひ、而してカザンに於て、アストラカンに於て、クリミアに於て同化し能はざるものは漸次露西亞の外に追放せり。

「フィン」人同化の事蹟、韃靼人追放の事蹟、詳しく之を探究するの價値なきにあらざるべし、されど此の如き舊き事蹟を探究するは多くの智識と多くの時日を要す、今は只だ「スラブ」人が「フィン」人を同化し韃靼人を放逐し、其の他多くの種族と接し、之を併呑し之を同化する間に於て、自身にもまた多くの感化を受け、多くの血液を雜へたることにより て、金銀の如き純良なるものが、銅や鉛を混へて其の純粹の度を減ずるも堅硬の度を增すが如く、剛健不撓の大露西亞人となりて國民的溶解爐より出て來れりと云ふのみを以て滿足せしめよ。優麗なる人民は、比較的純粹なる血液より來り、剛健なる人民はクヴルッ、フェルドスパー、マイカの抱合か最も堅き物質、グラニットを作る如く、多くの人種、血液の混合より來る。古代のマセドン及び羅馬に於て然りし如く、近代に於ても、最も多くの人種、血液を溶解して作られたる普魯西亞人はよく獨逸を統一する力を示し、最も多くの人種、血液を溶解して作られたるピードモント人はよく伊太利を統一する力を示したり。かくの如くして露西亞大帝國の中樞たるべき强健なる大露西亞人出で來りたりき。小露西亞人を以て大露西亞人に比すれば、大露西亞人は强健なる北人にして小露西亞人は

輕快なる南人なり。彼は氷雪の子にして此は軟風の子、彼は訓練、組織の人にして意志の力に富み實行を重んじ、此は單行、獨立の人にして想像の力に富み感情に動かさる。一は義務を重んじ、他は權利を尊び、一は陰險にして善人の風を裝ひ、他は淡泊にして狡猾の風を喜ぶ。大露西亞人が韃靼人との苦鬪によりて服從、忍耐、不撓、深刻の性を養ひつゝありし間に、小露西亞人は獨立を尊び品位を重んじ、個人主義を以て西歐の文明と交通したりき。ウクレーナ及び南方「ステップ」に於て、波蘭土人、韃靼人、土耳其人の間に花々しき運動をなし、今尙ほ露西亞に於ける不羈獨立の代名詞たるべき「ザポロジー哥索克」は實に小露西亞人の一族なりき。されば獨立を重んずる小露西亞人は時として組織を重んずる大露西亞人の統治に反抗したることあり、其の夢想家は大露西亞人と分裂して小露西亞人の一國を立てんことを夢想したることありき。今日に至りて到底大露西亞人と離る能はざることを知り、離るゝことを欲せざる小露西亞人民も、ペートル大帝及びカザリン二世が奪ひたる自由の特權を恢復せんことを希望せざるは少なかるべし。

同調なる露西亞の天然は北方の森林と南方の「ステップ」との二大部分に別かたる。而かも

二大人民の結合

此の二大部分、各々別に疆界を有せず、森林は「スラップ」を離れて國を立つる能はず、「スラップ」は森林を離れて國を立つる能はず、相賴り相合して完全なる一大帝國をなすが如く、同調なる露西亞の住民も强健にして組織に富む大露西亞人と、輕快にして自主を好む小露西亞人との二大部分に別たるれども、血統、傳說、宗敎は彼等の分立を許さず、小露西亞人は大露西亞人を離れて別に國民をなさず、大露西亞人は小露西亞人なくして獨り國民をなさず、兩者相待ち相合して大なる露西亞國民を作り東歐羅巴の大平野を占有す。されば韃靼人襲來の時より大露西亞人と離れ、五世紀の間波蘭土及びリスアニアに從ひたる小露西亞人は、五世紀の長月日に於て、キエフ、ポリニア、ポドリアの貴族を除くの外、皆つて波蘭土に同化せられず、依然たる露西亞人として歸り來り、今や漸次、强健なる同胞に同化されつゝあり。

露西亞は中央部に於て最も堅し

第三、フィンランド人民。

露西亞の如く其の領土內に夥多の異人種を抱合するものなく、其の數を列擧せば五十乃至七十に達すと雖、露西亞は强健なる露西亞國民を有することは前に述べたる如し。歐羅巴領に於て約百七十五萬方哩、南部悉比利亞に於て約四百六十二萬方哩、即ち露西亞の中央部とも云ふべき約六百三十七方哩の地は如何なる懷疑性のものも之を露西亞にあらずと云ふを敢てする能はず、而して此の地に住する約七千七百萬人の中六千七百萬は既に純然たる露西亞人民なりと云ふを得べき也。されば露西亞は唯一の燒點を有する楕圓形の如く、燒點に近き中央部に於て極めて堅固にして、燒點を離るに從ひ漸次堅固の度を減じ、而して燒點に遠き圓周の部分は、近き圓周の部分よりも更らに堅固の度を減ずること多き也。露西亞國民が同化すべき責任を有する異人種の中、最も多きは「フィン」人種也。此の人種は曾つて歐亞に跨れる廣大の土地を專有したる强大の人種なりしも、漸次他の人種に併呑

せられ同化せられたりき。併呑せられ、同化せられたる後、今尚ほ露西亞に於て五六百萬の數を有すと雖も、十有餘の種族に分かたれ、其の分れたること既に久しく、其の離れたること甚だ遠く、東の種族、西の同胞に遇ひ、南の種族、北の同胞に會するも互ひに認識する能はざる程に、言語、思想、生活の差違を生じたりき。北にある「ウグラリアン」種族は僅かに二小部落と數千の人口を有するに過ぎず。西悉比利亞にある「オスチアクス」、ウラルの北部にある「ボグルス」は世界に於て最も卑賤なる種族の一として知らる。カマ流域の「ペルミアン」、ピアトカ流域の「ボチアク」、ドウイナ流域の「ゾリアン」は三四十萬の數を有すれども、年一年著しき速度を以て減少す。ボルガの左岸、カザン地方に住する「チエレミス」種族は二十五萬の數を有し、ボルガ河とオカ河の間、露西亞の中心ニジニ、ノブゴロト、ペンザ、ミムビルスク、タムボフ、サラトフ地方に住する「モルダビーン」は殆んど一百萬の數を有し、カザン地方に住する「チユバシユ」種族は更らに多くの數を有し、其他北海に沿ふて住む「サモエッド」、白海に臨める「チユード」、ウラルの麓を繞る「ペシユキル」等其の數或は百萬に達するありと雖、露西亞人の同化的勢力に服してより既に久

しきを經、露西亞人が强健の度を加ふるに從ひて漸次截斷せられ分割せられ、年々其の數を減じ、今は恰かも大洋に漂ふ小嶼の如く、連絡を斷たれたる孤城の如く、彼は此の例に從ひ、一は他の跡を追ひて陷落すること遠きにあらざるべし。

彼等が最後の墳墓なるフインランドに至りては少しく異なれり。彼等は尚ほ此處に十四萬四千餘方哩の領土を有し、二百四十餘萬の大衆を聚つむ。首都ペテルブルクの如き、地圖によりて示さる如く、もと彼等が居住せし地の中央に建てられたるものたり。ペテルブルクより滊車に搭して北に向ひ、現時フインランドと稱せらるゝ領土の中に入れば、行程二三時間にして早くも千里の異鄉に來りたる觀なくんばあらず。フインランドは特別の領土として露西亞皇帝の尊稱に加へられ、自己の行政法を保存し、憲法を保存し、議會、豫算、風習を保存することを許されたり。チルシットの條約に至るまで六百年間、瑞典の屬地領民として深く瑞典文明の痕跡を止む。露西亞が之を瑞典より奪ひたる後、先づ施せしは直ちに之を露西亞に同化するにあらずして、瑞典化せるフインランドをして本來のフインランドに歸らしむるにありき。フインランドの瑞典に屬せし時、彼等は國民たるものゝ最大

露西亞の政策

フインランドは露西亞とは離るべからず

要件たる自己の文學を有せず、瑞典の文學を奉じたりき。瑞典の手を離れて露西亞の手に歸するや、フインランド語は法庭に用ひられ、政壇に用ひられ、文學に用ひられ、漸次復活して今や再たびフインランド人民の國語となれり。最初にして最大なる要件と云ふべき文學既に然り、其の他フインランド人民が祖先より繼續したるものとして尊重すべきもの、漸を逐ふて還與せられ、瑞典を離れたること愈〻久しく露西亞に屬すること愈〻長くしてフインランドは本來のフインランドとなれり。露西亞に征服せられたる國民の中、フインランドの如く特別の恩惠に浴するものなく、寛大の待遇を受くるものなく、自然の特權を許されたるものはなし。フインランドはフインランド自身の發達につきて露西亞に感謝すべき也。而してフインランドはフインランド國として益〻發達するに從ひて愈〻露西亞と離るゝことを希はざるべき理由を有す。千八百九十三年の統計によれば露西亞本國よりフインランドへ輸出する物貨千八百五十二萬八千「ルーブル」、フインランドより露西亞本國へ輸入する物貨千五百八十三萬「ルーブル」、毎年の輸出入貿易約三千萬「ルーブル」を降らず。フインランドは露西亞なくんば食物の充分なる供給を得ず、製造品の安全なる市場を

露西亞は倚ほ滿足する能はず

有する能はざる也。若し夫れ露西亞自身に至りては首都ペテルブルクの防禦として必ずフインランドを有せざるべからず、フインランド一たび露西亞の手を離れ、敵となるべきものゝ手に歸せば、露西亞は最早『チベの白ザール』と云ふ威嚴ある尊稱を有つ能はざる也。されば露西亞は今日のフインランドを以て長く滿足すべき乎。齊一變せば魯に至り、魯一變せば道に至る。露西亞現に瑞典化されたるフインランドを變してフインランドのフインランドとなせり、豈に更らに一變して露西亞化されたるフインランドとなすの意なからんや。フインランド人が其の恩人として感謝すべき露西亞に對し、却つて常に不安、恐怖の念を懷くものまた故なきにあらず。彼等の前にはポーランドの實例あり、而して露西亞本國に於ける彼等の同胞は、彼等の目前に於て同化されつゝあり。千八百八十二年に於けるヘルシングフオルス市民不法逮捕事件、アレキサンドル三世の下に於ける反動國權黨の進歩、モスコウ製造業の爲めに總ての利益を犧牲とせる保護政策、一葉一葉フインランド人民の爲めに秋を報するものにあらずとせんや。

「フインン」人は最も正直にして最も勤勉なる人民として知らる。ペテルブルク、プスコウ附

フイン人の運命

近のみならず、遠くクリミアの半島に至るまで、彼等の移住勞働を歡迎する地主少なからず。彼等はかく勤勉なる人民なれども、其の一部は夥多の小部落に分裂して其の勢力を統合する能はず、大なる群をなせるものも最も瘠寒なる天地に追ひ込まれて、充分に勤勉の報酬を受くる能はず、獨特の發達をなし獨特の文化を營むの機會を有せさりき。かく獨特の發達をなし獨特の文化を有する能はさりしも、他の發達し進歩したる人民に模倣し、同化され能ざる程に劣等のものにあらず、自ら創設する能はさる文化を受領し適用するに著しき度量を有せり。彼等は初めより同化され易き人民なりき、瑞典と接したるものは瑞典化され、韃靼人に接したるものは韃靼化され、獨逸人に接したるものは獨逸化されたり。

同化後のフイン人

而して今や露西亞に同化されつゝあり。

「フイン」人の消極的勇氣に留める、頗る露西亞人に似たり。寧ろ其の耐久、堅忍は露西亞人にすら優るものなきにあらず。されば全く彼等を同化し終らんことは容易の業にあらずと雖、此の容易ならざる事業全く成就せらるゝあらば、露西亞は匈牙利人の如く強健にして而も柔順なる數百萬の良民、良卒を得べき也。彼等はクリミア戰爭に於て、露土戰爭に

於て、遠くセバストポールの城に於て、ブルグリアの野に於て、露西亞軍中最も剛毅不屈なる戰鬪者たることを示したり。

バルチック諸州の價値

露西亞に於ける獨逸人の勢力

第四、バルチック地方及獨逸人民。

露西亞は西歐と境を接する部分に於て未だ甚た強からさるを憂ふ。思ふかまゝに南下の政策を實行せんと欲する時に於て、背後の守備充分に堅からさるを憂ふ。バルチック諸州は實に南下する露西亞に取りて、最も堅固に守備せらるべき背後なるのみならず、其の巨身を西歐に現はすべきバルチック海の前面に當る。而して此の地方に於て露西亞の同化を妨害するものは獨逸人民也。

獨逸人民の露西亞に住むや、露西亞に取つては最も厄介なる寄生動物也。イオワン、アレキシス、ペートル大帝の西歐文明輸入以來、西歐人は漸次露西亞政府及ひ宮廷の要地に立ち、冒險的獨逸人は教師として顧問として誘導者として開拓者として陸續入り來り、公の社會に於て、私の生涯に於て、漸次重要の地位を占め、アンナの治世に於ては全く全露西亞の主權を握りたることありき。歴史は彼等に地位を與へたり。秩序的勤勉、組織的活動

バルチック諸州に於ける獨逸人

は彼等をして、武事に於て文事に於て、長く重要なる地位を維持せしめたり。かくて獨逸人は近年に至るまで露西亞に於て特權を有する人民なりき。麵包製造師、調劑師の如き普通の職業に至るまで、殆んど獨逸人の專有なりき。懇篤なるアレキサンドル二世曾つて高加索の英雄ゼチラル、エルモロフを召して親しく其の功勞を犒らひ、皇帝の力を以て與へ能ふ賞典を隨意に望むことを命するや、率直なる老將は「臣只だ獨逸人たらんことを望むのみ」と答へたりき。而して獨逸人の勢力甚た著しきはバルチック諸州にあり。

ニコラス皇帝の大臣中最も著名なるカウント、カンクリン云へるあり——

『不整頓なる分子の器械的集合に過ぎざりし露西亞が、バルチック海の獨逸領を併せ得たるは皇天の特寵と云ふべき也。此の併有によりて露西亞は漸次政治的組織体となるを得たり。此等の領地は露西亞の模型となれり、これよりして露西亞の組織的諸制度、政府、貴族、市府の如きもの續て出で來れり。』

獨逸人自身は今も尚ほかく思ふべしと雖、露西亞人にして今日此の如き誇張の言に眉をひそめざるものはあらざるべし。而も其の中自ら幾分の眞理なきにあらず、またバルチック諸州に於ける獨逸人の地位を説明するものなきにあらず。彼等獨逸人は露西亞人が韃靼人の爲めに征服せられて他を顧みる能はざりし間に、バルチック諸州を征服し、武力の司配

眞の中世獨逸の遺物はバルチックに在り

過ぎ去り獨立國となりて後も、商業によりて宗教によりて長く之を司配し、著しき勢力を及ぼしたり。都會に於て、村鄙に於て到る處獨逸人の印跡を認め得ざるはなく、獨逸本國に於てよりも、却つて露西亞の領土たるバルチック州に於て完全なる中世獨逸の保存せられたるを見る。されば詳細なる觀察者は論じて曰く――

『獨逸が露西亞に對して危險なることは、確かに其の佛蘭西に對して危險なるよりも甚し。佛蘭西の方面に於て「ホーヘンゾレン」の帝國は實に強固なる國民と相對し、之を同化する緒を握ること能はず、此に侵入すること難し。東方に於ては然らず、獨逸と普魯西亞とは年と共に徐々膨脹し來りつゝありき。』

歐羅巴の問題の中、バルチック州の問題の如く多くの著書論文を集めたるものはあらず。而も此の如く多くの注意を惹起するもの、獨逸人の數甚だ多きが故にあらず、其の數甚だ少なくして其の權甚だ多ければ也。統計は此地に住する各人種の百分比例を示して曰く

	土人	獨逸人	露西亞人	其他
エストニア	八七、六	七、九	四、〇	〇、五
リボニア	八七、二	一〇、六	一、七	〇、五
クールラント	七九、六	一〇、六	一、六	八、二

バルチック州人口二百三十餘萬の中、獨逸人は十分の一に充たず、僅かに二十萬內外のみ。

少數の人口眞大の權力

露西亞人の獨逸人を見る仇敵の如し

二十萬內外の獨逸人は土地、特權、威力、名譽、總てのものを專有す。統計はまた土地分配の實狀を示して曰く

總計面積	八、四九七、〇〇〇（デシアチン）
貴族所有（獨逸人）	六、一六八、〇三七
國有	一、四五七、七八〇
農民所有（土人）	二一五、六七七
僧侶（多くは獨逸人）	九〇、九九八

而して三州に於て貴族と稱する獨逸人の數六千內外に過ぎず、以て如何に獨逸人の特權の大なるかを知るべし。土地も獨逸人の有也、商業も獨逸人の有也、工業も獨逸人の有也、政治も獨逸人のもの也、權力も獨逸人のもの也。無上の專制を以て治めらるゝ露西亞の中、此の地方の如く專制に壓せらるゝものはなし。此の如き不自然の狀態は露西亞人、バルチック人の共に憤慨する所たり。「チユートン」人に對する「スラヴ」人の殆んど先天的嫌惡は此の如き狀態に激し、また伯林會議の怨恨を加へて愈々甚しく、ベラルブルク、モスコウ等の新聞は屢ゝ國民に檄して獨逸人排斥を叫び、熱心なる愛國者は街上獨逸人に會ふて鐵拳を用ひんとすることなきにあらず。露西亞人のみならず、バルチック人民自身、特に

人民と人民の結合

リスアニア農民の間にも二三十年以來、活潑なる國民的運動始まり、獨逸人の妨害を排して國語を回復し、文字を創造し、新聞を發刊し、改革を要求し、時として暴を以て暴に報ひ、力を以て力に對し、一揆嘯聚の騷擾を見るとあり。

獨逸人に對する此の共同の嫌惡心は露西亞とバルチック諸州との締紐たらずんばあらず。特別の狀態により不便の地位に立てる露西亞は未だ直接の力をバルチック諸州に用ふる能はずと雖、此の感情を籠絡して先づ獨逸の感化を滅却し、次で露西亞自身に同化せしむるを謀る。

利害と利害の一致

利害の一致はまた露西亞とバルチック諸州とをして相離ること能はざらしむ。レベル、リガ、ウインドウ、リペウ等の諸港、露西亞をして西歐諸國と交通せしむる重要の門戸皆なバルチック州に在り、リガは最大の貿易港たり、リペウは最重の軍港たり。此等のものなくては露西亞は半身不隨者たるを免れず、さればこれを得んゝ爲めに、之を保たん爲めに屢〻生死を堵したる戰爭を辭せざりき。バルチック諸州もまた露西亞と離る能はず、一旦露西亞と離れては、大陸より棄てられたる孤兒とならざるべからず、露西亞の庇護なく大陸

より棄てられたる孤兒としては獨立の生涯を營むを得ず、されば獨逸人如何に專擅の權を振ふも、バルチック諸州を强ひて露西亞より離れしむる能はざる也。

波蘭土對露西亞

併呑當時の波蘭土

第五、波蘭土人民。

多くの富を集めたるものは、其の富を維持する爲め多くの稅を拂はねばならず、多くの配慮をなさねばならず、大なる版圖を有するものは、其の版圖を維持する爲め、多くの價を拂はねばならず、多くの配慮をなさねばならぬ也。波蘭土の如きは露西亞に取つて最も大なる配慮をなさねばならぬ地なり、啻に其の地、直ちに西歐の强國と接するが故のみにあらず、其の人民は歐羅巴に於て最も治め難き人民の一なりき。

歷史は最もよく事情を說明す、されど露西亞對波蘭土の長々しき歷史を書くは、此の如き小冊子の範圍內にあらず。吾人をして只だ一言にして滿足せしめよ、六世紀間不斷の爭鬪に於て、波蘭土は露西亞に大なる苦痛を與へ、重荷を負はせ、重傷を蒙らしたり、而して終に之に相當する復仇を得たり。

波蘭土の露西亞に併呑せられたる部分は、其の初めに於ては、尙ほ立憲王國の躰を有ち、

自己の軍備を有し、財政を有し、行政を有したりき。されど波蘭土人は容易に昔日の榮華、盛大を忘るゝこと能はず、而して今日の權利は「ザール」の喜怒によりて何時奪はるゝやも知るべからざるを恐れ、機會もあらば、露西亞の羈絆を脫せんことを待ち設けたりき。此の際波蘭土の太守として困難なる管轄を委任せられたるはニコラス皇帝の兄コンスタンチンなりき。儒弱凡庸のコンスタンチンは長き間、波蘭土人が叛亂を準備せるがまゝに任せたり。千八百三十年十二月末、ニコラス皇帝宣言を發し、佛蘭西及び白耳義との開戰を諷示し、波蘭土軍隊に戰備を命じたり。波蘭土人は外戰に使役せらるゝを嫌ひ、而して叛亂の準備漸く發覺せんとするを知り、遂に意を決し十一月廿九日事を擧けたり。コンスタンチンは逃亡し、露西亞守備隊は擊破せられ、叛亂は直ちに全國に廣がり、八日にして波蘭土全國また一人の露西亞守備隊を止めざるに至れり。三十一年一月廿五日國民議會は波蘭土獨立を宣言せり。されど古來よりの悲しむべき傳說たる黨爭は此の重要の時節に於ても止むことなく、貴族黨急進黨相爭ひ相軋りつゝある間に、二月二十五日クロクーに於て、五月廿六日オストロレンカに於て、征討の將カウント、ヂエビッシユ、ザパルカンスキに

失敗

叛失敗の報酬

破られ、各地方に派遣せられたる分隊も多くは破られ、佛蘭西及び白耳義の同情を惹起せんとせしも効を奏せざりき。不運の神は尙ほ此の如きを以て滿足せず、詐譎賣國のゼチラル、クルツコウイエキか波蘭土の主權を執る間に、波斯及び小亞細亞に於て勇名を博したるカウント、パスケウイツチ、エリバンスキは征討軍の將となり、直ちにワルソウに迫れり。議會及び軍隊はクルコウイエキに賣られ、九月八日ワルソウを棄てゝモドリンに退き、一ケ月の後ちモドリンに於て最後の降服をなせり。此に於て露西亞皇帝は最早、自治半獨立の國家として波蘭土の存在するを許さず、パスケウイツチは總督に任せられ、千八百十五年の憲法は廢止せられ、波蘭土獨立軍隊は解散せられ、露西亞軍隊に混入せられ、高加索に送られ、市民農夫が藏せる武器は總て沒收せられ、波蘭土獨立を議決したる國民議會の議員は悉比利亞に流されたり。露西亞皇帝は此の如きものを以て滿足せず、從來の教育制度を破壞して、純然露西亞的の新制度を立て、波蘭土語を更ためて露西亞語を用ひしめ、天主教會を更ためて希臘教會の徒たらしむる强硬同化政策を施行せり。

千八百五十九年伊太利統一主義の大運動は再たび波蘭土人の興復心、統一心に點火したり。

第二回叛亂

露領に編入せらる

千八百六十年十一月以來、千八百三十年革命の紀念祭、クロクー戰爭の紀念祭等盛んに行はれて、人心漸く動き、少許の恩惠、少許の讓與により却つて勢焰を高かめ、中等社會、學生、天主僧侶等中心となり、街上に喪服を着け教會に革命歌を唱へり。總督其他重要官吏暗殺の陰謀計畫せられ、不穩愈〻甚しきに至り、政府は温和手段の爲すべからざるを見、千八百六十三年一月十四日、疑ふべきワルソウの青年を總て兵籍に沒收せり。激昂したる市民は直ちに假政府を立て自由の戰士たらんことを人民に檄し、露西亞政府と相並んで命令を發し、租稅を徵し刑罰を施行せり。されど千八百六十三年の波蘭土人は千八百三十一年の如く强からず、千八百六十三年の露西亞は千八百三十一年の露西亞より遙かに强く、波蘭土は速かに露西亞兵を以て充たされ、年の終を告ぐると共に叛亂の終を告げたりき。かくて千八百六十八年に至り、波蘭土は最後の自由を失ひ、純然たる露西亞國の一部に編入せられ、同化政策は益〻强硬に施行せられたり。

波蘭土人の希望の到底實行され得べからざることは、再度の叛亂を經て明白になれり。波蘭土の獨立既に望むべからず、獨逸に併呑せられたる部分及び澳地利に併呑せられたる部

波蘭土の非貴族熱

露西亞の民主政略

分と合し、リスアニア、ウクレーン及ひ白露西亞を併せて昔日の榮華を恢復し、昔日の領土を恢復するが如きは、如何なることありとも到底望み得べからざること、日を見るが如く明白なるものとなれり。千八百三十一年に於て、千八百六十三年に於て波蘭土人は此の希望を實行せん爲めに叛亂の旗を建てたり、されど波蘭土人に同情を表したるは、少數の上等社會のみなりき。波蘭土貴族の壓抑は、容易に消すべからざる憎惡を人民の心に印したり。千八百三十一年ニコラスがウクレーン人民に檄するや、波蘭土征伐の義勇兵として集まり來りたるもの二週間にして一萬四千人、ニコラスをして底止するなきを怖れしめたりき。千八百六十三年に於ても全ウクレーンの人民は波蘭土征伐の許を得んことを歎願したりき。

露西亞は此の感情を利用し、貴族を抑ゆることによりて多數人民の心を收むるの政策を執れり。かくて專制政府の民主政策なる奇怪の現象を呈出せり。單に波蘭土に於てのみ然るにあらず、フインランドに於て瑞典人に對するに「フィン」人を以てし、リーフランド或はクルランドに於て獨逸人に對し、リスアニア或はウクレーンの波蘭土人に對するに「エス

民主政略の利益

上流社會の接近

ト」人、「レット」人、「サモエット」人、白露西亞人、小露西亞人を以てし、上流社會に對するに下流人民を以てしたり。波蘭土に於ける此の政策、ニコラス、ミリウチンが最初に企圖せし如く、充分に行はれざりしと雖、千八百五十九年に於て、土地を所有する農夫の割合、僅かに百分の六なりしもの、千八百七十四年に於ては、農夫の所有する土地、全積の三分の一に達せり。かくて多數の人民は露西亞に恩惠を負ふものとなれり。マツケンヂーの『十九世紀史』に云ふあり——

『分割の時に於て波蘭土人は墮落、無智、遊惰、欠乏、醉酗、浮薄の最下等狀態にてありき。』

『英國及び露西亞』の著者、オノレーブル、ベックストン之に附記して曰ふ——

『近時英國領事の報告によりて察すれば波蘭土の狀態は最も滿足なるものゝ如し。商業、農業及ひ工業に著しき進歩あり。全國眼想以上の富饒、繁昌を來しつゝあり。』

普通人民のみならず、兩國の教育ある社會も亦た相ひ近接しつゝあるものゝ如し、チコミロフの『政治上及び社會上の露西亞』に云ふあり——

『波蘭土國に於ける商業教育を抑遏せし强制政策は多數の青年をして、止むを得ず聖波得堡及び莫斯科の大學に行かしめたり。かくて兩國民の青年は相交るに至れり。是れより前波蘭土は露西亞を知らざりき——これ波蘭土の爲めに大

なる過失なりき。波蘭土人は露西亞人民と露西亞政府とを混同し、露西亞政府と共に露西亞人民を嫌へり。今や彼等は露西亞の教育ある社會は決して波蘭土を惡まざることを知る。露西亞著者の著作は波蘭土に飜譯されつゝあり——前代未聞のこと——かくて露西亞と波蘭土とは政治思想を交換しつゝあり。我等は、幾多の政治家及び自由職業を執るものにして、波蘭土に生れ波蘭土に同情を維持しながら露西亞の利益の爲めに働くものあるを見る。」

チコミロフの著、或は餘りに喜觀的なる點なきにあらずと雖も、波蘭土人にして露西亞の爲めに大なる事業をなしたる例決して少なからず。此に擧げたるチコミロフの言、之を信用して危險なかるべし。されど露西亞の奇怪なる民主政畧は決して萬全なるものにあらず、社會的階級の爭鬪を助成することによりて、政治上の危險を存し、將さに死せんとする國家的觀念を興起し、全人民各階級、遂に一團となつて全く露西亞化せらるゝ最後の効果を納むる時の妨害たるやも知るべからざるの憂ありと雖、波蘭土人民の獨逸に對する疑懼心は、露西亞に對する嫌惡心を平均するの益なくんばあらず。而して波蘭土人の獨逸に對する疑懼心を助長したるは露西亞——露西亞自身は固より、此の如き結果を豫想して然りしにあらずと雖——の過失なりき。露西亞政府は波蘭土人を抑ゆるが爲め獨逸人を利し、千八百八十四年に至るまで獨逸人に土地買收權を與へ居たりき。波蘭土に主人たりし傳說を

有すと信する獨逸人は露西亞の壓抑政策の蔭に勢力を增進せり。獨逸の勢力は波蘭土の疑懼たらざるべからず。されば露領波蘭土の遂に獨立し能はざることを知り、露西亞を離るれば獨逸に賴らねばならぬことを知り、而してシレシア、ポズナニア及び舊普魯西亞に於て如何なる政策が獨逸によりて行はれたるかを知るものは、如何に露西亞を嫌惡するものも、露西亞を離れて獨逸に奔るの自殺的行爲をなさゞるべき也。波蘭土の進歩は波蘭土人の經營也。

波蘭土人は敏捷なる才華を有し、義俠なる武士的精神、高尙なる愛國心に富み、而して政治的經綸の能力を缺けり。政治的經綸の能力を缺けることは、由來波蘭土不幸の最大源因なりき。千八百六十三年叛亂の後、此の事實益〻明白となり、漸次夢想的方法を棄てゝ實際的方法を擇び、政治上に於て露西亞と爭鬪するとを止め、學術、技藝、工業上に於て政治上の失敗を補はんと決したり。かくて政治上の失敗は智識上の復活となり、商工の業は著しく發達し、文學美術は西歐文明の水平に達し、波蘭土人は露帝版圖內に於ける最も進步したる人民として昔日の名譽の幾分を恢復せり。カトコフの如きは波蘭土の此の復活を見

て、到底波蘭土根本的征服を完ふする能はざるに失望し、其の一部を獨逸に與へんとまで論じたりき。

而して波蘭土は其の發達進歩に從ひて、露西亞と離るべからざる關係を強くす。物質上の點より云へば大「スラブ」帝國との一致は波蘭土人に取りて最大の利益たり。大「スラブ」帝國は波蘭土の製造業、工業に取りて最廣最大の市場なり。露領波蘭土がガリシア及びポズナニアを越へて遙かに進歩し、繁昌に至りたるもの、亦た露西亞との商業的關係より來らずんばあらず。されば物質上の利益を以て最大の利益となす現時代に於て、强硬なる同化政策は時に或は昔日の敵愾心を喚び起すことあるべしと雖、頑固なる執着力の漸次波蘭土人の胸中より滅しつゝあるは疑を容れざるべし。若し夫れ露西亞の爲めに計らば、更らに細心注意して温和の方針を擇ぶを要す。

第六、高加索人民。

讀者若し北方フィンランドの地及び西方バルチック諸州、波蘭土等に於て、露西亞の同化力を滿足に了解することを能はさりしならば、乞ふ高加索及ひ中央亞細亞に於ける露西亞の施政を尋ねよ。

高加索の價値、――其の露西亞に取りて最も貴重なる所有なること、膨脹的露西亞の生死問題とも云はれたる程に、貴重なるものなることは前に屢々云へる如し。されは露西亞は之れを征討する爲めに財力を惜まず、兵力を惜まず、四十年の長日月間、一日も倦怠することあらざりき。單に之を征討するのみならず、四十年の經營其の功を奏したる後、其の征服を確實にし其の所有を安全にし、慓悍無頼の山民が住居せし地を同化して將來侵畧の根據となさんが爲めに、人情を惜まず、方法を惜まさりき。

最も强く露西亞に抵抗したるは中央高加索の山地なりき。征討以前に於て然るが如く、征

討以後に於ても、露西亞をして最も深く憂慮せしめたるは中央高加索の山地なりき。露西亞は憂慮せり、中央高加索の山地にして充分に征服鎮定せらるる間に、西歐强國と葛藤を結び戰鬪を交ふることあらば、而して對手强國にして充分形勢に通曉するあらば、黑海を渡りて直ちに高加索を衝き、慓悍なる山民を煽動し、山民と合同し、高きより降つて北方に東方に害惡を逞ふすべしと。露西亞は憂慮せり、高加索一たび手中より逸し去らば、小亞細亞方面より土耳其を壓し、波斯を壓する能はず、アラル海を專有する能はず、中央亞細亞を侵略する能はず、露西亞の勢力の半以上を減殺すべしと。此に於て露西亞は高加索最後の英雄シャミルを敗りて後、全力を高加索山地の西方の經營に用ひたり。

露西亞は一旦征服したるものを同化せずんば止まず。其の人民を同化する能はずんば其の土地を同化せざるべからず。高加索の山民は容易に同化され能ふ人民にあらざりき。故に露西亞は土地を同化せん爲めに人民を掃蕩するの方法を撰び、其の住民にクバンの谷に移住すべしとの果斷なる命令を下し、之に代りて高加索を固むべき露西亞人民の移住隊を派遣したり。高加索山民は命令を奉ぜず、力のあらん限り防戰し力盡きて後、擧つて土耳其

移住强制

利益の爲めに人情を惜しまず

に移住せんと決したり。千八百八十五年以前高加索山地の西部に住みしもの五十餘萬、其の中土耳其に移住せんとて出立したるもの約二十五萬、命令に强ひられてクバンの谷に移住したるもの約一萬、殘れるものは最も甚しき被征服者の苦痛を嘗め、陸續群をなし土耳其への移住者の後を追ひたり。移住の途中に於て散亂し死亡したるもの甚だ多かりき。此の如きは固より人情の點より視察して許さるべき方法にあらず、されど露西亞は露西亞の利益の爲めに人情を惜しむものにあらず。ファデエフ云ふあり——

『高加索山民が甚だ大なる壓迫に遇ひしことはまた打ち消すべからず、されど此は避くべからざることなりき……我等は高加索山民に不快不利なりしとの故を以て高加索征服の結果を棄つる能はざりし也。我等は彼等の半を殺すの止むを得ざるに出でし也。器を拋たしめんが爲めに彼等の半を殺すの止むを得ざるに出でし也。』

かくて中央高加索は最も安全なる露西亞の根據地となりぬ。千八百八十五年の統計によれば高加索は七百二十八萬四千餘の人口を有す。其の中二百五十九萬一千餘は前(北)高加索に屬し。四百六十九萬三千餘は後(南)高加索に屬す。前高加索住民の九分は露西亞人及び哥索克にして既に全く同化せられたり。後高加索に於ては、僅かに百分の三に過ぎずと雖、慓悍なる高加索山民もまた百分の一に過ぎず。多數を占むる「アルメニア」人、「グルシア」

人、「イメルチア」人、「クリア」人、「ミングレリア」人、「スアチチア」人、「チチエンシア」人、「アワル」人、「ダルジニア」人等は貿易、教育の發達を抑へられ急激なる同化政策に壓せられ、或は其の初めに於て自ら「ザール」の救護を請願したるを悔ひ、或は復仇の機の來らんことを望み、アルメニアの如きは『十年の間、露西亞の壓制者は自ら署名し捺印して我等に約するに「アララット」國の獨立を以てせり、「アニ」及び「ウァガラチ、バット」の舊憲法及び其の榮華の復興を以てせり。而して今や彼等は卑劣にも自己の署名捺印を否認し、「アニ」の碑の廢跡に加ふるに學校の廢跡を以てす』と云へる檄文を發したることあれども、彼等は遂に相一致し結合して北方の露西亞に當る能はず、而も南方の土耳其及び波斯の如きは到底頼むに足らざる也。今日に於て露西亞は最早、高加索所有の安全確實につき憂慮するを要せず。

第七、中央亞細亞人民（上）。

中央亞細亞に於て、露西亞は更に著しきことをなせり。亞細亞的血液を雜へ、亞細亞的文明を雜へ、早くより亞細亞人種と交はれる露西亞人は亞細亞的人種を征服し統治するの方法を知れり。半野蠻的中央亞細亞人種は所謂鐵と血とによらざれば充分に征服し、充分に統治する能はざることを露西亞人は知れるが如し。バルカン半島に於て、中央亞細亞に於て、露西亞の外交殆んど常に成効し、英國其他防禦の地位に立てる諸國の外交殆んど常に失敗に歸したるを見て、或は露西亞は武力の國にあらずして外交の國となすものあり。然り、露西亞は韃靼人の壓抑に苦しめられ、早くより外交の術數を修業せり、其の土耳其に處し、キバ、ボーカラ、ユーカント、アフガニスタンに處して巧妙なる外交の運轉を示さしりしにあらず、其のメルフをして自ら降服せしめたる後、皇后親ら裁したる衣服を非露西亞黨中勢力ある婦人に與へたるが如き、他の侵略者に於て見ざるの例なきにあらずと雖、

武力によりて征服

英國の外交と露西亞の外交

要するに露西亞の功業は外交の手段によりてに非ず、特に中央亞細亞に於ける侵略の如きは斷して武力的露西亞の功業に歸すべき也。露西亞にして若し外交の手段によりて此の如き功業を成し得たりとせば、英國は何が故に同じ外交の手段によりて露西亞をして此の如き功業をなさゝらしめ能はざりし乎。知らずや、現今の時代に於て外交なるものゝ要訣は「剛持て」なることを。更らに語を詳かにせは、言語に繼くに直ちに武力を以てする外交のみ、よく功を奏することを。英國の防禦策、一張一弛なかりしにはあらざるもまた務めざりしにあらず、而も只だ賂賄、甘言を主要なる分子とする外交は到底「剛持て」の外交に及ぶべくもあらず、語を換へて云へば外交は武力に如かざる也。露西亞の中央亞細亞に臨める外交は剛持て主義なりき、其の征服は徹頭徹尾武力の適用なりし也。

露西亞は征服に次ぐに同化を以てす、既に武力を以て中央亞細亞を征服せし後、また徹頭徹尾武力を以て之を統治せり。奴隷賣買の惡魔窟たりし中央亞細亞が露西亞に征服せられてより、一掃せられて自由鄉となり、强盜刼賊の本據なりしもの一掃せられて安全國となりしを見るもの、或は露西亞を以て文明の代表者なりとし、其の進歩を以て人情の進歩なりとなすものあり。されど一事は萬事にあらず。露西亞が中央亞細亞を征服したる後、之を同化するに徹頭徹尾武力の適用によりしことは、歷史が記せる事實之を證明す。ヴァンベリー曰く——

露西亞は西歐文明の使徒にあらず

『韃靼種族中優等なる能力を有し曾つて回々教文化を以て有名なりし五十萬内外のカザン韃靼人を見れば、確かに皮相の現象を除きて、此の頑迷なる亞細亞人の社會的及政治的生活に少しも十九世紀世界の形跡なきを知る。極めて初歩の地理學、露西亞歷史、露西亞喩話の飜譯を除けば、我等は露西亞政府が此等人民教育の程度を高むる爲めに一事もなさゝりしと斷ずるを得。』

『中央亞細亞に於ける露西亞の進歩』の著者ザレスキー曰く——

『若しも大露西亞の人民にして文明を進めんことを企圖したりしならば、若しも彼等にして功業心の外に、精力を有し判別の能力を有し、野蠻的インスチンクトを有せず、暴虐强壓の傾向を有せざりしならば、若しも露西亞政府にして基督教的思想に駕し、其の光によりて東方に於ける職分を覺知し得たりしならば、中央亞細亞の國民を教育し開發し、國家を利すべき强大の勢力を作り、而して人情の爲めに眞の功績を爲すの地位に立ちしならむ。これ却つて容易の業なりしなるべし、西歐文明傳播の大障礙たりし回々教は未た深く其の根を此の地に降し居らざりし也……されど野蠻的露西亞は人民を教育すること能はざりき。』

終極の利益果して如何なるべきかは容易に知るべからず、露西亞果して文明の傳播者たる能はざりしかも亦た遽かに斷ずべからず、我等は只だ露西亞が中央亞細亞を同化せん爲め

パシユカルの同化政略

徹頭徹尾武力を適用したるを知り、其の結果また甚だ著しきものありたることを見る。乞ふ中央亞細亞征服の門出なるパシユカル地方に於ける一端を窺はん。

パシユカルは其の初め自ら請ふて露西亞の版圖に編入せられたるものなりき。露西亞の殖民漸く繁昌し、官吏の數漸く增加するに至り、土民は漸く壓抑の苦痛を感じ、漸く叛亂を企て、千六百七十六年に至り、遂に一般の蜂起となれり。叛亂は三ヶ年に亘れり。政府は此を以てパシユカル貴族の所有に歸し極度の强硬手段を以て彼等を芟除せんと決し、從來貴族が保ちたる酋長の地位を奪ひ、之を露西亞に歸隨せるものゝみに與へたり。此の强硬政策の實行を委任せられたるはウファの新總督セルギエーフなりき。セルギエーフの暴虐は二百年を經過したる今日尙ほパシユカル人の記憶に殘る。彼はオレンブルクにありし時、ピエライア河岸に居城を建て、冬の宴會にパシユカル貴族の全數を招き、盛大なる饗應を與へたる後、氷に穿てる穴より生ながら河中に葬りたりと傳へらる。政府は政治上の壓抑を以て滿足せず、千七百〇七年漁業を禁じて生活の重要なる方法を奪ふに及び、パシユカルは再度の叛亂を起し諸殖民地を燒きカザンに迫らんとしたりき。

初度の極亂及び其の結果

再度の叛亂

三度の叛亂

再度の叛亂鎭定せられてパシユカル人漸く露西亞の權威を尊重し忠實の奉公をなし、當時有名なるタタマルの如きは總督府の爲めに一萬の「キルギツツ」を破り、ウファの總督もまた彼等に酬ふる所あり、サンクト、ペテルブルクに行きて官吏の虐政を訴へ舊時の權利を回復せんことを乞ひ、寬大なる約束を得たりしも、政府は固より約束を果すの意なかりき。幾何もなくウファの總督府オレンブルクに移さるゝや、總督府はパシユカル人に命じてキルギツツに對する新城砦線を築かしめたり。パシユカル人は、此はキルギツツに對するものにあらずしてパシユカル人自身に對するものなりと思料して命令に抵抗し、三度の叛亂を起したり。叛亂は千七百三十五年—四十年の五ヶ年に亘り、最も無慘なる鎭壓を招けり。目擊者の記する所によれば、九千の婦人及び小兒捕へられ露西亞貴族の手に渡たされて本國に送られ、三千の男子は悉比利亞の鑛山に送られて苦役に服し、七千の部落燒き拂はれ、其他戰場に死し刑場に殺されたるもの壹萬六千內外なりきと云ふ。次でパシユカル掃蕩の强硬政策益々緊しく、各部落の長は露西亞官吏を以て充てられ、鹽田は沒收せられ、從來共同財產たりし土地は廉價を以

四度の叛亂

て賣ることを強ひられ、之を買ひたる露西亞人は速やかに村落を建て工場を興し、ペシユカル人を僻地に逐ひ行けり。

壓抑益々甚してペシユカル人遂に忍ぶ能はず、千七百五十五年四度の叛亂を起し、五月十八日、ペシユカル地方に住する殆んと總ての露西亞人を殺戮せり。總督ヲプリウイエフは先づペシユカル人に代りて多くの地を領したるメスチエラク人を誘ひて叛亂を進擊せしめ、次で五萬戸のペシユカルをキルギッツ地方に追ひ、其の婦人、小兒及び家畜を餌としてキルギッツを誘ひペシユカル男子を討滅せしめたり。かくて後は手を拱してキルギッツとペシユカルとの爭鬪を傍觀し、仇敵の念充分熟するを待ちて和解を命じたり。ペシユカルは四度の叛亂によつて全く其の勢力を消磨せり。露西亞は更らに同化の効を確實にせん爲め、千七百九十八年、ペシユカル及メスチエラク哥索克を編制し、全地方を八區に分ち哥索克法を以てペシユカル人を遇し、家居、耕作の方法を一定せり。軍政は財源を靡し國民的精神を滅し、ペシユカルの子は露西亞人の如く教育せられ、遂に自ら露西亞人の如く感ずるに至れり。かくて同化の効完きに及び、千八百六十五年、哥索克制解かれ、今やペ

哥索克制

シユカル人なるもの既になく、只だペルム、ウイアトカ及びオレンブルク州の露西亞農夫あるのみ。